
フェトレアス物語～白銀の獅子～

稲本 楓希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェトレアス物語〜白銀の獅子〜

【Nコード】

N2999X

【作者名】

稲本 楓希

【あらすじ】

スピルナ公国にあるレグラ地方、そのとある街道で出会った二人の少年と少女。しかしその邂逅がとてつもなく強い運命に導かれたものだ、彼らはまだ知らなかった…。これは第二次スピルナ動乱と同じ、ユースナ暦1337年の物語。

序章 「運命の邂逅」

―スピルナ公国・レグラ地方のとある街道―

両側を林に挟まれた下り道を、少女は息を切らせて走っていた。後ろから追ってくる男の足音と怒鳴り声のはっきりと聞こえてくる。しかしわざわざ振り返ってそれを確認する暇はない。

ただでさえ、所詮小娘である自分と大の大人である追っ手とではかなりの体力差がある。その上そんな隙まで見せれば、途端に追いつかれる事は火を見るよりも明らかだ。

しかし、そうでなくても少女には限界が近づいて来ていた。

普段からまともな食事も摂れない事による体力の低下、走り続けてひどく痛む脚や脇腹や肺、次から次へと流れ落ちる汗の粒、自分の耳にまで聞こえてくる程に張り裂けんばかりに高鳴る心臓の鼓動、そういった事象すべてが、彼女にこれ以上は無理だと訴え続けている。

そもそも、男はなぜ自分を追っているのか。思い返せばそれは、あまりにも理不尽な理由だった。

しかし、それを必死で説明した所で、男が信じることは無いだろう。悲しいことに、それは彼女にとって、いつものことだった。

みなし子として生まれてから今までの人生で、運命が自分に味方してくれた事など、一度たりともなかった。自分の言うことをまともに信じてくれた人などほとんどいなかった。

いつもいじめばかりを受けて、誰にも受け入れられずに、常に孤独の中で生きてきた。

人生の中で唯一自分を愛してくれた育ての親さえも、二年前に病気で亡くなった。

その後の放浪生活の末にたどり着いたこの村でも、やはり不運ばかりが続いた。

その揚句に、あの男の店で自分が盗みを働いたと誤解されて、今こうして必死に逃げている。

まるで、世の中の幸福という幸福に見放されたような人生を、彼女は送って来たのだった。そして、それは、これからずっと続くのだろう。

ならば、自分は何のために生まれて来たのか。何のために、今、生き残ろうとしているのか。

そう考えた時、その答えは、誰にも、本人ですら見当もつかなかった。

突然、目眩が起き、急激に視界が狭まる。足がもつれ、体勢を立て直すことも出来ずに、少女は不様に道に倒れ込む。過呼吸に陥って、体に力も入らない。

ぼやけた視界に男が追いついてくるのが見えた時、力尽きた少女は心の中ではもはやほとんど諦めかけていた。

次の村に向けて街道を歩いていた彼はその時、数十メートル先の道端で何やら事件が起こっているらしい事を見て取った。年端もいかない長髪の少女が、精根尽き果てたように横向に倒れこんでいる。その目の前には、一人の男が何やら怒ったように腕を振り上げている。

男は、見たところ武器は何も持っていない様だし、中肉中背のその体格からみても、どうやら山賊などではないらしい。

ということとは、恐らくあの男は、ただの商売人か何かだろう。

多分、あの少女に大事な商品を盗まれるか、壊されるかなどとして激昂しているのだらうと、彼には容易に予測がついた。

まだスピルナ動乱と呼ばれる巨大な内戦が終結して間もなく、いまだ多くの戦争孤児を抱えるスピルナ公国では、そんな泥棒の孤児を店の店主が追いたてている事など、よくある光景だった。

孤児は、泥棒にでもならなければ生きては行けず、庶民は庶民で

戦争の間に財産を奪われたために生活に窮して、苦勞して仕入れた商品の一つ一つが命綱となっている。何よりどちらも、戦争で心に傷を負っていて、他人に構ってやる心の余裕はないのだろう。

もつとも、スピルナ公・アルデバランのお膝元である首都アルスや、その周辺の町などは、戦争が終わってから、次第に治安もよくなりつつある。

しかし、例えばこのレグラ地方などのような片田舎などは、今でもこんな差別や貧困に満ち溢れている。戦争を終結させた英雄と持て囃されるアルデバラン・アルトも、全能ではないのだ。

とは言っても、実の所、彼にとってはスピルナ公国の情勢などどうでもいいことだ。そもそも彼はスピルナ公国の出身ではないのだ。スピルナの西側に広がるガブル平原が、彼の故郷である。

それが、こうしてスピルナを旅しているのにも、ある理由があるからである。

少し話が逸れたが、とにかく理由はともあれ大の大人が少女に向かって暴力を振るおうとしている様は、見ていて楽しい物ではない。とにかくもつとよく状況を見ようと思い、彼はその現場に向かって歩きます。

諦めて目をつぶって、殴られる事を覚悟し、身を堅くして永遠とも一瞬ともつかない時間を待っていた少女は、しかしいつになっても男の拳が振り下ろされないことを訝しんでいた。

前に一度、この男の商品だった魚を盗んで、男に捕まった孤児の男の子を見かけた事があったのを思い出す。その男の子は、一も二もなくボコボコに殴られたあげくに、破れた革袋のように道端に打ち捨てられていたのだ。

その男の子が、その後どうなったかは知らないが、それ以来顔を見かけなくなった所からすると、恐らくは恐怖のあまり村から出て行ったのだろう。

この男は、近隣の村全てを引くくるめた中でも、一番の頑固者で通っていたのだ。実際、彼の魚屋で盗みを働いて、無事だった者はいまだかつていないという。

しかし、今、自分が盗みを働いたと誤解しているこの男が、自分にげんこつの一つも喰らわせないのは、一体どうしたことだろう。少女は訳が分からなかった。

しばらく横たわっていた間に、多少は息が整い、酸素が体に回ってくる内に、体の感覚も、徐々に戻りつつあった。すると、自分の近くで二人の人間が言い争っているのが聞こえてきた。

「—だから、この小娘がウチの魚を盗みやがったんだ！ テメエみてえなガキに口を挟まれる筋合はねえと言ってるだろが！」

一人はあの魚屋の男の声だった。やはり猛烈に怒っている。

「だからといって、すぐに子供相手に手を上げてるようじゃ、お前の器の広さはたかが知れてるな」

対してもう一方の声は初めて聞く声だ。声からするとたぶん、ちやうど自分の何歳か上の少年だろうか。

それなのに、我を忘れて怒鳴っているのは主に男の方だった。

魚屋よりも年下のはずの少年の方がずっと落ち着いているとは、奇妙な状況だ。

もっとよく状況を知ろうと、少女は勇気を出して薄目を開ける。

どうやら、休んでいた間に視力もちゃんと戻ったようだ。

見えたのは、やはり男と少年だった。男の方は紛れもなくあの魚屋の頑固者の店主で、もう片方の少年は多少乱雑に伸びた手入れのされていなさそうな真っ白な髪を風になびかせている。

身長は少年の方が少々高い。

「ガキイ、黙って聞いてれば、勝手な事言いやがって。これ以上ぬかすと張っ倒すぞ！」

魚屋の店主はどんどん声を荒げる。よほど子供相手に足元を見られることに慣れていないのだろう。

「まったく、安っぽ過ぎるぜ、オッサン。まあ、張っ倒したいなら

好きにすればいいけどよ。後悔しても知らないぜ」

少年はあくまで落ち着いた声で言う。

この状況でのその落ち着きぶりは、むしろ挑発に近かった。

「なんだとお！」

魚屋の店主はその言葉で遂にぶちギレたようだった。腕を振り上げて少年に飛び掛かる。

しかし、その腕が少年に届く前に、突然店主が仰向けに転び、尻餅をついた。

少女には一瞬、何が起こったのか分からなかったが、店主が飛び掛かった瞬間に、少年が目にも止まらぬ早さで相手の足を払ったのだと気付いた。

店主の方も、初めは何をされたのかも分からなかったようだったが、状況を飲み込むと始めに驚き、そして次に怒りの表情がいかつい顔の上を走り抜けた。

しかし大人の自分が尻餅をつき、少年の相手がまったく動じていないという情けない状況から、怒りの言葉を発することもできず、最後には居心地が悪くなって、急いで立ち上がると、驚くほど多岐にわたる様々な悪口をまくし立てながら走り去って行った。

「……あの、」

店主が去って行った後、少女は立ち上がり、居心地悪そうに頭をかく少年に声をかける。

「ありがと……助けてくれて……」

「…別に気にすんなよ。ただ単にオレはああいふ大人が大っ嫌いなだけだ。恩に着せたりするつもりはねえよ」

少年はぶっきらぼうにそう答える。

「ただ、ついでに言うけど、お前も、泥棒するならもっとバレないようにやれよ」

「…やってないよ。泥棒なんて」

少女は目を泳がせながら、今にも消え入りそうな小さな声でつぶやくように言う。

「ゴカイされただけだもん」

「なんだ、冤罪か？そりゃまた運が悪かったんだな」

少年は心から同情するでもなく、しかしまったく無関心という訳でも無いような中途半端な声で返す。

「それなら、今度は間違えられないようにするんだな。じゃあよ」
そういつて少年はさっさと去って行こうとする。

「待って……」

少女は自分でも無意識の内に彼を呼び止めていた。理由はどうあれ、ああして自分をいじめてくる人間から守ってくれた人は初めてだったのだ。

少女はあまりにも守られる事に対する免疫がなく、そのためにどう対応していいか戸惑っているようだった。

「なんだよ、まだ何かあるのか？」

少年は振り返って尋ねる。自分を見つめるその視線を感じて、少女は理由も分からないのに唐突に恥ずかしい気持ちになった。

「あの…お名前は…？」

なぜそんなことを尋ねたのかも、少女には分からなかった。

さっき自分で声を掛けた時から、まるで自分の口が他の誰かに操られてでもいるかのように勝手に言葉が口について出てくるのだ。

「何でそんな事聞くんだ？」

少年は訝しむように聞き返す。しかし、一瞬経って考え直したように答える。

「オレはジーク。お前は？」

「あたし…スウ…スウ・ロ・ヤマ・イシユラーク」

スウは反射的に答えた。

「…随分と変な名前だな。どこの出身なんだ？」

とジークは尋ねる。

ここスピルナ公国は元々いくつもの民族が住む国である。

当然、名前の付け方なども民族ごとに様々であるため、スピルナには多種多様な名前のパターンがあるのだが、彼女の名前は今まで聞いたことのあるどの民族の名付け方の特徴にも当て嵌まらないのだ。

だとすれば、ジーク自身も知らないような少数民族か、あるいは、出身はスピルナ公国ではないのではないかと考えたのだ。

そして、仮にそうだとすれば、なぜそんな少女がレグラ地方にいるのだろうか。

しかしスウの方はそんなジークの懸念など露知らずに、ちょっと考え込んでから答える。

「うんとね、育ったのはセル国ってところ。だけど、生まれた場所は分かんない」

それを聞いてジークは考えを巡らせる。

セル国と言えば、スピルナ公国のゾド山脈を挟んだ東側にある小国である。ラシエル教という独特のカルト宗教を持っていて、他国を認めない排他的・封鎖的な国として知られている。

そのために、今やいくつもの国が加盟している大規模な組織である『テルフ同盟』にも加盟せず、独立姿勢を貫き通している。

しかし、だからといって国内の団結が強いのかというところでもなく、国民に対して、為政者側にとって都合のいいラシエル教を押し付け、その考えを脳に刷り込ませる事で何とか国家としての形を保っているのが現状だ。

その排他的な政治姿勢から、セル国に関して他の国が知り得る情報ばかり少ない。

そこでふと、ジークはあることに気付く。

よく見ると、このスウという少女は、耳が尖っているのだ。それに、彼女の大きな瞳は、いままで見たことも無いような、宝石を思わせる紫色だったのだ。体中泥だらけで髪も乱れ、ボロ布みたいな服を着ているというみすばらしい姿のせいかな、今まで気づかなかったのだ。

それは、彼女がただの人間では無いことを如実に表していた。

「…お前一体、何者なんだ？」

ジークは半ば独り言のようにつぶやく。

人知を越えた力を持つという、いわゆる『尖り耳』の一族の話は、遠く南方で語られていると聞かすが、あいにくジークにはその知識は無かった。

しかし、スウはその質問の意味をはかりかねて、首を傾げるだけだ。出身地が分からないと言うのだから、あるいは自分でも自分が何者なのか分からないのかもしれない。

しかし、具体的な事はともかくとして、『尖り耳』である以上、スウが普通で無いことは確かである。

「まあ、そんな事はオレにはどうでもいいか」

ジークはため息混じりに言う。こんな小娘相手に、何を真剣に考えているのか。

「で、もう用はないのか？」

「え……？」

スウはぼんやりした瞳でジークを見返す。どこか、心の中の考え事に心を奪われていて、周りに気を配れていなかったような表情だった。

「だから、オレはもう行っているのかって聞いているんだよ。」

ジークはスウのあまりのマイペースぶりに多少むしゃくしゃしつづ繰り返す。

するとスウは少しの間逡巡したのち、意外にも首を横に振った。

「…あんね、あたし、お願いがあるの…」

スウは言いづらそうに伏し目がちに言う。

「…あなたがこれから、どこに行くのか知らないけど、あの、できれば、あたしも連れてって欲しいの…」

スウはそう言って、すがるようにジークを見つめる。

「なんだそりゃ？」

しかしジークは心底呆れたような声音で応える。

「オレとお前は今初めて出会ったばかりなのに、なんでお前を連れてかなきゃならないんだよ」

「う…うん…やっぱり、そうだよね…」

そう言っただけでスウはしょんぼりと悲しそうに俯いた。

「…何か、事情でもあるのか？」

その様子を見て、ジークはふと、ついでのように尋ねる。

「え…それは…」

スウはジークが自分に興味を持ってくれた事が嬉しかったのか、いままでよりも目を輝かせていた。

「あたし…いままでどこに行っても…ずっとのけ者で、誰からも優しくして貰えなくて…一人だけ、あたしの面倒を見てくれた人も、もう死んじゃって…それで、これからも…どうしていいか分からない…」

いつしかスウの目は、今度は泣き出さんばかりに潤みはじめていた。人付き合い、特に異性に慣れていないジークはスウのその無防備さに、どうしていいか分からずに居心地が悪くなった。

「だから…さっきみたいに…助けてくれたのが、うれしくて…だから…お願い…」

そう言っただけでスウはまたジークを見つめた。

「なんだよ、まったく…この状態で断ったら、オレが嫌なやつみたいじゃねえかよ」

ジークはさらに居心地が悪くなる。

「…もう知らねえよ！好きにすりゃいいだろ、まったく」

最後の最後でジークが折れた。と、言うよりはこの状況に堪えられなくなって半分やけくそになった、という表現が正しいかもしれない。

とにかくジークには、この少女は言葉でいくら言った所で聞かないだろう、という事が分かったのだった。

にもかかわらず、それを聞いて素直に嬉しそうに輝いたスウの瞳から、ジークはなぜかしばらく視線を外すことができなかった。

「…まったく、あのガキめ！」

魚屋は独り言のように罵った。そこは帰り道の途中だった。しかし、いくら一人で悪口を言おうとも、うっぷんを晴らす効果は皆無だった。

あの、生意気な、白髪のカキ。

口で何と言おうとも、自分がその少年に一本取られた事実は変えられなかった。

「次会うことがあったら、ただじゃおかんからな！」

街道には誰もいないのに、彼は怒鳴り付けるように言った。しかし、そんな事をして、ただ虚しさがますますだけだった。

彼にとって、人生はストレスのかたまりだった。

戦争で親を失い、戦争が終わってからはずから商売を始めた。しかし持ち前の頑固さから商売はうまくいかず、女房は愛想を尽かして出ていった。

その後も商品である魚を狙ってくる戦争孤児達との戦いが、彼の中にストレスを蓄積し続けた。

相手が子供とはいえ、孤児は盗みが手慣れているし、己の命がかかっているだけに粘り強く、それが厄介だったのだ。

なのに彼はすべての原因とも言える自分の頑固さについてを考え直すどころか、まるで金鎚に打たれた鉄のごとく、その頭は日ごとに硬くなっていく一方だった。

鉄は鎚で打てば硬くなるが、その代償にしなやかさは失われ、それが過ぎれば逆に脆くなってしまうものだ。

彼の性格は、そんな打ちすぎた鉄に例えられるだろう。

あるいは、熟れすぎて腐った果物にも、例えることができるだろう。

しかし、今の彼は、自分が自分で思っている以上に脆くなっている事を、知る由もなかった。

やはり、彼はこれからもいままで通りに生活するのだろう。そして、自分も知らない内に、何かを失っていくのだろう。

せめて、彼がもう少し賢くて、己の弱さを自分で解っていれば、あれほど簡単に付け込まれることはなかっただろう。

「おい、その人間」

突然、声がした。魚屋は驚いて振り返る。ついさっきまで、いや今もまだ、人の気配など感じないのだ。

それなのに声がするのだ。魚屋は背筋が凍る思いだった。

「お前、なかなか良い『闇』を持っているな」

その声が再び淡々としやべった。やはり何の気配もしない。

「てっ…てめえ何モンだ!？」

魚屋は恐怖のあまり上ずった声で叫ぶ。その声は誰もいない街道に、虚しく響く。ふいに風が吹いて、木々がざわめく。幾羽かの鳥が、バサバサと音をたてて木から飛び立った。その冷たい風が魚屋の膚に鳥肌を立てさせる。

その時、突然魚屋は気付いた。

何かいる。

自分の目と鼻の先、皮膚と皮膚が触れ合うほどの近くに、確かに何かがいるのだ。

なのに見えない。魚屋は、まるで喉元に刃物を突き付けられたかのようないい知れぬ恐怖感に襲われ、もはや声すらも出なかった。

「いいよ、お前」

その声は言った。今度はさっきのようなどこか遠くから聞こえるような声ではなく、まるで、耳元に囁かれたかのような静かな、しかしはっきりとした声だった。

魚屋の頬に冷たい汗が流れる。自分の中の理性は、今すぐ逃げろ

と叫ぶが、体は動かない。

彼の本能が、まぶた一つ動かしただけでも、その途端に殺されるのだと悟っていたのだ。

魚屋の耳のすぐ近くで、『それ』の息遣いが聞こえる。

『それ』は間違いなく、楽しんでるのだ。彼の恐怖を。長い間狙っていた鹿を、ついに追い詰めた狩人のように。

「お前の望みを叶えてやろう」

『それ』は今度は誘惑するように甘い声で囁いた。

実に甘い、しかし不気味な声で。

魚屋はだんだんと息苦しくなっているのに気がついた。気付けば自分の周りの世界が暗くなっていくように見えた。

ふいに、視界が歪んだと思ったら、魚屋は突然気を失った。

―レグラ地方 中央街パテル―

中央街とは、スピルナ公国に十二ある地方それぞれにある、その名の通りの中央都市である。

巨大な内乱だったスピルナ動乱が終わり、アルデバラン・アルトを公として平等主義であるスピルナ公国となってから、この中央街の制度も一新された。

元々、地域を表すあやふやな単位であった『地方』にはつきりした境界を引き、戸籍や納税の拠点として、それぞれの地方に『中央街』を置いたのである。

十二個の中央街は、その名の通りの広大な道『大街道』によって結ばれており、地方間の物資の出入りを効率的に行えるようにした。その結果必然的に中央街は地方ごとにもっとも豊かな街となったのである。

実際、今ジークの目の前にあるレグラ地方の中央街・パテルは、片田舎というイメージの強いレグラ地方とはとても思えないような、

発展した都市だった。

都市は周りを高い城壁で囲まれ、南東の方角には大街道に向けて開く巨大な門がそびえていた。

その門から果てしなく延びる大街道は、茶色の荒野に向かってまっすぐにつきぬけていた。

「ふわあ、すごい…」

後から追いついてきたスウが、灰色の城壁を見上げて、感嘆の声を上げる。

「なんだ、中央街に来るのは初めてか？」

ジークが尋ねる。

「うん：なんだか、おっきいケーキみたいだね」

「ケーキって…」

スウの発想の自由さに、ジークはむしろ驚く。

しかし確かに、円を描くように張り巡らされた城壁と、その内側から天に向かってそびえる物見の塔は、百歩譲って見ればケーキっぽいと言えなくもない。

「そう思うんなら、ためしに食ってみたらどうだ？」

「え、いいの？」

嬉しそうに反応するスウ。

「……好きにしろよ…」

ジークは呆れたようにそう言って、再び歩きはじめる。スウはその後もう少しの間城壁に見とれていたが、置いてけぼりにされているのに気付いて、たっと駆け出した。

正確には、スウは、放浪していたところに中央街に来たことがあった。

しかしその時は、中央街だのなんだのも分からないほど、スウは疲れ果てていたのだった。だから、この壮大な城壁を、見上げる事すら考えつかなかったのだ。

実際のところ、スウは自分自身そのことを覚えてはいなかっただけなのだ。

中央街に関わらず、城壁のある街ではだいたい同じ事だが、門は昼は常に解放されていて、誰でも好きに出入りすることができる。

一応門番はいるが、それはほとんど形式的な物である。

そもそも、門を出入りする無数の人々を全員いちいち検問することは不可能に近いし、何より手間がかかるため、効率的とは言えない。

だからといって、この往来の中で怪しそうな者だけを間違いなく見つけることもまた、無茶である。

だから門番は、とりあえず念のため立っておき、いかにも怪しそうな者を見つければ気まぐれに尋問する、といった感じだ。

だから、ジークもスウも、街に入るのには何の手間もいらなかった。

パテルの中に入ると、街はまた違った表情を見せた。

堅牢な雰囲気を纏う城壁とは裏腹に、その内側は田舎なりの賑やかさを持っていたのだ。

どの地方でも、中央街は大街道を通じた交易の中心地になる。交易の品々は、大街道を伝ってまず中央街に集められ、さらにそこからその周りの町や村に運ばれる。

だから、ここパテルも、常に様々な地方から来た物で溢れているのである。

スウは、あちらこちらの店や、建ち並ぶ石作りの家々に目移りしつつ、前を歩くジークの後について歩く。

道の脇には、輸入品の出店が数え切れないほど並び、常に荷物を載せた馬車や買い物に来た人々が行き合い、そこで値切り交渉が行われている。

八百屋、肉屋、洋服屋、小物屋、雑貨屋など、どこも客が群がっている。

「ここは月に一度、売れ残った輸入品を放出する市場をするんだが、まさかそれが今日とはな」

その光景を見てジークはどうでも良さそうに言った。

スウは、周りの景色に目を奪われつつも、ジークとはぐれないように早足でついて来る。

ジークは、彼と同じ年頃の少年が、装飾品店を物色しているのを尻目に、食料品店で日持ちのする干し肉や乾パン、尽きかけていた塩などの調味料、そう言った物だけを買って、他の店には目もくれずに今度は宿屋に向かい、部屋を借りた。

宿屋は、大通りから外れた細くてくねくねした道の先にあった、木造りの小さくてみすばらしい下宿のような場所だった。

一階はバーになっているが人影はなく、この分では二階の部屋もすっからかんだらうと容易に予測がついた。

しかしそこを一人で切り盛りしている（切り盛りするほどの仕事があればの話だが）小肥りな亭主は、気さくで気前のいい人の方だった。

そう思いながらもスウは、今までの人生の中で身についた癖ということもあって、始終ジークの後ろに隠れるようにして行って、亭主に気楽に話し掛けられてもあやふやな反応しかできなかった。

そんなスウの気持ちを鈍いジークが察したのかどうか、は定かではないが、二人は早々に部屋に引っ込んだ。

階段を上った所の廊下を進んで、三つある部屋の内、突き当たりにあった部屋が、ジークの借りた部屋だった。

部屋には古びて多少色あせた紫陽花柄の毛布のベッドが二つあり、それに挟まれるように四角い小さなテーブルが置いてある。

テーブルの上には灯油ランプの他に、メモ用のペンや紙なども置いてあった。

大きめな窓の外からは周りの平屋の屋根の海、その奥には城壁や物見の塔の一つなどが見えた。

夕方の日差しは直接は入っては来ず、部屋の明かりは外の家の屋根に反射される光のみであった。

大通りの辺りには他にもっと居心地良さそうな宿もあったのにと

スウが聞くと、ジークは、寝る場所なんかにはいちいち高いお金を払う必要は無い、むしろ下手に高い宿に泊まれば目をつけられる事もあるのだと気の無い説明をした。

日は沈んだ。暗闇に包まれる大通りの脇には、そこそこでランプがオレンジ色の明かりを放っている。

人間は、そうやってかりそめの明かりをつけることで、『闇』に対する恐怖から逃避するのだ。

しかし、結局そんな物は意味が無い。

『闇』への恐怖とは常に根元的なものだ。いくら目の届く周りを明るくしようとも、夜がなくなる訳ではないし、己の内なる闇をすべて取り去ることもできないのだ。

人間とは低脳な生き物だと、つくづく思う。

みすばらしいランプ一つ掲げただけで、闇夜を照らし、克服したつもりになっている。

愛という浅い、偽りの感情で、憎悪という深い、真の感情を消し去ったつもりになるのだ。

しかし、本当の『闇』とはもっと深く、濃い。

それを思い知らせるのが、我等の生業であり、本能なのだ。

(そろそろ、始めようか)

心の中で、甘美で邪悪なあの声が響く。

それとともに、周りの情景が、霞がかったようになる。もはや、彼はその感覚の虜になっていた。

不思議と何をすればいいのかが頭に浮かぶ。そして彼は従順にそれに従った。

近くを数人で歩いていた町人のうち、一人の肩に手を掛ける。

町人は、おそらく酒を吞んで酔っ払っていたのだろう、上気した陽気な顔をこちらに向ける。

次の瞬間、その顔に苦痛の色が走った。

その町人を、彼が刺したのだった。罪悪感などという無駄な感情は完全に麻痺していた。

あるのはこの男を刺した、ナイフの感触だけだった。町人は一瞬何が起こったのか分からず、一度自分の腹に刺さったナイフを見て、次に自分を見た。

その顔は驚愕と痛みに満ちていた。

そして、町人はそのままの体勢で前のめりに倒れた。

どこかで女の悲鳴が上がる。続いて男の怒鳴り声も聞こえる。

それは殺した町人と並んで歩いていて、呑み仲間だろう。襲ってくるのが見えたが、所詮相手は酔っ払いの千鳥足だ。

彼は素早く動き、前のめりに襲ってきたその男の胸に、ナイフを突き立てた。

その、肉を突き破り、返り血を浴びる感触は、さながら麻薬のように、彼を昂らせ、快感で満たすのだった。

彼は、その快感を得るために、既に息絶えたその男に、再びナイフを振りかざした。

その時、ベッドで眠っていたスウは、突然何かおぞましい感覚に包まれて、目を覚ました。何か恐ろしい事が起こっている。根拠も無いのになぜかそう直感した。

暗い中を急いで部屋の窓に走り寄り、身を乗り出して外を見る。ここからは大通りは遠くてはつきりと見えないが、明らかに様子がおかしかった。

夜だというのに、やけに騒音が耳に付く。そして、大通りでは一部の建物が赤く染まっている。燃えているのだ。

気がつくと、スウが起きた気配を感じたのか、ジークも起きてきた。

「おい、スウ、どうしたん…」

眠そうにいいながら窓まで来て、外を見る。瞬間、絶句した。

その横顔は暗くてよく見えないが、驚愕しているらしいことは分かった。

「何が起こってるんだ!？」

火はあつという間に広がっていた。普通に考えればおかしいくらいの速さで、炎は周りの家々を飲み込んでいく。

その姿はまるで、腹をすかせて、怒りのままにのたうち回る巨大な龍のようだった。

「わかんない…けど…」

スウは震える声で、やつとの事でそこまで口にした。

「…この感じ、多分、さっきの…」

ジークにはスウのその言葉の意味が分からなかったが、問い正しはしなかった。

そう言っている間にも、火事は四方八方に飛び火して、次第にこの宿へも近づいてきていたのだ。

「とにかく、ここから出た方が良さそうだな」

ジークはそう言うなり自分の外套を羽織り、荷物と、ベッドの傍の壁に立てかけてあった大きな二本の長い棒状の包みを手に取る。

スウも少し外の光景に目を奪われていたが、すぐにそれに従う。

二人が宿を出る頃には、火事は手がつけられないほど広がっていて、辺りは火の光で赤く染まっていた。

一体どうすればこれほど速く炎が広がるのだろうか。

「…どうしよ、ジークさん…」

スウが慌てたように言う。ふと思いつき、来たときの道に戻って、大通りに出ようとするが、ジークがそれを制した。

「町中がこの状態なら、大通りはきつと大騒ぎだ。それよりも、脇道を通った方がいい」

ジークは冷静な声でそう言って、スウの手を多少荒々しく掴んで、大通りとは逆の方向にあった細い小路に向かった。

しかし、そうは言っても歩き慣れない街で、しかも火事が起きている家の周辺は避けなければならなかったため、なかなか速く進むこと

はできなかった。

それでも時折大通りの方から聞こえる逃げ惑う人々の喧騒が、もしあのまま大通りに出ていたらどうなったかを如実に語っていた。きつと大勢の人の波にもみくちゃにされて、あつという間にばらばらになってしまっただろう。

二人は建物と建物の間に挟まれた路地を、右へ左へと縫うように進んで行った。焦りのせいもあったのか、スウにはどの道もまったく同じに見え、時間感覚も失って、本当にちゃんと進めているのだろうかと心配になるほどだった。

そうやって数分の間二人は無言で走りつづけた。しかしある家の前を通り過ぎ、その角を曲がろうとした時、大きな音とともにその家が、文字通り弾けた。

弾けた家は一瞬にして炎に包まれた。スウはその様子を啞然として見ていた。

すると、崩れた家の残骸を乗り越えて、やって来る人影があった。しかしそこは当然火の海だ。普通の人間ならすぐに焼け死んでしまふはずだった。

しかしその人影はなんの躊躇も焦りもなく、悠々と炎の中をこちらの方へと歩いてくる。その姿は明らかに不気味だった。

やがて人影は紅蓮に染まった家を完全に乗り越え、その姿を二人の前に晒した。

「…お前は…！」

それは、昼間にあったあの魚屋の店主だったのだ。

その服は焼け焦げ、真っ黒になっていたが、体の方はやけど一つせず、むしろ昼間より健康的なようにさえ見えた。

ジークの声が聞こえたのか、魚屋はこちらを振り向いた。しかしその口から言葉は出てこなかった。まるでしゃべることを忘れてしまったかのように口をぱくぱくさせていたが、その口から出てきたのは微かな唸り声のような音だけだった。

「ジークさん…この人、なんだか怖い…」

スウが怯えた声でつぶやく。そりゃそうだ。炎の中を平気で歩く人間をみて、やあこんなにちはなどと言える人間などまづいるまい。

魚屋は鈍感そうにしばらくこちらを見ていたが、次の瞬間、突然二人の方に襲い掛かってきた。その手には赤く血塗られたナイフが握られている。

「何なんだ、コイツ！」

ジークは吐き捨てるようにそう言い、とっさに抱えていたあの長い棒状の包みを使って、その攻撃を受け止めた。ナイフの刃で、包んでいた布が少し裂ける。

魚屋は防御されたことに驚くでもなく、ただ無心に距離を取り直し、再び襲い掛かってくる。

「なんだか知らねえけど、攻撃してくるっていうんなら、反撃するしかねえぜ」

しかし魚屋には、ジークのその言葉が聞き取れたようには見えなかった。喋れないのと同時に、聞くことも出来ないのだろうか。

ジークは魚屋の突撃をひらりと躲し、持っていた包みの中から棒状の物を取り出す。

それは鞘に収まった刀だった。それも、1メートルを余裕で越えていそうな大刀だ。

ジークは素早く鞘から刀を抜き出し、今は邪魔な荷物と鞘を投げ捨てる。鞘が地面に当たる乾いた音が虚しく辺りに響いた。

鞘から取り出された白銀に輝く片刃の大刀は、火事の炎の光を反射して、まるでそれ自体が燃えているかのように赤く煌めいていた。魚屋はその刀を見ても、いままで通り全く動じた様子はなかった。三度、ナイフを構えて、まるで馬鹿の一つ覚えのように突進してくる。

やはり、明らかに様子がおかしい。

魚屋のナイフが目前に迫るまで、刀を構えたジークは身動き一つしなかった。

しかし、ナイフがジークの体に触れるかというその一瞬、信じら

れないような素早さで身を屈めたため、魚屋のナイフは虚空を突いた。

ジークはその体勢から刀を振り上げた。

刀とは思えないような鈍い音と共に、魚屋は吹っ飛ばされ、建物の壁にたたき付けられた。

見ると、その体にはどこにも切り傷はなかった。峰打ちだったのだ。それでも、今の一撃はかなり効いただろう。

しかし、なんと魚屋はまるで痛みを感じないかのように、よろよろと立ち上がった。

効いていない訳ではない。彼の体は明らかにダメージを受けている。それなのに、彼は痛みを感じていないようだった。まるで人にナイフを突き立てることだけが目的の殺人ロボットにでもなったかのように、魚屋は再びナイフを構えた。

しかし既に肉体が弱っているのだろう。その構えはふらふらと危なげなものだった。

「つたく、まだやるのかよ」

そう言ってジークは再び刀を構える。

しかしそこで、唐突にジークを遮るものがあつた。スウだった。

「なんだよ、スウ」

ジークは苛立った声で言う。

「ジークさん…この人、違う…」

スウは一見意味の分からない言葉を口にする。ジークが戸惑っているのを見て、続けた。

「あの人じゃない。見た目は、同じだけど、何か…他のモノを感じるの…」

やはり何を言っているのか、ジークには訳が分からなかった。しかし、あの魚屋の方には、その意味が通じたようだ。

突然魚屋は体をビクンと引き攣らせ、大きく痙攣し始めた。

スウとジークはその光景を愕然として見ていた。

すると今度は、痙攣を続ける魚屋の耳から、何やら黒い煙のよう

な物体がニルニルと出てきて、その頭上に溜まっていた。

しばらくすると耳からの煙の放出はとまり、魚屋は糸が切れた人形のように膝をつき、そして倒れた。

その上に溜まった黒い煙は次第に凝る様にして固まっていき、だんだんと形を成していった。

それは、人のような、人でないような、奇妙なモノだった。真っ黒な体は人に似た形だったが、腕が異様に長く、目とおぼしき顔の上にある真ん丸な点と、口とだけが真っ赤に光っていた。

それはまるで、どこかの人間の足元から勝手に逃げ出した影のようだった。

「ちっ、意外と早くばれちったな。まあ、どっちにしろもうこの人間は使い物にならなさそうだから、脱ぎ捨てようと思ってた所だったんだけどさ！」

その影は場違いな程に陽気な声でそう言ってケケケと不気味に笑った。地面に倒れた魚屋を無関心に見つめたあと、それはこちらに向き直る。その真っ赤な口は、嘲笑うように三日月形に歪んでいた。ジークには、後ろでスウが恐怖で身を強張らせるのが気配で感じ取れた。

「お前がその魚屋を操っていたのか！」

ジークが半ば叫ぶように言う。

不気味な影が人の中に入り込み、その体を操る。当然それはにわかには信じがたい事だった。が、もしそうだとすれば、いや、そうとも思わなければ、魚屋のあの異変は説明がつかない。

「ケケケ、だったらなんだい？」

影はニヤついた声音で応える。

「オイラはこのニンゲンの中に巣くっていた『闇』を、このニンゲンの願いが叶えられるように、力に還元してやっただけだぜ？元々すべてはコイツが願ったことだったんだぜ。」

遊び半分でそうしてみりゃ、見ろよこの街の有様を。ニンゲンの『闇』ってのは、ちよっとくすぐってやるだけで、簡単にこんくら

いの事が出来ちゃうんだぜ、末恐ろしいねえ」

影はそう言って再び声を上げて笑った。

そうする間にも、周りの火事はどんどんと広がり、ジーク達のいる道を明るく照らしていた。

詳しい事は分からないが、この火の広がり、異常なまでの速さは、コイツの能力に拠るものなのだと、ジークは気がついた。

影の話を信じるとすれば、魚屋はオレにやられた事で負の感情、つまり怒りが高まり、そこを突かれて影に体を乗っ取られた。そして影は、まるで新しく手に入れた玩具で遊ぶかのように、魚屋を使って火事を起こさせたのだ。そして、魚屋が血塗られたナイフを持つていたことから、恐らくはあれで人を刺させたのだろう。

その傍若無人ぶりは、まるで：

「…悪魔かよ…！」

ジークは口に出してその言葉を呟く。今まで、安っぽい正義感など持った事はないし、また持ちたいと思った事もなかったが、それにしてもその影のしたことはあまりに残酷に思えた。

「ケケケ…その通り！」

影は面白そうに言った。

「オイラの名前はメトネス。種も仕掛けもない正真正銘の悪魔さ！今日はもう十分楽しんだし、今日はここまでにしといてやるしさ。最も、どっちにしろオイラはニンゲンにとり憑かなきゃ何にも出来ないしね。じゃあな！」

メトネスは嘲笑いながらそう言って、突然ジークの方へと、空中を滑るように飛んできた。

ジークは本能的にメトネスへと刀を振るった。しかし、刀は真っ黒な悪魔の体をすり抜けた。メトネスの体は魚屋の耳から出てきた時と同じく、煙状になっていたのだ。

メトネスはジークの体をすり抜け、かと思うと次の瞬間には闇に溶けて消えていた。

「ああ、そうだ、そのジークとか言うニンゲン！」

メトネスの気配は完全に消えているのに、その声だけが残響音のようにどこからともなく聞こえてくる。

「アンタ、その小娘と一緒にいるつもりなら、また会うことになるぜ！ なんとってソイツは、類い稀にみる疫病神サマだからなあ！」

その最後の言葉が終わった後も、メトネスの笑い声は長い間通りに響き渡っていた。

序章「E n c o u n t e r o f f a t e」完

第一章 「悩み事」

―パテル／＼ノーレラス地方間の街道―

「ねえ、ジークさん、あたしもう疲れたよお」

スウはその言葉通りかなり疲れた様子で言う。

二人は昨晚、メトネスが去った後、無事にパテルから脱出し、そしてその夜は城壁の外で野宿したのだった。

そして今はパテルから南に延びた街道の一つを通過して、地方境を越えたその先にあるノーレラス地方エスル村へと向かっていた。

「それならついて来なきやいいだろ」

ジークが答える。

「そっちの方がよっぽど嫌だよ」

スウは頬を膨らませて答える。

「それなら少しの疲れくらい我慢しろって」

ジークは少し呆れ顔でそう言いながらも、スウを気遣うように立ち止まって振り向いた。

（なんだかジークさんって、冷たいんだか優しいんだかよく分からない…）

スウがそう考え込んでいたちょうどその時、二人の前を横切るごく小さな物があつた。

街道を横断していたそれは、一匹の茶色いイタチだった。見ると、なぜか首の辺りに何かの緑色の宝石のような物をぶら下げている。

「ふあ、イタチさんだ！」

それを見たスウはさっきまでの精根尽き果てた調子とは一転、喜び勇んでその後を走って追う。

「疲れてたんじゃなかったのかよ…」

ジークは呆れたように言ったが、その時のスウにはまさに馬耳東風だった。

「…っつかまえた!」

言うが早いが、もうイタチを捕まえたスウ。

彼女のぼんやりした性格とは裏腹に、その素早さは驚異的だった。

「くそ、放せ、ガキ!」

スウの胸に抱かれたイタチがじたばたしながら喚いた。

「…ねえ、ジークさん、このイタチさん喋るよ?」

しかしまったく驚かないスウ。いつも通りのおっとりした目でそのイタチを観察している。

「当たり前みたいに言うなよ…」

スウのこのマイペースに慣れるには相当な時間が必要だろうとどこか苦い思いを噛み締めながら、ジークが言った。

「おい、ジーク、コイツ何とかしろ!」

イタチが叫ぶ。スウはいまやさも楽しそうにそのイタチを抱え上げてブラブラさせていた。

対してイタチはと言えばスウの手から逃れようと必死にもがいているが、よほどしっかり捕まえられているのか、無駄な努力に終わっていた。

「あれ?このイタチさん、ジークさんのお知り合い?」

それを聞いたスウがジークに尋ねる。

「まあな。とにかくまずは放してやれよ」

ジークはため息混じりに言った。

スウは少しの間黙っていたが、渋々その言葉に従った。

「…まったく、ひどい目にあっただぜ」

イタチは怒ったような声で言った。言葉を話すとは言え、あくまでイタチはイタチなので、表情はまったく読み取れない。

「それで、一体何の用なんだ、リゲル」

ジークがめんどくさそうに言う。このリゲルというのがイタチの名前のようだ。

「ねえ、ジークさん、このイタチさんは誰？」

そこにスウが横槍を入れる。

「ん？ ああ、コイツか？ コイツはリゲル。『リイト』の伝令役だよ」
ジークが答える。

「『りいと』ってなに？」

スウが続けて尋ねる。

「『リイト』ってのは、平たく言えば、『旅人』のことだな」
今度はイタチのリゲルが答える。

「つまり、旅する理由も目的も違う旅人達が、互いにとって利益になる情報のやり取りとか、いざというとき助け合うとか、そう言った取引をするための組織だな。まあ、それだけってわけじゃねえが」
スウは半ば理解して半ば理解してない様だった。

かれこれ丸一日一緒にいて気付いた事だが、スウはやけに表情の変化が薄いので、ほとんどの感情は目を見て判断するしかない。

「オレもそのリイトの一人で、リゲルはその伝令役って訳だ。それで、一体何の用だ？」

ジークが改めて聞き直す。

「ちえっ、別にお前に用があつたんじゃねえよ」

リゲルはどこかバカにするような声で言った。まるで『自意識過剰な奴だな』とでも言いたげだ。

「エスル村に来てるカレハに用があつただけだ。そう言えば……」

ふと思ひ出したように、リゲルが言葉を切った。

「ここに来る途中、パテルを通ったが、ありゃひどい有様だったな。どこもかしこも燃えカスだらけだったぜ。お前達、パテルから来たんだったら、何か知らないか？」

それを聞いたスウが、少し顔を引き攣らせたように、ジークには見えた。

しかしそれはごく一瞬の事で、後になって思えば、見間違えだったようにさえあった。

「あれは、『悪魔』だった」

ジークが一転、厳かな声で言った。

「自分で悪魔だと名乗っていた」

「悪魔、か…」

リゲルはそう言ったきり黙り込んでしまった。

「ねえ、ジークさん、あの『悪魔』っていったい何ものなの？」

ここでまたスウが口を挟む。

「お前な、もう少し空気を読めよ…」

ジークが呆れて言った。

「…悪魔ってのは、もともとはこの大陸の北端にある極寒の地に住んでた、闇の力を支配する一族だよ」

リゲルが説明する。

「けど、ここ数年でなぜか、ここスピルナ公国での目撃情報が出てる。やつらは闇を操る人知を越えた力を持っているし、それに何より怖いのは目的が不明な事だ。しかし、ついに人を襲うようになってたか」

リゲルはそう言ってまた黙る。スウはといえば、相変わらず状況を掴みかねて首を傾げている。

「つまりどゆこと？」

スウがジークを振り返って聞く。

「キケンなやつらがこの辺りに来て、目的も言わずに人間を襲ってるってことだ」

ジークは適当に答えた。

「…まあとにかく、目的も分からないやつらのことをクヨクヨ考えてもしかたがない、か。」

リゲルは諦めたように言う。実際、何故昨日メトネスがパテルを襲ったのかすらも、皆目見当がつかないのだ。

「とにかくこの事はオレからテグレスに伝えておくぜ。それじゃあ、オレはこれからカレハの所に行くが、お前は どうする？ ジーク」

リゲルがジークに尋ねた。

「この一本道行ってるんだからどうせ行き先は同じだろ。一緒にい

けばいいじゃないか」

ジークは軽い皮肉をこめて答える。

「へっ、分かってねえな、お前みたいなノロマと同じスピードで動いてるようじゃ、伝令役はつとまらねえよ！」

そう言うが早いがりゲルはあつという間に駆け出し、道の脇の森に姿を消した。

「ふあ、もう行っちゃった」

スウが至極残念そうに言った。あれ以上りゲルを使って何をしようとしていたのだろうか。

「それで、ジークさん、どうしてあのイタチさんはしゃべるの？」

スウの今更なその問いに、ジークは一考してから答える。

「…さあな。それより、早く行くぞ」

そう言ってさっさと歩きだすジークに、スウは膨れっ面で付いて行った。

「あね、ジークさん、あたし、一つ聞きたいことが…」

その後、しばらく無言で歩きつづけた後、唐突にスウが尋ねる。

「なんだよ、スウ」

ジークが聞き返す。

「どうしてジークさんは、旅してるの？」

スウにそう聞かれて、ジークは少し顔をしかめてしばらく黙っていた。

しかし、不意に言った。

「お前には関係ないだろ」

そう言うジークの声は、さっきまでよりもずっと冷たかった。さすがのスウにも、この時ばかりはジークが聞かれたくないことを聞いてしまったのだと覚った。

「ごめんなさい…」

スウは目を伏せ、消え入るような声で謝った。まるでちょっと触

られただけで頭を引っ込める、亀の様だと、ジークはふと思った。そういえばスウは初めてあった時、ずっと人に嫌われて生きてきたと言っていた。それを考えれば当然の事ではあるか。

「別に謝れとは言ってねえよ」

ジークは、頭の後ろをかきながら言った。ジークなりの一応の気遣いなんだろうかとスウは思った。

互いにそれ以上言葉を発する事も出来ないまま、二人はしばらく無言で歩いた。

しかし、その沈黙は長くは続かなかった。その沈黙を破ったのは、押し込めたようなゴロゴロという音だった。

すると、俯いたスウの顔が尖った耳の先まで真っ赤になった。ジークにはそれだけで何が起こったのかが分かった。

「そういえば、昨日の夜から何も食ってなかったな…」

ジークは思い出したように言った。メトネスに襲われたせいで、すっかり忘れていたのだ。

「しょうがないな、ここらで飯にするか」

二人は道の脇の森の中に適当な場所を見つけ、そこで昨日仕入れた干し肉などの食料で、簡単な食事をすることにした。

そして、そこでまた、ジークはスウの新しい一面を見ることになる。

スウは大食いだった。そのやせっぽちな体のどこにそんな隙間があるのか、ジークが一日で消費する量の肉を、あっという間にたいらげてしまった。しかも、さらにおかわりをねだってくる。

「お前、オレを一日で破産させる気か？」

焼き上がった一切れの肉を頬張りながら、ジークが怒っているとよりよは戦いた様子で言った。

「だって、だって、こんなにおいしい食べ物食べれるなんて、すごく久しぶりだから…」

しかしそれを全く聞いていないスウは、感無量といった様子で、今にも泣き出しそうなほどに目を潤ませていた。

あの味気のない干し肉で目を潤ませるとは、今までどれほどひもじい生活が続けていたのだろうかと思わずにはいられない台詞である。

もしかすると、この大食いも、食べれる時に食べれるだけ食べて栄養をつけ、食べ物が入らないかもしれない明日に備える、そんな本能的行動ではないかとも思えた。

ジークは不意に、さっきからスウの事しか考えていない自分に気付く。その事に自分自身でも驚いて、彼は無意識の内にスウから目を離していた。

「あんね、ジークさん」

やっとおねだりを止めたスウが、ジークの顔を覗き込むようにして尋ねる。その頃にはジークの荷物の重さは始めの半分くらいになっていた。

たぶんジークが目を逸らしている間にもう何枚かの干し肉でも胃に納めたのだろう。

「次の町にはどんくらいで着くの？」

「ん？ああ、エスル村か？この調子で行けば明日には着くな。どうかしたか？」

「ううん、別に……」

口では何でもないようなふりをしてそう言いながら、スウはどこかほっとしたような顔をした。

一体この少女は何を考えているのだろうか。ジークはますます分からなくなってきた。

まったく、生まれてこのかたスウほど悩ましいものには出会ったことがない、とジークは思った。ずっとどこか寂しそうな表情をしている上、そのわりにいつもぼーっとしていて何を考えているのかまったく分からない。

どれほど危険な山賊とか、悪魔なんかと戦うよりも、よほど肩が

凝る。

しかし、その時ジークは、自分がなぜスウがついて来ることを許しているのかという所までは、考えが及んでいなかった。

その後、昼食の片付けを終えて、再び歩きだした二人は、パテルからここまでの街道をずっと囲っていた森をついにぬけた。道は、森を背に、まるで緑色の海のような、雑草に覆われた草原の中を果てしなく続いていた。

ここの地理はほとんど分からないが、多分この草原はずっと西のガブル平原まで続いているのだろう。

スウは爽やかな風にそよぐそんな雑草達を眺めつつ、改めて昨日の事を思い出していた。

無意識の内に、背中に回した右手の指で左手を包む。

その左手には、未だ昨日、ジークに手を引かれた時の感触、人の手の温もりが、余韻となって残っていた。

ジークの握力は強くて、掴まれた方は多少痛くさえ感じたが、その力強さが、何より心強かった。

あんな風に力強く手を握られたのは、いつ以来だったのだろうか。少なくとも見積もっても二年ぶりだろうと、スウは頭の中で数えた。そういえば、まだセル国の山奥の小屋に住んでいた頃、父はよくスウの手を優しく包んでくれた。

父と言っても、もちろん前述の通り実の父親ではなく、捨て子だったスウを拾って育ててくれた親である。

歳から見ても、父親というよりは祖父だった。まあ、スウにとってそんなことはどうでもよかった。血の繋がりがなからうと、年寄りだろうと、その人がスウの『父』だった。

その頃スウは、父と二人暮らしで、ほとんど麓には下りなかった。なぜかという、スウ達にとって麓の村に下りるということは、自らいじめられに出向くようなものだったからだ。

理由は知らない。当時幼かったスウに分かったのは、村の人々が自分を嫌っていたことと、同じように父の事も嫌っていたこと、ただそれだけだった。

でも、村でどれだけいじめられても、家に帰れば父が出迎えて、慰めてくれた。傷を優しく手当てしてくれた。

そんな時、父はスウの手を、その大きな手で優しく包んでくれたものだった。スウはただその温もりだけで、村であった嫌なことを、すべて忘れられた。

そこにたった一つ、帰るべき場所があることが、スウにとって最高の幸せだった。

それに対して、ジークの手の温もりは、また別の種類のものだった。どう表現したらいいのか、スウにはまだ分からなかったが、とにかく違ったのだ。

父のように落ち着いていない、自分とたった四歳しか違わない、父ほど大きくはない、どこか頼りなげな手。

でも父よりもずっと力強く、手を掴んでくれた。

スウは、前を歩くジークの後ろ姿を見つめた。

白くて長い、ボサボサな髪、背中に背負った重そうな刀。スウの事を振り返りもせず、ただ黙って前を歩いている。

風が少し強くなった。スウは顔にかかった髪を左手で尖った耳にかけ、ただ黙ってジークの後をついて行った。

その胸に様々な想いをめぐらせながら。

―パテルの傍の森の奥深く―

そこには三つの『悪魔』がいた。どれもいびつな人間のような形で、誰一人はつきりとは見極められないような、曖昧な影のような姿だった。

そこに、さらにもう一つ同じような悪魔が、地上を滑るようにや

ってきた。やたらと長い腕に、三日月型の赤い口と、同じように真っ赤な丸い目。

それは、昨晚魚屋を使ってパテルを炎上させた、メトネスという悪魔だった。

「ほう、今戻ったか」

その悪魔の内の一つが、メトネスに語りかけた。そこにいた悪魔達の中では最も背の高い、細長い悪魔だった。

「ケケケ、まあね」

メトネスは持ち前のバカにするような口調で答えた。しかしその笑い声とは裏腹に、その声は心なしか疲れを含んでいるように思えた。

「ケド、全部思い通りにはならなかったしね」

メトネスは、どこか吐き捨てるような言い方をした。

「どうやら、そのようだな」

長身の悪魔が、メトネスの様子を見て、メトネスに昨日何があったか推理でもするように、ゆっくりと言った。

「途中で邪魔でも入ったのか？」

悪魔は、推理の末に結論づけるように言う。

「……ったく、『リイト』のやつらめ、いかんせん行動が速いんだよ！これもきつと『テグレス』、奴のしわざだしね！」

メトネスはなおも、見えない何かに叱り付けるように叫んだ。一瞬して、そんな自分の不様さに気づき、また悪態をついた。

「ったく、存在が影なだけに陰口かよ！また宿主の癖が移っちゃまったぜ」

あのやたら頭の硬い魚屋に取り付いたせいで、その変な癖までが身についてしまったのだ。

昨日、パテルから脱出する時に、わざわざ敵に弱みを見せることはしなかったが、彼にとってジークによる妨害はそれなりに堪えていたのだ。

「ハッ、まったく、いいザマだなあ。お前みたいな雑魚がイキがる

から、そういうことになる」

そこで、もう一つの悪魔が口を挟む。

「大体、本来の目的も忘れて街を燃やす方ばかりを楽しむようじゃ、まだまだだなあ」

「うるさいね、悪魔が人を痛め付ける事を愉しんで何が悪いのさ！」
不機嫌なメトネスが食ってかかる。二人目の悪魔はそんなメトネスをバカにするかのようにそれを無視した。

「フン、まあ構わん」

先に話していた方の悪魔は、そんな不満タラタラなメトネスにはまったく取り合わずに、相変わらずのゆっくりした口調で言う。

「どちらにしろ、今回だけで目的が果たせるなどとは思っていないかったからな」

悪魔のその言い方は、再びメトネスを怒らせた。

「つまり、オイラごときじゃダメ元の噛ませ犬だったってことかい！？」

「違う、ここで果たせなくても問題はないと言ったのだ」

長身の悪魔はやはりすました声で答える。

「なにも焦ることはない。ゆっくり、着実に、駒を進めて行けばいいのだよ」

悪魔はそう言ってクククと控えめに笑った。

「ともかく、メトネスも帰ってきた今、このままここに居てもらちがあかないなあ」

二人目の悪魔が言う。

「そろそろ移動を開始するべきじゃねえか？」

「それで、次は何処へ向かうのさ？」

メトネスが八つ当たりするように、詰問するような口調で尋ねる。

「行くべき場所へ、だ」

長身の悪魔が、さも当たり前のように言う。

「…だから、それがどこかって聞いているのさ！」

メトネスが苛立った声で聞き返す。

長身の悪魔は、しばらくもったい付けるように黙っていた。そして、静かに言った。

「…南だ」

次の瞬間、四つの悪魔達は、一瞬深い闇に包まれ、そして、ふいにその闇ごと霧散して、跡形も無く消えた。

そこに、さっきまで悪魔がいたことを示すものは、何も残っていなかった。

―パテルノールラス地方間の街道―

スウとジークは、日が沈みかけた夕暮れの草原の中で、たき火の赤い光を眺めていた。

そこは街道から外れたところに、ジークが見つけた空き地だった。中央にはたき火の跡と思われる窪みの中に炭が残っていた。おそらくは前にここを通った旅人が、ここに野宿したという証だろう。周りは背の高い草で囲まれていて、街道は見えない。野宿する場所としては、なかなかの物件だった。

唯一問題なのは、薪がないことだった。

今のような春の時期では、草は水分を含みすぎていて燃えづらいし、たとえ燃えたとしても草ではすぐに燃え尽きてしまう。

かと言っても周りほどの方向を見ても草原が続いていて、薪になりそうな木などはどこにも見当たらなかった。

もっとも、スピルナの春の夜はそれほど寒くない。したがって暖房としてのたき火は必要ない。

しかし、他の動物を近寄らせないためと、何より食事のためには、たき火は絶対に必要だ。味の良し悪しは別にしても、細菌による食中毒のことを考えれば、食料はできるかぎり熱を通してから食べるのが妥当だ。

特に、ジーク達のように旅をしているのなら、なおさら衛生には

気をつけなければならぬ。食中毒で倒れたあげく、誰にも見つかられずにそのままお陀仏、ということになりかねないからだ。

「ジークさん、お腹すいたよお」

スウが子供っぽく駄々をこねる。

「お前、昼にあれだけ喰つといて良くそんなことが言えるな。太るぞ」

ジークが言い返す。これ以上スウに好きなように食べさせていたら、本気で破産しかねない。彼の脳裏にそんな確信が過ぎった。

「だいたい、薪もないのに飯が作れる訳無いだろ」

「でもおゝ…」

スウは諦めきれない様子で口を尖らせる。

スウはそうしてしばらくの間ジークを見つめつづけた。すると今度はジークの方が居心地が悪くなる。知らぬ間に、スウがジークと一緒に旅をしたいと頼んだ時と同じ状況になっていた。

ジークはその視線をできるかぎり無視しようと必死で努めたが、結局、それもまた無駄な努力に終わったのだった。

「ったく、しょうがねえな…乾パンなら食中毒にはならねえだろ」

ジークはそう言って渋々荷物から、一見クッキーのようにも見えるその保存食を探り出し、むすっとした顔でスウに投げ渡した。スウは、まるでフリスビーを追いかける犬のようにその袋に飛びついた。

「ふわあ、ありがと、ジークさん！」

スウはうれしそうに感謝の言葉をジークに投げかけたが、当のジークはといえば、また少し軽くなった荷物を見てため息をつくばかりだった。

「…ねえ、ジークさん、ひとつ聞いていい？」

スウはポリポリ乾パンをかじりながら話しかける。

「一つどころか、今日一日だけですでに軽く十回近くは質問されるけどな」

ジークは面倒臭そうな声で言うが、別に批判するような口調では

なかった。

「ジークさんってなんでそんな優しいの？」

その質問はジークにとって予想外だった。

「お前にはオレが優しくそうに見えるのか？」

ジークは呆れた声で聞き返す。ジークは、自分で自分が優しいなど、露ほども思ったことがなかった。

「だって優しいもん」

スウは声を大きくして言った。

「そりゃ、あの魚屋なんかよりは優しいかもしれないけどさ」

ジークはやはり曖昧な答え方をした。今までジークは、人に『優しい』などと言われた事はなかった。それゆえ、それに対してどう対応すればいいのか分からないのだ。

「けど、少なくともオレはお前が思っているような人間じゃない。これだけははっきり言える」

ジークはそう言うのと、どこか後ろめたそうに目を逸らした。

「なんで？なんでそう思うの？」

スウは続けて尋ねる。ジークの考えとは真逆に、スウにしてみればなぜジークがそんなことを言うのかが分からなかった。

「だってジークさんは昨日、あたしのこと助けてくれたじゃない。もしジークさんが優しくくないんだったら、あの時はどうして助けてくれたの？」

「それは……」

ジークは言葉に詰まった。改めて考えると、自分でもはっきりとは分からなくなっていた。

「別に、ただのちょっとした気まぐれだったの」

彼はなんとかその場しのぎの台詞を言ったが、しかしやはりスウはその答えに満足していない様だった。

スウは頬をぷくっと膨らませてジークを見つめていたが、やがて、
「もう、寝る」

むすっとした声で一言それだけ言って、スウは自分の分の毛布に

包まって、ジークに背を向けて横になった。

「：やっぱ訳が分からねえや」

しばらくその姿を無心に眺めていたジークも、しまいにはそう言い捨てて、自分の毛布を引き寄せて、それに包まった。

その後、日が暮れて辺りが真っ暗になってからも、ジークとスウは互いがいつまでたっても寝付けないでいるのを心のどこかで感じ取っていた。

次の朝、東に昇った太陽を左に見ながら、スウとジークの二人は昨日と同じように街道を歩いていた。

しばらく歩いていると、だんだんと辺りの風景が変わってきた。

今までただの草原だった道の周りに、高さ1メートルを越す木製の柵が見えてきた。どうやら草原の一角を囲んでいるらしいのだが、あまりに広いため、柵の反対側はまったく見えなかった。その柵の中では、晴天の下、ちらほら見える牛が気ままに牧草を食べていた。別の方向を眺めみると、同じような柵があちこちにあり、あちらには羊、こちらには山羊と、それぞれ別の種類の家畜が放牧されていた。

これは、二人がとりあえずの目的地であったエスル村に近づいていることを表していた。なぜなら、それはエスル村に属する牧場だったからだ。

この辺りに気持ち良く広がるだっ広い草原は、地質が良く、牧畜には持ってこいの一等地として知られている。

それゆえ、エスル村を含むこの一角で生産される生乳や羊毛はスピルナ公国でもなかなかの評価を受けている、いわゆる一つのブランドである。

リゲルの一件から判明したスウの動物好きは、ここでもやはり表に出ていた。

「ねえねえ、ジークさん、羊さんって乾パン食べるかなあ」

偶然近くで草を食んでいた羊のそばに駆け寄って、スウは嬉しそうな声ではしゃいでいる。

「お前それ、オレが羊のために大事な食料を提供すること前提で言っていないか？」

ジークは少しイラッとしながら言った。一方的にジークから食べ物を貰っているだけのスウには、その日暮らしなリイト（旅人）であるジークにとっての食料の大切さが分かっていないのだ。

「あたしにはよくて、羊さんにはダメなの？」

スウは口を尖らせて言う。まるで自分と羊を同格に考えているような口ぶりだった。

「当たり前だろ。なんでわざわざ羊なんかに大事な食料を明け渡さなきゃいけないんだよ」

ジークはため息混じりに言った。動物をさん付けで呼んでいる辺りからも、スウがよほどの動物好きであることは分かっていたが、言うまでもなくそれは、ジークが羊に食べ物を与える理由にはならない。

「それに、そもそも羊は乾パンは食べないだろ」

「そうなの？でも、いつも草ばかり食べてて、つまらなくなるんかなあ」

スウは残念そうに言った。

「そりゃ、人間と羊とじゃ考え方が違うんだろ。そんな細かいこと気にするなよ」

ジークは呆れた声で言う。

「でも、羊さんだってたまには草なんかよりおいしい物、食べたくなるんじゃないの？ねー」

スウはそう言って左の手を柵の間から入れて羊の頭を撫でていた。ジークは呆れつつもそんなスウのやさしそうな横顔がどこか可愛く思えて、そんな自分に驚いていた。そしてそんな思考を振り払おうとするようにそっぽを向いたが、その感情の余韻はまだ胸の奥に

残って疼いていた。

「まったく、ついて来ないなら置いてくぞ」

ジークは焦って心にもない言葉を言ってしまう。そしてさっさと先へ進んだ。

スウはしばらくいやそうな顔をしていたが、仕方なくジークの後を足速に追った。

エスル村は、中央街であり、城壁で囲まれていた都会だったパテルとは対照的に、まさに田舎風でのどかな村だった。どの方向を見ても、なだらかな丘陵地帯にあるのは農場ばかりで、家らしい家は所々にいくつか見えるだけで、人の数より羊の数の方が多いのは火を見るよりも明らかだった。

なんだかんだ言って、この牧歌的な風景にはジークも心を和ませていた。

ただ、恥ずかしいのでそういう感情を表にだすことはほとんどない。

しばらく歩いて行くと、あるなだらかな丘を越えたところで、突然道の脇に一つの建物が見えてきた。

二階建ての四角い木造の建物で、正面にある入り口の上には看板があり、その横にはいくつも枝分かれした大きな黄ばんだ角が飾られていた。

看板には、何やら言葉が書かれていたが、あいにくスウは文字が読めなかった。

「『レインディア亭』だ。レインディアってのはトナカイの事だよ」

スウが尋ねるとジークはそう答えた。

スウはそこで、看板の横に飾られた角がトナカイの物だと分かった。端から端まで2メートルはあるかというほどのこの角の持ち主は、一体どんなトナカイだったのだろうか。

そんなことをボンヤリと考えていると、いつの間にかジークはそのバーに入って行ったので、スウはいそいそとそれに続いた。

レインディア亭は、数えるほどしかないテーブルに、数人の村人が座っている。カウンターの奥では眼鏡をかけた細身のマスターが、せつせとグラスを磨いている。窓からはほのぼのとした朝の日差しが差し込み、茶色い床を照らしていた。スウが遠慮がちに開いた櫺の扉は、扉にさげられたベルを揺らし、カラカラと乾いた音を立てている。

朝のバーは、スウの抱いていたイメージとは違い、実に閑静な物だった。酒場が活気づくのは、昼ではなく夜である。

ただ、その中で多少目立つものがあるとすれば、それは一人カウンター席に座った旅装束の女性客だった。

ジークはバーに入るなり、カウンターの方へと歩み寄った。スウはジークの目的を知らないのです、どうするべきか一瞬迷ったが、結局ジークと一緒にカウンターへと歩いた。

「よう、ジーク、来たか」

すると、マスターがジークに話し掛けてきた。カウンター席に座っていた女性客も、それに反応したのかジークの方を振り向く。フードのしたから覗いたその顔は、だいたい二十歳前後と言ったところだが、化粧もしておらず髪は肩にかからない位の長さに切っている、あまり女性らしくない顔立ちに見える。一言でいえば、色気がない。

マスターはふと視線をスウに向けた。その刹那、スウにはマスターの視線がスウの尖った耳を見てにわかには鋭くなったように見えた。しかしそれはほんの一瞬の事で、次の瞬間にはにやっとした笑いを浮かべて、こう言っていた。

「今日はずいぶんと可愛い連れがいるじゃないか、ジーク」

マスターはからかうような声音で言った。

「お前もそろそろカノジョが欲しくなる年頃か？」

「ちげーよ、成り行きだよ、ただの」

ジークはイラッとした声で言い返した。

「そんなこと言って、顔が赤くなってるぜ、ジーク」

男言葉でそう言ったのは女性客の方だった。

「うるせえ！」

ジークはカツとして言った。

「あの、ジークさん…この人たちって…？」

そこにスウが遠慮がちな声で口を挟む。

「ん？ ああ、悪い、紹介が遅れたな」

ジークは頭をかきながら言った。

「こいつらは、オレと同じ、『リイト』のメンバーだ」

ジークはマスターと女性客を指し示した。

「つつても俺は『元』だがな。シグルス・キエスト、今はこのレイ
ンディア亭でマスターをしてる。以後お見知りおきを」

先にマスターのシグルスが言った。

「そんであたしはカレハ・ホーライク」

それに続いて女性客のカレハが気さくな声で自己紹介した。

「…あたし…スウ・ロ・ヤマ・イシュラーグ」

スウもそれに釣られるように自己紹介した。

「ずいぶんと珍しい名前だな。ま、よろしくな、尖り耳のおチビ
ちゃん！」

カレハがそれに答える。

「ほらほら、二人とも、いつまでもそんなところに突っ立ってないで、
こっちにきて座りなさいな」

シグルスがスウとジークに向かって言った。

「それもそうだな」

ジークはそう言ってカレハの右に空いていたカウンター席に腰掛
ける。スウはそれに続いてジークの右隣りに座った。

「さてと、ジークは酒は駄目だし…オレンジジュースでも飲むかい
？」

シグルスがからかうように言う。

「誰が飲むか！」

その言葉にジークがキレた。

「そう言うなって。ジークみたいなお子ちゃまにはぴったりじゃねえか」

そこに追い討ちをかけるようにカレハがからかう。

「オレはガキか！」

「違うのかよ」

「っ…」

ジークはそこで言葉に詰まった。認めようが認めまいが、十六歳という年齢そのものは変えられない。

「そもそも、こんなどうでもいいところでキレてるのがガキの証拠だな」

「っ…」

どんどん追い込まれていくジーク。そしてカレハがさらに追い討ちをかけようとしたその時、シグルスが一言。

「そんなことで調子に乗るカレハも一緒にオレンジジュース行きだな」

「なっ…てか、オレンジジュース行きって何だよ！」

そこでカレハがつっこむ。

「決まってるだろ？『ガキ扱い』って意味だよ」

「っーかちよっと待て、今カレハ『も』って言ったらろ！オレは外せ！」

クールに返すシグルスと、小さな事を気にする子供っぽいジーク。そんな様子を、スウは半ば放心したようにボーツと眺めていた。

どうやら長い付き合いらしいこの三人の会話に、スウは自分の入るすき間がないことに気がついていていた。

スウは、胸に詰まる物があるのを感じて、俯いて、茶色い木製のカウンターに無数に走る木目を見つめた。そして無意識の内に左手の人指し指を伸ばし、横に走るその焦げ茶色の線をなぞる。ニスを塗られた冷たい、なめらかな木目の上に指を滑らせつつ、スウはひそかにため息をついた。

（結局、あたしには居場所なんてない…）

長年、周りの人間という人間にいわれのない差別をされてきた。

父の居たあの家以外に、スウには居場所などなかった。まして父が死んでから二年、スウは居場所も生き甲斐も持てずに、流れるままに生きてきた。そして、ついに生きることさえも諦めかけたその時、ジークが現れたのだった。

もしかしたら、この人なら、自分の居場所になってくれるんじゃないか。そんな淡い期待を抱いて、必死で縋り付いたのだ。

けれど、もしかしたら、そんなものはただの自分の思い込みなんじゃないだろうか。そんな不安が、常にあった。

実際、おそらくジークは今自分が居なくなったとしても、何も気にかけないだろう。スウがどれだけ必死でも、ジークが同じように自分のことを思ってくれる訳ではない。

自分勝手な考え方だと自覚はしている。出会ってまだ二日の自分とジークがあまり打ち解けられないのが当然だと言うことも、分かっている。でも、それでも、もっと自分を見てほしいと切に願う自分は消えてはくれない。そんなことを考える度、胸が苦しくなった。

自分は誰にも必要とされていない。スウの中でその思いは、父が死んだあの日から、日に日に強くなっていた。

自分は一体どうすればいいのか。スウはそう自問した。

だが、返ってくる答えはなかった。

「：あれ？　そういや、スウはどこ行ったんだ？」

不意にカレハがーオレンジジュースを飲みながらー尋ねた。

気がつくと、ジークの隣にいたはずのスウは、いつの間にか居なくなっていた。

「なっ、あいつ、いつの間に：」

ジークが驚いた声をあげた。

「お前、隣に座ってたのに気づかなかったのか？」

そう言うシグルスも、やはり驚いている様だった。

「……」

ジークは返す言葉もなかった。三人もの人間がいる中で、誰にも気づかれずにその場を離れるなど、そう簡単にできることではない。というかそもそも、なぜいなくなったのだろうか。

「ちっ、仕方ねえ、とにかく捜しに行くか」

ジークが舌打ちして言った。レインディア亭の中に隠れられそうな場所はない。そう考えてドアに向かおうとすると、シグルスがそれを引き止めた。

「待て、扉から出て行っただんなら、ベルが鳴って気づいたはずだ。あの子がそこを通ったはずはない」

「だとしたら、どこから……」

そこでジークは思い出した。レインディア亭には裏口があるはずだ。スウがバレないように出て行っただのなら、そこしかありえない。そこで裏口へ向かおうとすると、またもやシグルスがそれを制した。

「何だよ、シグルス」

ジークが突っ掛かるようにシグルスに言った。シグルスはそれに対して冷静な声で答えた。

「行く前に、一つ教えろ、ジーク。あの少女はそもそも何者なんだ？」

その問いに、ジークはたじろいだ。そこに、シグルスがさらに問う。

「あの紫の瞳に尖り耳、素人が見たって普通の人間じゃないって分かる。お前はなんで、あんな少女を連れているんだ？」

「……うるさいな、そんなのオレの勝手だろう」

ジークはそう言い捨てると、裏口へと向かった。

「しゃーない、あたしも手伝うか」

続けてカレハもジークの後を追う。

二人が出て行った後、シグルスは一人、考え込んでいた。

ジークとカレハは、裏口からレインディア亭の外に出た。パツと見たところ、辺りは一面緑の草原で、スウが隠れられそうな所はほとんどない。

「おい、ジーク、あたしは念のため店の周り捜すから、お前はあっち捜してこいよ」

カレハは、草原の中でも特に背の高い草が生えている場所を指差してそう言った。スウがいついなくなっただのか、定かではないが、そう遠くには行っていないはずだ。もしスウが隠れているとすれば、それ以外に考えられる場所はない。

「分かった」

ジークは一言そう言っていると、走って行った。

そしてカレハは店の横にある納屋に向かった。

スウは膝を抱えて、暗い納屋に座っていた。

ほとんど使われていないらしい納屋は、所々にすき間ができて、そこから差し込んだ細長い光が、スウの指先を照らしている。その指の上を、小さなクモが這っていたが、スウは嫌がるそぶりも見せなかった。

スウはまたため息をついた。何より、自分勝手な自分が情けなかった。

（何でこんなことしてるんだろ）

その時、外で草を踏む足音が聞こえてきた。スウはドキッとしつつその足音を聞いていた。

足音は納屋の、スウがもたれ掛かっている扉の反対側で止まった。

「スウ、そこに居るのか？」

それはカレハの声だった。

「カレハさん……」

スウはかすかにため息をついた。

「ジークじゃなくて悪かったな」

スウのため息を知ってか知らずかカレハが言った。

「ジークに捜しに来て欲しかったんだろ」

「そんなこと…」

スウはごまかすようにつぶやく。

「隠すなよ。隠したってアタシには分かる」

カレハが言った。

「え…？」

その言葉に、スウはふと顔をあげた。その動揺は、扉の向こうのカレハにも伝わったようだった。

「アタシは、今のあんたとおんなじ表情をした奴を、今まで二人見てるんだ。だから、あんたが何を考えてるのか、大体想像がつく。せっかく時間もあるんだ。少し、話をしないか？」

カレハは気軽な声でそう言った。それが自分を元気づけるためだということとは、スウにも分かった。

「それはいいですけど…ジークさんは？」

思い出したように尋ねる。

「あいつなら今、あんたを捜しに出てったぜ」

「じゃあ、カレハさんはどうしてあたしがここにいて分かったんですか？」

「悩んでる時は、誰だってどっか狭い部屋に入りたがるだろ？」

カレハは当たり前のように言った。

「でも、今はそんなことよりあんたの話だ」

スウは自分の膝を抱く腕に少し力を加える。背中にあたった扉越しに、カレハが反対側に座ったことが分かった。

「あんた、居場所が欲しいんだろ」

カレハは少し間を置いて言った。スウは腕の力をまた少し強めた。凶星だったからだ。そしてカレハは続けた。

「理由は聞かないよ。人間誰しも、自分一人の胸に仕舞って置きたい事はあるからな。理由はともあれ、あんたは自分の居場所が、居場所になってくれる人間が欲しかった。だから、ジークについて行ったんだろ」

「：はい」

やはりこれも凶星だった。スウは隠そうとはせずに素直に認めた。「だけど、あんたはジークが本当に自分の居場所になってくれるか不安だった。だから突然いなくなったりして、あいつがどう反応するかを試そうとした。これも合ってるか？」

「：どうして、そんなに分かるんですか？」

スウがそう尋ね返したのは、驚いたからでも、怖くなったからでもない。

嬉しかったのだ。今までこんなに自分のことを理解してくれた人はいなかったから。

「アタシは、ジークみたいなデクの坊じゃないからな」

カレハはそう言って笑った。そして続ける。

「それにしても、あんたもいくらなんでもここまでしなくたって、他にも方法はあっただろうにな。」

要するに、不器用なんだよな、あんたも、ジークも」

「ジークさん：も？」

スウは驚いて聞き返す。

「そうだよ。あいつは昔っから不器用だった。何よりあいつは、自分の弱さを他人に知られたくないんだ。アタシも、初めてあった頃はあいつの事を理解するまで大変だったぜ」

「ジークさんの弱さって、どういう事ですか？」

「あんたも気がついてるんだろ。あいつは、優しいんだよ。根っからのお人よしだからな。それで、あいつはそれを自分の弱さだと思って、必死に隠してんだ」

その言葉に、スウは納得した。この前ジークが優しいのか優しくないのかはつきり解らないと感じたのは、実際にジークの中でその二つの気持ちが葛藤していたからだだったのだ。でも：

「でも、優しさって弱さじゃないですよね」

その言葉は、スウの口から自然と漏れだしていた。

「やっぱあんたもそう思うよな。でも、それをあいつは分かってな

いんだよ。あいつはそういうところが不器用なんだ。だから言ってくけど、あいつが言った言葉をそのままに受け取るなよ。あんた達がどうやって出会ったのか知らないけど、もしあいつが『好きにしろ』なんて言ってたんなら、それは『一緒に来て下さい』って意味だからな」

それを聞いてスウは心の中でクスツと笑った。まったく凶星だったからだ。そして今度は、また嬉しくなった。いつしかスウは膝を抱えていた腕を解き、足を延ばしてリラックスした体勢になっていた。さっきまで自分の中に溜まっていた不安も緊張も、いつの間になら無くなっていた。

「：おっと、そろそろジークが戻って来る頃だな。」

カレハがそう言って立ち上がるのが、物音で分かった。

「あんね、カレハさん…」

スウが唐突に言った。

「なんだ、スウ？」

カレハの声は、始めと同じく気軽だった。

「：ありがとうございます」

ありったけの想いを込めて、スウはそう口にした。

「いいってことよ。困った時はお互い様さ」

カレハが答えたその言葉もまた、温もりに溢れていた。

「まったく、今までどこ行ってたんだよ、スウ」

スウの姿を認めたジークは、ため息をつきつつそう言った。

「ジークさん、あたしのこと、心配してくれてたの？」

スウはジークを見つめながら言った。

「な、何言ってるんだよ。突然いなくなったから、びっくりしただけだよ」

ぶっきらぼうにそう言うジークの頭には、そこそこに雑草が絡まっていた。

「あんね、ジークさん」

スウは勇気を振り絞って言った。

「なんだよ」

ジークは続きを促した。

「ジークさんは…ジークさんは、あたしが居てもいい？」

「何言ってるんだよ…言っただろ、好きにしろって」

ジークはゆっくりとした口調でそう言って不自然に目をそらした。すると突然、スウはジークに抱きついた。そして言った。

「やっぱり、ジークさんって優しいんだね！」

そう言うスウは、ジークに出会ってから初めて笑顔になっていた。「どうしてそうなるんだよ！つーか、くつつくな！」

しっかりと抱き着いて離れようとしないうちに、ジークはドギマギして叫んだ。

しかし、ジークは突然喚くのをやめた。

自分に抱きついたままのスウが、声を出さずに泣いてる事に気がついたからだった。

ジークはどうしていいか解らずに、とっさに助けを求めるようにカレハに目を遣った。

カレハは黙って見ていたが、意味ありげに一つ頷いて見せた。

ジークは少し戸惑っていたが、やがて覚悟を決めて、両手でスウを抱き返した。

スウが泣き止むまで、ジークはずっとその華奢な体を支えるかのように抱き続けていた。

一章「Sue's Hidden Trouble」完

第二章 「幻の町」

―エスル村 レインディア亭―

「おう、ジーク、スウはもう眠ったのか？」

ジークがレインディア亭の二階から階段を下りてくると、カウンター席に座っていたカレハが声をかけてきた。時間は夜8時過ぎ。外は日が落ちてあらかた暗くなっていたが、それに反比例するようにレインディア亭は賑わっていた。

エスル村では昼の間は家畜の世話に忙殺されている農夫や他の町や村から来た人達の数少ない娯楽と社交の場として、レインディア亭は重宝されている。ランプの赤っぽい明かりのもと、あちらでは羊飼いが仲間同士でが酒を飲み、こちらでは吟遊詩人気取りの素人がめっちゃくちゃな詩を歌うというように、バーは小さいなりの賑わいを見せていた。

「まあな」

ジークは短く答えた。スウがジークに甘えたがってなかなか寝付けなかったなどは、恥ずかしくて口が裂けても言えない。

「お前もガキなんだから早く寝た方がいいだろ。成長止まるぞ」

シグルスが言う。

「だからガキ扱いすんのはやめろって」

ジークは怒る気力もなく言った。

「まあいい。ちょうどよかった。ジーク、お前に聞きたいことがある」

とシグルスがジークを手招きした。

「何だよ」

ジークはカウンター席に座りながら聞いた。といっても、何を聞かれるのかは察しがついていた。

「昼はいろいろあってちゃんと聞けなかったが、うちとしても正体

の分からない奴をおいそれと泊める訳には行かないんでね」

シグルスは遠回しに言ったが、ジークにはその言葉の意味ははっきり分かった。

「…スウの事か」

カレハも気がついて静かに言った。

「結局のところ、あいつは一体何者なんだ？」

シグルスが問い詰める。

「…正直、オレも知らない」

ジークが目を反らして答える。

「じゃあ、危険かも知れないやつをわざわざ連れているのか？お前らしくもない。時期が時期なんだ、用心するに越したことはないぞ」

シグルスは多少責めるような口調で言った。

「危険？それどういう意味？」

とカレハが口を挟む。

「阿保か、カレハ。あいつのあの紫の瞳も、尖った耳も、『精霊族』だけが持つ特徴だ。たいていの国じゃ不吉の証とされている」

シグルスがそう説明している間、ジークはずっと目を背けていた。

精霊族というのは、魔法の力を持ったあらゆる生き物のことを、人間が呼ぶときの総称だ。魔法になじみのない一般の人間達のほとんどは、精霊族は不吉で恐ろしい物だと信じている。

「…『精霊族』が不吉ってのがそもそも、人間が勝手に作った偏見じゃねえかよ」

ジークが吐き捨てるように言った。

「そうは言ってもな、ジーク。人間が『精霊族』を怖れるのだって、ちゃんとした理由があるからなんだよ」

シグルスが諭すように言った。

「…とにかく、スウのことはオレに任せてくれないか」

ジークは静かな声で言った。

「なぜだ？なぜそんなにあの娘を庇う」

シグルスが訝るような口調で尋ねる。カレハはその様子を黙って

観ていた。

「それは…それも、オレにも分からねえ」

ジークは情けない声で答えた。

シグルスは深くため息をついた。そしてしばらく黙っていたが、やがて言った。

「…テグレスには、オレが適当に伝えておく。それくらいはいいだろう？」

それは暗に、それ以上口出しはしないという意味を込めていた。

「すまねえ、シグルス」

ジークは静かに、しかし感謝の気持ちを込めて言った。

「話は代わるけど」

その時ジークが思い出したように言った。

「リゲルがカレハに用があるって言ってたが、あれは何だったんだ？」

街道でリイトの伝令役のイタチ・リゲルに会った時、確かにそう言っていた。

「ああ、あれか」

カレハも思い出したように言った。

「なーに、たいしたことじゃないよ。気にすんな」

カレハは持ち前の軽快な声で言った。

「それより、ジークもカレハももう寝ろよ。二人とも、明日発つんだろう？」

シグルスのその言葉に、ジークとカレハは渋々従った。

「ふぁーあ…」

次の朝、目が覚めたスウは大きなあくびをした。

これほど気持ち良く寝たのも、スウにとっては久方ぶりのことであつた。なにしろ父親が死んで、放浪するようになって以来、その日その日の宿さえもないような生活を送ってきたのだ。こうしてち

やんとしたベッドで寝れるというだけで、スウは幸せだった。

そっと木の床に足を下ろす。裸足が冷たい木に触れるのを感じた。ベッドから立ち上がると、サラサラとネグリジェの裾がすねを擦る。たまたまこの部屋のクローゼットに使われずに眠っていたのをスウがもらったその薄桃色の綿のネグリジェは、スウには多少大きかったが、寝巻としては十分な役目を果たしていた。

スウは大きく伸びをして、残る眠気を振り払った。そして右手の袖で目を擦りながら窓に歩み寄り、左手でカーテンを開ける。やわらかな朝の日差しが、スウの影を長く映し出し、その光はスウの隣のベッドで寝ているジークの顔をも照らし出した。

「う：ん、もう朝か？」

その光で目が覚めたジークが、寝むたげな声で言った。そして窓際に立っているスウを一瞥して、一言

「お前、寝癖ひどいな」

と言った。スウは赤面して、慌てて左手で自分の長い髪を撫で付ける。が、効果は皆無だった。

「そういうジークも、だいぶひどいぜ」

ちょうどその時ジークのベッドの後の扉を開いて入ってきたシグルスが言った。

「うるせえな…」

と言いつつジークも自分の髪を撫で付けた。

「とにかく、朝メシできたから用意できたら下に来いよ」

シグルスはそう言い置いて、また下に戻って行った。

「よっ、スウ、ジーク」

二人が下のレインディア亭に降りると、先に起きてテーブル席に座っていたカレハが声をかけてきた。

「おはようございます、カレハさん」

スウがそれに応えて挨拶する。

「よう、カレハ」

続いてジークも言った。

「：おっと、そうだ、スウ、あんたに渡したいもんがあるんだ」
カレハは思い出したように言った。

「あたしに：？」

「そうそう、あった、これだ」

そう言ってカレハがそれを取り出した。

スウにはそれが何だか解らなかった。陶器でできた手の平大より少し大きい楕円型のそれは、表面に穴がいくつも空いていて、端っこの方に丸っこい出っ張りがあった。穴の様子から、どうも中は中空のようだ。

「なんだ、あんた、オカリナを知らねえのか？」

首を傾げるスウに、カレハは拍子抜けしたように言った。スウはこくりと頷く。

「：オカリナ？」

スウはそれの名前を繰り返した。

「そ。ようは笛だよ、笛」

カレハはそう説明して、オカリナの吹き口に口をあて、実際に吹いて見せた。

すると、オカリナの穏やかな音色が、店の中に広がった。その音は、聞く人の心を鎮め、慰めるような優しい音だった。低く、高く、その音は響いた。

カレハが吹き終わると、スウは名残惜しそうに音の鳴らなくなつたそのオカリナを見つめた。

「：やっぱ、アタシじゃ吹けてもこんくらいか」

カレハはどこか情けなさそうにそう言った。

「そんなこと：すごく綺麗でした」

スウは首を振って言った。世辞などではなく、正直にそう思ったのだ。

「褒めてくれるのはうれしいけど、こんなんじやまだまだなんだよ、実際」

そういいつつも、カレハはちよつと照れているようだった。

「これはだいぶ前にリイト仲間からもらったオカリナなんだけど、アタシはあんま音楽は好きじゃないし、特別上手でもないから、持っても宝の持ち腐れなんだよ。だから、あんたが持ってた方が良いいと思ってさ」

そう言ってカレハはスウにそのオカリナを手渡した。が、スウはただただ戸惑うばかりだ。

「でも、あたしだって笛なんて吹いたことないですし……」

「大丈夫、基本のところはアタシが教えるから。次の街までは一緒に行くことになったし、あんたも何がしか趣味があった方がいいぜ。見たところなんにも持っていないみたいだし」

カレハは明るい声でそう言った。

「あ、ありがとうございます……」

スウは感激した様子で受け取った。

近くで見ると、オカリナの表面には不思議な模様が刻まれていた。のたうつ蒼い炎のような。逆巻く水の流れのような。スウはその美しい模様にしばし見惚れていた。

「おい、スウ、お前も早く朝メシ食っちゃえよ。じき出発するぜ」
ジークにそう言われ、スウは一度カレハにお辞儀をしてから、ジークと同じテーブルに座って食事に取り掛かった。

そんなスウの素直で可愛い仕種を、カレハは微笑んで眺めていた。そして思った。

こりゃ、ジークが惚れ込むのも分かるな。

そうしてジーク、スウ、カレハの三人はエスル村を後にした。次なる目的地はノーレラス地方の中央街・レイアークだ。今度はパテルからエスル村の旅よりも数倍長い距離があるので、かなり長い旅になりそうだ。

スウにとって、それは有り難かった。それはそのまま、カレハと

同行できる時間が長くなるという事だからだ。スウは自分を理解してくれるカレハに早くも好感を持ち始めていた。もし、スウにとってジークを不器用な兄に例えるなら、カレハは面倒見の良い姉のような存在だった。

スウはジークの事が好きだし、慕っているが、なにぶん異性であり、その分の価値観の違いもあって、今までも気まずい空気が流れることが多かった。それに対して、カレハは親切だし、いろいろな気を遣ってくれた。

そんな道すがら、カレハはスウにオカリナの吹き方も教えてくれた。すると、どうにもスウには音楽の才能があったらしく、指使いや音の出し方などの基本はあっという間にマスターしてしまった。

旅の一日目が終わる頃、三人は道の脇の岩影に丁度いい夜営場所を見つけた。ここなら一晩、誰の邪魔も入らなそうだ。

「それにしても」

とジークは言った。

「お前らなんでそんなに仲が良いんだ？昨日、何かあったのか？」

そう言われてスウとカレハは顔を見合わせた。そしてスウは微笑んで言った。

「ひみつ♪」

「：：そうかよ」

カレハがなぜか笑いをこらえているなか、ジークはぶっきらぼうに答えた。

「あんね、ジークさん」

たき火も消えかけた真夜中、隣で寝袋に包まっていたスウが、同じく寝袋に包まっていたジークに尋ねた。カレハはたき火を挟んだ向こう側で眠っていた。

「なんだ、スウ」

ジークが静かに言った。

「少し、お話しない？」

スウのその提案は、昨日のカレハに影響されて出たものだった。

「お話ったって、何を話すんだよ」

「うーんと…ジークさん、あたしに何か聞きたいこと、ある？何だかいつつもあたしの方から質問してばかりだから」

スウはそう言った時、もしかしたらジークは何も聞きたいことはない、と言うかと思った。しかし、その予感の外れた。

「お前さ、自分の親の事って、覚えてるか？」

ジークがそう言うときにスウに背を向けたのを、スウは物音とたき火の薄明かりで見て感じた。

「あたしの、親？」

スウは少し意表をつかれて聞き返したが、やがて答えた。

「本当の両親は、覚えてないけど、あたしを拾って育ててくれた人なら覚えてる」

「そっか。どんな人だった？」

ジークはなおも静かに尋ねた。

「すぐく、優しい人だった。セル国の山の真ん中の家で一緒に住んでいたの。すごくいい人だったのに、あたしと同じで村の人達からは嫌われてた。だけど、二年前に死んじゃったの」

スウは二年前まで住んでいた、今は遠く離れてしまったその家を思い出すようにして話した。

あの家の庭に、春にたくさん咲いた勿忘草の一本一本まで、思い出すことができた。そして、その勿忘草から連想される、父親の優しい顔…。

「名前は？」

「確か…シルート・サーズ」

父親を名前で呼ぶこともなかったので、スウはその名前を思い出すのに少し時間がかかった。

スウはそこでふと、思いついて尋ねた。

「じゃあ、ジークさんは？ご両親のこと覚えてる？」

その、あくまで無邪気にスウの口から漏れただけのその問いに、

ジークは悩むようにしばらく黙って、それから答えた。

「覚えてない。オレは何も、覚えてないんだ。親も、家族も、いたのかどうかさえもな…」

スウはそれを聞いて、自分の胸に痛みのようなものを感じた。それが単なる憐れみなのか、それとも他の何かなのか、スウ自身にも解らなかった。

しかし、今まで自分だけが不幸だと思っていた自分に気づかされたのは、紛れも無い事実だった。

ふと、昨日カレハが、ジークのことを不器用だと言っていたのを思い出す。それに、ジークは自分の弱みを人に見せたがらないとも言っていた。

もしかしたら、表には出さないだけで、ジークはスウよりも、他の誰よりも辛い思いをしているのではないだろうか。普段は気丈に振る舞っていても、その心は誰よりも寂しさに溢れ、そしてありふれた愛を求めているのではないだろうか。

「じゃあ、ジークさん」

スウは胸に込み上げて来る思いのままに言った。

「あたしが、最初の家族じゃいや？」

「スウ、お前…？」

ジークは驚いたように聞き返した。

すぐに、スウは自分の言った言葉が誤解を招きかねないということに気がついて、急いで付け足した。

「だから、そのう、そういう意味じゃなくて、家族みたいに仲良くしようって、いう意味で…」

ジークはそんなスウを信じられないような表情で見つめていた。スウは自分の声が尻すぼみに消えて行くのを、まるで別の人間として横から聞いているように感じた。そして、スウはジークを見つめ返していた。

スウとジークは暗闇の中、そうしてしばらく見つめ合っていた。が、最後にジークが口を開いた。

「スウ：ありがとう」

その言葉は、スウの胸に、そして言った本人であるジークの胸にも、深く、深く、暖かい温もりとなって伝わっていった。

翌日、三人は同じように旅を続けた。地図によると、目的地レイアークまでは五十キロほどで、早ければ明日には到着する計算だ。しかし、そうしてしばらく歩いていると、一行は思いがけないものにぶつかった。

なぜか、村があつたのである。地図に載っていない、存在しないはずの村が。

「どういうことだ？ 地図の間違いか？」

道の先に突然姿を表したその佻しい感じの村を見て、ジークは言った。

「いや、アタシは前にこの辺りを通った事があるけど、こんな所に村なんてなかったぜ」

カレハも戸惑いつつ言った。

その村は、茶色い荒れ地に木造の小屋のような家がただ並んでいるだけの、淋しげな村だった。

しかし、その古びた家はどうみても、昨日今日に新しくできたばかりの物には見えなかった。

「こりゃあ何かありそうだな…とにかく、中に入ってみるか？」

ジークがそう言うと、カレハも警戒しつつ頷いた。

村に入ると、乱雑に並んだ小屋の中から、物音がして、あちらこちらの小屋から、村人達がぞろぞろと出てきた。

村人達は、みなみすばらしい姿をしていた。やせ細った身体にぼろを纏っていて、持っているものといえば、刃こぼれしたナイフだけだった。

いつの間にか、ジーク達は武器を持った村人達に囲まれていた。「こいつら、追剥ぎか!？」

ジークは焦った声で言う。村人達はその言葉には何も反応を見せず、ただ黙って距離をつめてくる。

「どうもそうっぽいな」

カレハも少し焦ったように言う。

「おい、スウ、危ないから――」

振り返りつつそう言いかけて、ジークは絶句した。一瞬して、カレハもその事態に気付いた。

スウは忽然と消えうせていた。

気がついた時、スウは暗闇の中にいた。辺りを見回すが、どこにも光の一筋も見えない。そこにあるのは、完璧な闇。それだけだった。

「ここ、どこ？」

そう言った、はずだった。しかし、声は出てこなかった。スウの背中に悪寒が走った。

さっき、ジークやカレハと一緒に歩いていて、あの村が見えた時、スウは何か嫌な予感がした。

耳の奥で妙な耳鳴りがしたのだ。それは、危険が迫っている時のスウによく起こることだった。

しかし、それをジークに伝えようとした矢先、突然目の前が真っ暗になって、気がついたらこの暗闇の中にいたのだ。

「ジークさん、どこ？」

再び喋ろうとするが、やはり声は出なかった。口からはただ、スーと空気が出るだけだった。スウは底知れぬ不安に押し潰されそうになっていた。

「ケケケ、いくら喋ろうとしても無駄さ。オイラの術にかかっている限りはね」

闇の中から、突然声がした。その不気味な笑い声に、スウは聞き覚えがあった。込み上げてくる恐怖を押し隠すように、スウは声のした方向の暗闇をにらみつけた。

「ケケケ、アンタみたいな小娘に睨まれたって怖くとも何ともないしさ」

その言葉と共に暗闇に二つの丸くて赤い目と、同じ赤色の三日月型の口が現れた。完全な真っ暗闇の中で、その不気味な目だけが、獲物を観察するかのように、スウを眺めていた。

それは間違いなく、スウとジークが出会ったあの夜に、魚屋を操ってパテルを襲撃し、火の海に沈めた悪魔、メトネスだった。

「ま、とにかくしばらくここで静かにしてるのさ。オイラの仲間が、アンタの大事な人達を殺すまでね」

メトネスのその言葉に、スウは戦慄した。

自分はこの悪魔に捕えられて、あの怪しい村では、もう一体の悪魔が、ジークとカレハを狙っている。

何とかして、この事態をジークに伝えなくては。

…でも、どうやって…？

「くそっ、どうなってんだ！」

ジークは襲ってくる追い剥ぎ達を、鞘をつけたままの大刀で押しのけながら言った。今やジークとカレハは、数十人に及ぶぼろを着た村人に囲まれていた。

「スウを捜そうにも、こんなしぶとい奴らに纏わり付かれちゃ…」

いくら襲って来るとはいえ、人間相手にそうそう刀を使えないのは、まだ少年と言っても良いくらいの年齢であるジークには、当然の事だった。

「しょうがねえ。追い剥ぎども！ちっと痛いかもしれないけど、我慢しろよ！」

そんなジークを見かねたカレハは、そう見栄を切って腰に挿した曲刀を抜いた。日の光がその刀に反射して、白く輝いた。

よく研がれた白刃を見れば、さしもの追い剥ぎもたじろぐか。と思いきや、それに対しても村人達は何の反応も示さなかった。

そんな追い剥ぎ達の様子に、ジークは違和感を覚えはじめた。どんな物にも反応を示さず、自分の命にさえ興味が無いかのよう、ただ黙々と向かってくるその姿：

「待て、カレハ！こいつら、もしかしたら悪魔に操られてるだけかもしれない」

はっと思いついてジークは叫んだ。たしか、パテルに現れた、メトネスという悪魔に操られた魚屋が、ちょうどこんな雰囲気だった。「それでも、こっちは早くスウを捜しに行かなきゃなんねえんだろ！ちよっとくらい攻撃したってしょうがねえだろ！」

そう言いつつもカレハは素早く手の中で刀をひっくり返し、峰を使って村人を押しのけた。

そして、スウというキーワードはジークにも響いた。この事件に悪魔が関係しているなら、なおさら急いでスウを見つけたさないと、最悪の事態も考えられるのだ。考えたくはないが。

「分かった」

ジークはそう言って背中に背負っていたもう一本の棒状の包みも取り払った。そこから出てきたのはジークの『二本目』の大刀だった。

そしてジークは二本の刀の鞘を取り去った。まさに秋水と言うべき曇り一つ無い二つの細長い煌めきが、中から解き放たれた。

そこにジークの両側からナイフを持った追い剥ぎが飛び掛かってきた。ジークはそのボロボロの刃物をしゃがんでかわし、それと同時に両手を左右に突き出して、刀の柄をその腹に食い込ませた。ま

ずは、二人が倒れた。

すると今度は後ろからジークの足に向かって腕が伸びてきた。ジークはそれをジャンプで避けて、逆にその足を（骨を折らないように加減しつつ）踏み付けた。

間髪容れずに正面から追い剥ぎが投げたナイフが飛んできた。ジークはそれを刀で弾き返し、一瞬で追い剥ぎとの距離を縮めておもしろい刀を振って、峰を使って隣にいたのを含め三人の追い剥ぎ

を吹っ飛ばした。

一方カレハも、曲刀を巧みに操って一振りごとに追い剥ぎを蹴散らして行った。

いかに峰打ちとはいえ、本気を出したジークとカレハの前に、始めから飢えていた追い剥ぎなどは、物の数に入らなかった。

最後にジークが正面の敵のナイフを身軽なスウェーバックでかわし、右手を地面について、カウンター気味の上段蹴りをかませて、追い剥ぎ達は全員静まった。

「それにしてもスウは一体どこに行ったんだ？」

ジークは焦った声で言った。

「おい、ちょっと待て、ジーク」

カレハはそう言って村の一角にある小屋を指差した。

そこに、スウがいたのだ。小屋の前に立って、必死で右手を振っている。

「スウ、今までどこに行ってたんだよ！」

カレハはそう叫んでスウに駆け寄った。ジークはなぜか冷静にその様子を見つめていたが、やがてカレハに続いた。

どうやらスウには目立った外傷は無いようだった。

「ごめんなさい。でも、もう大丈夫……」

カレハとジークが近くに来ると、スウは伏し目がちに言った。

「いいっていいって、とにかくまずはこの村からどうぜ」

カレハはホッとした声で言った。しかし相変わらず、ジークは何も言わない。カレハも、さすがに訝しんだ様子で言った。

「どうしたんだよ、ジーク。こんなところからは早くおさらばしようぜ」

しかしやはりジークは黙って見ていた。カレハもスウも不思議がっていた。スウは首を傾げて、無意識の内に右手で左の前髪をかきあげた。

次の瞬間、ジークはありえないことをした。突然、目の前のスウに切りかかったのだ。スウは驚いて後ろに跳び退いた。

「何すんだ、ジーク！」

カレハが信じられない思いで叫んだ。

「…その程度で、オレを騙せると思ったか？」

ジークはカレハの問いには答えず、スゥに向かって静かだが怒りの籠った声で言った。カレハにはその言葉の意味がにわかには解らなかった。そしてスゥが言った。

「騙す？ どういう…」

「お前はスゥじゃない」

ジークはそう言って再びスゥに切りかかった。

スゥは再び避けようとしたが、今度は間に合わなかった。ジークの大刀がスゥに迫る。

スゥが刀に切られた瞬間、カレハはスゥの姿がぼやけ、そして霧散するのを見た。スゥの体は一瞬にして黒い霧となり、それが再び集まって、全く違う姿が現れた。

それは、人間の姿をした真っ黒な影だった。その出で立ち、前にパテルを襲った悪魔、メトネスに酷似していた。が、メトネスよりもずっと長身だった。

「…なぜ偽者だと判った！？」

長身の悪魔は唸り声で言った。

「残念だったな」

とジークは答えた。

「スゥは左利きだ」

「…なるほどな。私としたことが、そんな単純なミスを…」

長身の悪魔は呟くように言った。

「ジーク、コイツが悪魔か？」

カレハはその長身の悪魔を睨みつけながら聞いた。

「ああ。といっても、パテルを襲った奴とは違ってみてえだが」

ジークはそう答えた。

「ふふふ、その通り。私の名はグルナ。見ての通りの悪魔にございます」

長身の悪魔、グルナはニヤリと笑ってそう自己紹介した。そして、続けて言った。

「さて、それでは、そのお命頂戴いたします」

その言葉にジークとカレハは身構えたが、グルナは襲って来なかった。その代わり、二人の後ろで何か物音がした。

二人が振り返って見ると、さっき倒したはずの追い剥ぎ達が、再び起き上がって来ていた。

暗闇の中、スウはメトネスを睨み続けていた。それに対してメトネスの方は余裕たっぷりといった様子でスウを眺めている。

スウは、ただ捕まっているだけのふりをしながら、必死に耳を澄ませて外の音を聞き取ろうとしていた。

スウの耳は、尖っているだけの事はあって、普通の人間にはできないことができた。

だから、今のスウには外のどこかでジークやカレハが戦っているのが音で判った。そして、二人がなぜか何もない場所で空気を相手に戦っていることにも気付いていた。その近くに悪魔の気配がする。

スウは生れつき回転が遅いらしい頭を必死で働かせて考えた。

メトネスを見れば分かるように、悪魔には、特異な能力がある。

おそらく二人は、その悪魔の術にかかって幻覚を見せられているのだ。

だとすれば、このままでは、際限なく起き上がってくる幻の敵と戦って、二人はいずれ力尽きてしまう。どうにかしてその事実を二人に伝えなくては。

しかし、どうやって？

メトネスがいるかぎり、声を出すことはできない。ここから出ることもできない。こんな状況で、どうやってジーク達にメッセージを伝えることが出来るか。

大事な人が殺されようとしているのに、自分には何もできない。そう実感した時、スウは突然弱気になった。メトネスを前にして

ピンピンに張り詰めていたスウの心は、今にもプツリと切れてしま
いそうになっていた。

スウのそんな感情の変化を感じとってか、メトネスはその不気味
な笑みをさらに深めた。その残酷な赤い光を放つ

今や心の鎧が崩れ、目の前の恐怖に直に晒されてしまったスウに
出来ることは、ただ震え、弱々しい姿で座ったまま後退りすること
だけだった。

スウの背中が壁に当たった。その時、何かが壁にあたって鈍い音
を立てた。それは、スウが肩からかけた丸いポーチだった。

それを見て、スウの中に微かな希望が芽生えた。

そのポーチの中に入っているのは、スウが生まれて初めて他人か
らプレゼントされた物だった。それと同時に、一つの記憶が蘇った。

それは、スウがカレハからオカリナの吹き方を習っていた時の記
憶だった。

「そういうや、スウ、そのオカリナの前の持ち主が言ってたんだけ
どよ」

とカレハは思い出したように言った。

「音楽には『魔を祓う力』があるって、知ってるか？」

「魔を、祓う？」

スウは小首を傾げて聞き返した。

「そ。音楽には、不思議な力がある。突き詰めて言えばただの音色
と音階の繋がりなのに、人の心を安らげたり、感動させたり、いろ
いろな事ができる。まるで小さな魔法みたいにな」

カレハは遠くを見るようにして言った。

「しかもそいつが言うにはよ、そのオカリナには、音楽が持つその
不思議な力を、手助けする魔法の力が秘められていて、その力を使
いこなせば、音楽の魔法が本物になるって言うんだ」

それを聞いてスウは自分の手の中にある、そのオカリナを見つめ
た。例の不思議な模様が描かれている以外には、別にどうというこ

とはない、ただのオカリナだ。

「音楽の魔法が…本物に…」

スウはその言葉を繰り返した。音楽の魔法、その言葉はスウの中に強く響いた。そして、カレハに尋ねた。

「それって、どうすればできるんですか？」

「えっ…と、それは…何て言ってたっけな」

「…覚えてないんですか？」

どうやらど忘れしてしまったらしいカレハのその言葉に、スウは残念そうに聞いた。

「いや、ちよつと待て、今思い出す！」

半ばスウを励ますように、半ば自分に言い聞かせるようにそう言っ
てカレハは、なんとか思い出そうとしてしばらく首をひねって唸
っていたが、いつまで経っても思い出せないようだった。

「『清き心と、麗しい姿を持つシオンの姫よ、静かなる星空に届か
んばかりの、暗闇にさす希望のごとき聖曲を奏でよ』…だろ」

横からそう口を挟んだのは、意外にもジークだった。

「あ、そうそう、確かそんな感じだった！」

カレハもピンと来たように言った。

「ジークさん…それって？」

スウが尋ねた。

「そのオカリナに纏わる詩だよ。そして同時に、そのオカリナに秘
められた魔法を説明するためのヒントでもある。そのオカリナの前
の持ち主が、そう言ってた」

ジークは少し芝居がかった厳粛な声でそう言った。

スウは、その詩にどういう意味があるのか、後で考えてみたが、
何も思い付かなかった。

もし、このオカリナに魔を祓う力が、本当にあるのなら、もしそ
れを使えば、この悪魔達にも対抗できるのではないか。

しかし、そのためにどうすれば良いのか、スウには解らなかった。

それに、もしここでオカリナなど吹いたら、自分は間違いなく目の前の悪魔・メトネスに殺されてしまうだろう。

でも、このまま何もしないで、ジークやカレハが死ぬことになるくらいなら、たとえ針の穴ほどの希望でも、せめて何かしたほうがマシだ。

スウはポーチ越しにオカリナを握る手に力を込めて、必死になって願った。

（どうか、できることなら、あたしに、みんなを救う力を……！）

「ちくしょう、一体どうなってやがんだ、こいつら！」

ジークはそう唸った。

相手はただの村人だ。ただの飢えた追い剥ぎだ。なのに、なぜだ。なぜ倒れない。

なぜ、いくら攻撃しても、まるで痛みもダメージも無いかのよう
に立ち上がってくる。

それは、横で戦っているカレハも同じだった。

「やっぱり、あんたが何かしてるのか!？」

カレハは虚空に向かって叫んだ。

さっきまでそこにいたはずの悪魔、グルナは居なくなっていた。

ジークとカレハが不死身の追い剥ぎ達に氣をとられている間に、忽然と消え失せてしまったのだ。

「ぐっ……この状況、どうにかしないと……」

目の前の追い剥ぎの一人を押し倒しつつ、ジークが言った。

悪魔が関わっていると分かった今、少しでも早くスウを見つければ、何をされるか分かったものではない。しかし、この村人達はどれだけ攻撃しても全くダメージを受けないのだ。

ジークとカレハはまさに、敵の策略に乗ってしまったのだ。

そして、ジークのその焦りが、わずかな隙を作ってしまった。その隙について、追い剥ぎが後ろから体当たりをしてきた。

ジークはその追い剥ぎを切り付けた。追い剥ぎはジークの右の刀

をまともに受けて、吹っ飛んだ。しかし、しばらくするとやはり、再び起き上がってくる。

終わり無き戦いが続くうちに、ジークは大分息を荒げていた。横を見ると、カレハも似たような状態だった。

このままじゃ、全滅する。

ジークは、そう感じ始めていた。

その時だった。どこからともなく、戦場にオカリナの音が響き渡ったのは。

「これは：アタシがスウにあげたオカリナの音だ：」

カレハが唾然としてその音に、曲に聴き入った。

その曲は、カレハが教えたものではなかった。静かな短調で奏でられる、落ち着いた、どこか淋しげな曲だ。その音が、ジークとカレハの心に響いた時、不思議な事が起こった。

二人の周りを取り囲んでいたあの追い剥ぎ達が、一瞬で影となり、その形を失い、そして消えたのだ。

そこまで来て、ジークとカレハは初めてその追い剥ぎ達が単なる幻覚だったことに気がついた。

そして、追い剥ぎ達だけではない。気づけば周りにあったはずの村さえも、闇となって消え去っていたのだ。そして、二人の前には、さっきのあの長身の悪魔、自分の幻術を無力化させられ、うろたえているグルナだけが残った。

「く：これは、どういう事だ：！？」

グルナは狼狽した声で言った。

「私の術が、掻き消されただ！？」

しかし、ジークはその悪魔に構っている暇などなかった。

「スウのオカリナが鳴ったってことは、鳴った方向にスウが：」

そう言ってジークは音のした方を振り返った。もうオカリナの音は止まってしまったが、その方向は間違いなく分かった。そしてその方向へ走り出そうとしたジークはしかし、思い止まったように立

ち止まって向き合っているカレハとグルナを見遣った。

「ジーク、気にすんな！こっちは任せとけて」

そんなジークの氣遣いを見て、カレハが言った。

「…分かった」

ジークはそう言い残してその場を走り去った。それを見たグルナはジークを追い掛けようとしたが、それをカレハの曲刀が制した。

「そうそう思い通りには行かせないぜ、悪魔ヤロウ！」

ジークはカレハのその声を背中に受けつつ、走りつづけた。

音のした方角にジークがしばらく走っていると、村の幻影のあった荒地の端にあった林にたどり着いた。

その中であつた獣道にそって行くと、その先には小さな洞窟があつた。周りにはそれ以外にそれらしい場所はなかった。ジークは急いでその中に入った。

スウは足をバタつかせて必死にもがいていた。メトネスに首を掴まれていたのだ。ジークとカレハを救うためにスウが決死の覚悟で吹いたオカリナは、今は地面のどこかに転がっている。

「よくもやってくれたね、この疫病神が」

スウを宙づりにしたまま、メトネスは罵った。計画を破綻させられたことに怒り狂っているのだ。

メトネスはもともと直接戦うタイプの悪魔ではないのだろう、特別強い筋力を持っている訳ではないようだ。それがスウにとって唯一の幸運だった。それでも、このままでは自分は息が出来なくてすぐに死んでしまうだろうということは分かった。

こんな時なのに、ふとスウは思った。少し前までの自分なら、死ぬことを怖がったりしなかっただろう、と。なにせ、自分の命にすら興味が無かったのだから。

しかし、今はなぜか違った。もう殺される事が分かっている、心のどこかがそれを否定しようともがいていた。

なぜだろう。なぜ、そんな思いが沸き上がってくるのだろう。

その時だった。一瞬白い閃光が走ったかと思うと、突然、首を掴むメトネスの力が弱まり、そして手が離れた。スウは糸の切れた操り人形のようにその場にくずおれた。

目の前に、なぜか苦悶の表情を浮かべたメトネスの二つの目があった。真っ暗なこの場所では、それ以上は何も見えなかった。

「スウ・ロ・ヤマ！オイラはアンタを憎む！いつかまたアンタを殺しにきてやるしき、せいぜい覚悟するんだね！」

そう叫び残して、メトネスの赤い目が消えた。そして、それまでスウを締め付けていた言い知れぬ精神的な重圧も、それと同時に消え失せた。

「なんとか、間に合った、みたいだな：大丈夫か、スウ」

走り続けて息切れした、ジークの声が、聞こえた。

死なずに済んだ。スウはそう実感するのに少し時間がかかった。

しかし、真っ暗な中でジークの手が、スウの手を握った時、そして腕の力でスウを立ち上がらせてくれた時、そして外に出て眩しい光の中でジークの横顔を見た時。

スウは、自分が今までなかったほど死ぬことを怖がった理由が、分かった気がした。

「ジークさん：怖かったよお：」

そう言ってスウは堰を切ったように泣き出した。

「お、おい、泣くなって：」

ジークはやはりどうしていいか解らずに途方にくれていた。

「ぐ：メトネスは逃げたようだな」

グルナはジークが走って行った方を見て、不意にそういった。

どんな方法かは知らないが、どうやら悪魔は離れていても互いの気配を読むことが出来るようだ。

「よそ見すんなっ！」

カレハはそう言ってグルナに切り付けた。しかしグルナの体は、黒い煙のようになっていて、カレハの刀は空を斬った。カレハは諦

めずに何度も刀を振るったが、結果は同じだった。

「いいだろう：どちらにしろ作戦は失敗したのだし、もはやここに居残って戦う意味はないか」

グルナはそう言い残して、よく悪魔がやるように、真っ黒な霧となって霧散した。

「最後に一つ言っておくが、この程度で我々悪魔を負かしたと思うなよ！」

グルナの声が、誰もいない虚空に響き渡った。

「カレハ、無事か!？」

そこに、ジークとスウが駆け寄ってきた。スウの頬は濡れていた。「ああ。スウも、とりあえず無事そうよかったな」

カレハは、まだメトネスから受けたダメージが抜け切れずジークに手を引かれてよろよろと歩いてくるスウを見て言った。その手にはあのオカリナが握られている。

「そういや、スウ、さっきどうしてオカリナの力が使えたんだ?」

突然思い出してジークが聞いた。

「分かんない：必死になってたら、突然頭の中に、あの曲が思い浮かんで：それで、吹いてみたの。それだけ：」

スウは、どこか落ち着かない様子で言った。

「それは、もしかしてスウの正体と関係が：」

カレハは反射的に口走る。

「言うな、カレハ」

それをジークが静かな声で止めた。カレハも自分が言った事に気づき、ハッと口を押さえた。

「：やっぱり、あたしって普通じゃないのかな」

そう言うスウの目は、はや潤み始めていた。

カレハは自分の言ったことを心から後悔した。普通の人間にはない紫の瞳と尖った耳を持つが故にこれまで、差別の下で生きてきたスウにとって、普通ではない、ということがどういう意味を持つのか、少し考えれば分かったはずだ。

「そんなこと無い」

しかしジークは確信に満ちた声で言った。

「…え？」

スウは驚いて聞き返す。

「大丈夫だ。お前は何もおかしくなんかない」

ジークは繰り返すように言った。

「ジーク…」

カレハが呟くように言った。

「とにかく、そういうことは後にしようぜ」

ジークが言った。

「オレは腹が減った」

二章「The Phantom Town」完

第三章 「禍つ尾」

―幻の町―中央街ノーレラス間の街道―

「それにしても、あの悪魔達の目的は何なんだろうな？」

グルナという悪魔が作り出した幻の町を出て、昼食も済ませた後、ジークは歩きながら隣を歩くカレハに向かって言った。

「初めのパテルでの事件は無差別だったみたいだが、昨日の幻の町での襲撃は、明らかにオレ達三人を狙ってた」

「：まあ、アタシ達『リイト』はこうして悪魔の動きを探ってるんだから、あいつらにとってはいろいろと邪魔なんだろうな」

カレハは一考して、答えた。

カレハの言う通りだった。しばらく前、スピルナ公国に悪魔が入り込んだことをいち早く知ったリイトのリーダーは、その動きを監視するという命令をリイト全員に発していた。

「そういえば、オレが初めにパテルに向かったのは、テグレスに言われたからだったな。あれはメトネスがパテルに攻め入るのを知ってたからなのか。あのババア本当に何でも知ってるんだな」

ジークは思い出したように言った。

「まあ、あんなんでも『預言者』だからな」

カレハは笑って言った。

「あんなんって何だよ。仮にもリイトのリーダーだぜ」

ジークは呆れたように言った。

そう、テグレスとは、リイト達をまとめるリーダー的存在の老婆だ。スピルナ公国の東に位置するゾド山脈の中の緑龍峠に住んでいて、世の理を見通す『預言者』でもある。

「自分もババア呼ばわりしてるくせに何言ってるんだよ」

カレハはそう言ってまた笑った。しかし、ふと思いついたように言った。

「そういえばジーク、お前はレイアークに着いた後どうするんだ？」
「ああ、そう言えばまだ決めてなかったな」

ジークはそう言って数歩後ろを歩いていったスウに振り向いて尋ねた。

「なあ、スウ、どこか行きたい所あるか？」

「ジークさんの居るところ！」

スウは即答した。

「いや、そういう意味じゃなくて…」

ジークは呆れた声で言った。

「ま、しょうがない、そのことはレイアークに着いてから決めることにしようぜ」

「お前、そんなことでリイト（旅人）として大丈夫なのか？」

今度はカレハが呆れたように言った。

「何言ってるんだよ。リイトだからこそ、自由気ままに旅してるんじゃないか」

ジークはさも当たり前のように言う。変に筋が通っているだけに反論しづらい。

「ところで、そういうカレハはどうするんだよ」

と逆にジークが聞く。

「アタシは東に向かうぜ。テグレスに幻の町の事も報告しなきゃなんねえみてえだし、ちょっと東の方に野暮用もできたしな」

カレハが答える。

「それじゃ、もうカレハさんに会えなくなるんですか？」

そこでスウが少し寂しそうに口を挟んだ。

「大丈夫大丈夫、互いがリイトである以上、またそのうちどこかで会えるからよ！」

カレハは明るい声でそう励ました。

「それに、別れることになるレイアークまではまだ時間があるんだから、先のことと悩むのはやめようぜ、な」

カレハはそう言ってスウの頭を撫でた。それでもスウが浮かない

顔をしているのを見て、カレハはスウに近寄ってジークに聞こえないように耳打ちした。

「それに、アタシがいなくなったらまたジークと二人っきりになれるんだぜ」

それを聞いたスウは一気に尖り耳の先まで赤面した。

「今何言ったんだ、カレハ？」

ジークが気になって尋ねたが、カレハはニヤニヤして言った。

「ジークみたいなデクの坊にはわかんない話だよ」

「…悪かったな、デクの坊で」

「否定しないのかよ…」

カレハはジークの意外な反応に内心驚いていた。ジークのあの性格からして、いつものように反論するかと思ったのだが。今までスウの事ばかり気にかけていたが、もしかしたら、この二人の出会いがきっかけで変わり始めているのはスウだけではないのかもしれない。いい。

「どうしたんだ？」

ジークにそう聞かれて、カレハは自分がすっかり考え込んでいた事に気づかされた。

「あ、いや、何でもねえよ」

カレハがそう答えると、ジークは素直にそうか、と呟いた。ホント、ジークが鈍感で良かった。とカレハは思う。

「そう言えば、スウ」

思い付いたようにジークが話を変えた。

「なあに？」

「幻の町でお前が吹いたあの曲、今でも吹けるのか？」

「え…と、どうかな…」

スウは困ったように言い淀んだ。

「あの時は必死だったから、あんまり覚えてなくて…たぶん、今はムリ…」

スウはだんだんと申し訳なさそうな口調になっていた。スウのオ

カリナの持つ魔を祓う力は、今後悪魔と戦うことになった時も役立つかもしれない。だからスウは、次は同じようには吹けないかもしれないという事を負い目に感じ始めているのだ。

「そうか。いや、いいんだ。ちよつと気になったただだからよ」

フォローするようにそう言いつつ、ジークは頭では別のことを考えていた。

それは、自分の非力さについてだった。

自分は弱い。その思いが、ジークの心を占めていた。もしスウの助けがなかったら、自分も仲間も、死んでいただろう。そしてメトネスを切ることが出来たのも、メトネスがスウの首を絞め付けるためにもともと煙状だった体を実体化させていたからだだった。それも、間接的にだがスウがいたお陰だった。

力がほしい。ジークは心のそこでそう感じ始めていた。悪魔にも直接ダメージを与えることの出来るような力が。

ジークは他の二人に見えないようにしながら、両手の拳をきつくにぎりしめた。

その日の夕方、一行は夜営地を見つけ、スウは習慣になり始めているオカリナの練習をした。基本を覚えたとはいえ、まだまだ技術は未熟で、失敗する度に自分なりに試行錯誤して対応していた。

カレハがオカリナの元の持ち主から聞いて覚えていた曲は数えるほどしかなく、その内誰かに新しい曲を教わる必要があるそうだった。

そしてスウの懸念通り、幻の町で吹いた曲は覚えていなかった。

「だから気にすんなって、な」

草の上に座ったまま、しょんぼりした表情のスウに、ジークは隣に座って励ますように言った。

「でも…」

スウはやはり諦めきれない様子だった。

「…だって、もし次悪魔に襲われたら、どうするの？」

「それは…」

ジークは痛いところを突かれて言い淀んだ。それこそまさに、ジークが最も懸念している事だった。

「あたしだって、ジークさんの役に立ちたいから…あたしにできることなら…」

スウは自信なさげに、ゆっくりとした口調で言った。

「…分かった。でも、だからと言って無理はするなよな」

ジークはそう言いつつ、スウを安心させることが出来ない自分を憎んでいた。

「うん…」

スウは目を伏せてそう頷いた。その後、互いに何も切り出せない時間が長く続いた。

しかし、しばらくして思い立ったようにジークに振り向いた。そして静かな声で言った。

「話が変わるけど…ジークさん、あたしの正体っていったい何なんだと思う？」

「！…スウ、その事は…」

ジークは驚いて言った。まさかスウが自分からその話を切り出すとは思わなかったのだ。スウにとって『そのこと』は、考えたくもないコンプレックス以外の何物でもないだろうに。

「さっきは取り乱しちゃったけど…やっぱりあたしも、自分のことが自分で分からないのは、怖いから…。ね、ジークさん、あたしっていったいなんだと思う？」

スウはどこか縫るように、草の上に置かれていたジークの手の上に自分の手を重ねて、そう尋ねた。

「それは、オレにも分からない。オレも親がいなくて自分の出生が分からないから、お前のそういう気持ちもそれなりに分かっていると思う。でも…」

ジークはスウのいる方向ではなく前を向いて、スウに向かってだけではなく、自分自身にも言い聞かせるように言った。

「一つだけ言っとく。オレはお前の正体は何だろうと気にしない。どんな出生だろうと、どんな力を持っていようと、結局お前はお前、スウ・ロ・ヤマ・イシュラーク以外の何者でもないからな」

スウはその言葉のひとつひとつに聴き入っていた。そしてジークが話終わると、ため息をついて言った。

「やっぱり、ジークさんはすごいなあ。あたしはジークさんみたいに強くないから、すぐこんなに弱気になっちゃうのかな」

「そんなことないだろ」

すかさずジークが声を多少大きくして言った。

「お前は今日、自分の危険も顧みずにオレ達を助けてくれたじゃないか。お前がいなきゃオレ達は死んでた。スウはオレなんかよりもずっと強いよ」

「ジークさん……」

スウは半ば放心したような声で呟いた。ジーク越しに遙か遠くに見える夕日が眩しくて、スウは目を細めた。

「だから、お前はもっと自分に自信を持てばいい。持っていないんだ。な？」

ジークはスウを振り返って言った。ジークとスウの目が合った。

「……うん、ありがとう」

しばらくしてスウは言った。しかし、それから突然思い出したように言う。

「そうだ、オカリナの練習まだ途中だった！」

ジークの手に重ねていた手を離して、スウはオカリナの吹き口を口に含み、ゆっくりと息を吹き込んだ。出てきた音は、ゆったりとした落ち着いた音だった。さっきの練習の時にはなかった奥深さがあった。まだ初心者らしいたどしさは残っているものの、その音色にはどこか惹かれる所があった。

人々が現実を生きる内に忘れかけていた『幻想』そのものが籠った音色だと、ジークは感じた。どこか遠くにある世界、摩訶不思議で軟らかな光の差し込む、緑に満ちた世界。スウのオカリナの音色

は、そんな温もりに溢れた世界を想像させた。

そうしてオカリナを吹くスウの姿を、ジークは隣で不思議な感覚に包まれたまま眺め続けていた。

―幻の町のあった荒野―

「まさか、また計画を邪魔されるとは…」

グルナは齒噛みして言った。真っ暗な夜、そこにはパテルの脇の林の時と同じ、四人の悪魔達が集っていた。

「まったく、あいつらホントに気に食わないしさ！」

メトネスもグルナと同じような悔しさ剥き出しの声で言った。メトネスは右手でジークから一撃を受けた部分を庇っていた。明らかに深く切り込まれたようだが、血は出ていなかった。悪魔の体には血が流れていないのだ。

「ハッ、あんなやつら相手に傷まで負うとは、悪魔の名折れだなあ、メトネス」

二人の様子を見ていた別の悪魔が言った。その悪魔は、メトネスやグルナよりも人間に近い姿をしていたが、やはり体は真っ黒だった。そして、長い毛と、特徴的な長い尻尾が生えている。

「うるさいしさ、ベリウス！それにしても、スウ・ロ・ヤマめ、あんな力まで隠し持ってるなんてね…」

「あんな力、とはどういう事だあ？」

メトネスのその言葉に、ベリウスと呼ばれた悪魔は目を細めて聞き返した。

「…やつの笛の音で、私の作った幻が掻き消されたのだ」

グルナは静かな声で言った。

「ハッ、そいつぁ興味深い。いってえ、どういうことだ？」

ベリウスはさも面白そうに言った。

「やつが『特別な存在』だって事は知ってるが、まさか悪魔の持つ

闇の力を打ち消せるとは、思っても見なかったなあ」

「まあ、やつに限って言えば、あんな能力を生まれ持っていておかしくないがな。なにせやつは…」

「そんな事よりとにかく、今はあいつらを追いかけた方が良いしさ！この調子じゃ逃げ切られるぜ」

グルナの声に被せるようにメトネスが言った。そのせいで、グルナが言おうとしていた言葉は聞こえなかった。

「…それもそうだな」

グルナが半ば感心したように言った。

「メトネス、お前そんなマトモなこと言えたんだなあ。ずいぶんと成長したもんだぜ」

「お前はいつも気に障る言い方をするね、ベリウス！」

リイト達に二度も計画を邪魔されたメトネスは、悪魔達の中で最も気が立っていたようで、声を荒げて食ってかかった。

「まったくこの二人は…とにかく、早く行くぞ」

グルナは嘆息して言った。

「それで次は、どこ行くんだあ？」

「やつらの行き先はレイアークだ。それを追う」

「ハッ、そうかよ。けど、今度の襲撃はオレ一人に任せてもらうぜえ。お前らじゃ頼りないんでなあ」

ベリウスは意地悪そうな笑みを浮かべて言った。

「…勝手にしろ」

グルナは屈辱を噛み締めつつ言った。しかし確かに、今までの戦績からして、次はメトネスやグルナと違い敵に物理的に攻撃できるベリウスに行かせるのが妥当だ。

「じゃ、さっさと行くしさ」

メトネスのその言葉を合図に、メトネス・グルナ・ベリウス、そしてついに一言も喋らなかった四人目の悪魔は、例によって例のごとく闇の霧となって消えうせた。

ーノーレラス地方中央街レイアークー

翌朝、旅を続けていたジーク達の前に、中央街レイアークが姿を表した。外から見た感じは、パテルとほぼ同じだった。灰色の城壁に円形に取り囲まれ、その上から建物が建ち並ぶのが見える。

パテルと違うところといえば、街が湖の中に孤島のように建っているというところだ。

藍色の鏡のような湖面に映る、いくつもの塔がそびえる街の姿は、どこか神秘的な風格を漂わせていた。そしてその街の中央には、大きな灰色の荘厳な城が建っていた。城からは、いくつもの高さの違う塔が立ち並んでいた。もしその中で一番高い塔にのぼってそこからこの湖を眺めたら、きっとすばらしい風景が見えることだろう。

そしてその街からジーク達のいる湖畔までまっすぐに石作りの幅の広い橋が架かっている。

「この街は昔はルネアっていう一族がこの地方を治めてた時の城だったんだぜ」

とカレハがスウに説明した。

「二年前、スピルナ動乱が終わってスピルナが平等主義国になった時、当然ルネア一族の支配権も失われた訳なんだけど、ルネア一族はこの地方の人々に慕われてたから、それ以来も町長として、この中央街レイアークの主導権は実質的にルネア一族が握ることになった。まあ、それだけルネア一族の今の女当主・シーゼル・セン・ルネアが魅力的だったってことだけだな」

「そのシーゼルさんって、どんな人なんですか？」

とスウが無邪気に尋ねる。

「さあね、アタシも直接会ったことがある訳じゃないから、詳しいことは知らないけど…ま、これだけ人気があるんならそれだけ綺麗ってことじゃん？」

カレハは適当に答える。

「綺麗…」

その言葉はスウの心の中に不思議と響いた。その言葉は、自分とはまったく縁のない言葉だ。二年前から難民同然の生活をしていたスウは、自分の見た目に完全に無関心になっていた。

実際今も、ファッショナブルとはお世辞にも言えない、着古した茶色の質素な長袖シャツとスカートを着て、地味なサンダルを履き、顔に泥がついていても気にしないし、最後に髪に櫛をいれたのも、いつの事やら覚えてさえいない。

今まではそれでも気にならなかった。誰かに綺麗に見られたいと思われた事などないし、周りの人間の中にもまた自分の見た目を気にする人間はいなかった。

しかし今、人間らしい生活を多少なりとも取り戻しはじめたスウは、自分への関心もまた曖昧にだがり戻し始めていた。

そこへ来て『綺麗』という言葉聞いた時、スウの中の何かが動いた。

スウは、特別美人になりたいとは思ったことはないし、自分の見た目で周りの人を惹きつけたいとも思わない。

しかし、今のスウには一人だけ、少しでも気を引きたい相手がいる。それが誰だかは、言うまでもない。

スウは自分の艶の無い髪の手を見て、自分の今のだらしない服を見て、不意に恥ずかしくなった。

「おい、スウ、カレハ、早く行くぞ！」

その時、少し先に進んでいたジークが声をかけた。

「つたく、せっかちなやつだな」

と言いつつカレハもジークに続く。そこでスウも考え事を中断し、急いでその後を追った。

しっかりした石作りの大きな橋の手摺りには、植物をイメージしたらしい複雑な形の彫刻が彫ってある。

その手摺りの上から見える湖と、その先のほとりにある林は、こ

れまた中々いい風景だった。

橋にはジーク達以外にも数えるほどの馬車や通行人が行き来していた。その誰もがなぜか、心なしかウキウキしているようにスウには見えた。

そんなことを不思議に思いながら、スウはジークの後ろについて、高さ五メートルはあろうかという巨大な街の城門をくぐった。

すると、まず目に入ったのは街のどこか異様な賑わいだった。大通りの脇に建ち並ぶ商店街はともかく、普通の住宅までもが、色とりどりの装飾を施されていた。

といってもどうやらまだ準備途中と言った様子で、そこそこに脚立に乗って作業をする男達や、飾りの入った箱を運ぶ子供達の姿があった。その表情は、橋の上で行き交った人々と同じくことなく生き生きしていた。

「クレオスナ祭か：もうそんな時期になったのか」

スウの隣でジークが呟くように言った。

「『くれおすなさい』：？ジークさん、それっておいしいの？」

とスウがジークに尋ねる。

「いや：どう聞き取ったら食べ物に聞こえるんだよ」

ジークが呆れたようにつつこむ。

「だから、要するにお祭りだよ、お祭り」

そこでカレハがフォローする。

「それで：『おまつり』っておいしいんですか？」

「……」

さすがのジークとカレハもこれには閉口する。しかし当のスウはというと二人がそんな反応をする理由が分からず、ただ不思議そうに首を傾げるだけだった。

「どうしたんですか、カレハさん？」

悪気なくそう尋ねる無邪気なスウに、カレハは深く嘆息した。

結局、二人はスウに『お祭り』を説明するのに数分を費やすこと

になった。そうしてなんとかスウが納得したようなので、カレハは
やっとクレオスナ祭の説明に入ることができた。

「クレオスナ祭ってのは、スピルナに昔からある伝統的なお祭りで、
年に一回、ちょうど今から二週間後の五月十日から一週間行われる
んだ。もともとは、スピルナ帝国初代皇帝クレオスナがスピルナ帝
国を建国したことを祝う祭典だったんだ。でも、時代を経るにつれ
てだんだん、いわゆるお祭りの要素が強くなって行った。

クレオスナ祭では、国民は自分たちの一族の民族衣装を着て、そ
れぞれの伝統に則ってこの日を祝うんだ。もともと多民族国家で民
族間の軋轢が絶えなかったスピルナでは、民族同士の理解と親交を
深めるために、こういう祭典が必要なんだよ」

カレハはできるかぎり解りやすくかいつまんで説明したつもりだ
った。が、危惧していた通りスウはチンブンカンプンのようだった。
「なるほど…えっと、それで『くれおすなさい』って細長いんです
か？」

スウが尋ねる。

「なんでそうなるの!？」

とつつこむカレハ。

「え…それじゃ、丸いんですか？」

スウは驚いたように言う。

「お祭りだから!形なんてないから!」

さすがに気疲れして声を荒げるカレハ。

「それじゃ、『おまつり』って食べられないんですか!？」

スウは落胆した声で言う。

「どうしてお前は何でもすぐ食べ物に結び付けるんだよ」

そこに今まで横から二人の会話を聞いていただけたジークが
割り込む。

「だって、お腹すいたから、つい…」

そこにきて不意にしょんぼりするスウ。

「それはいいけど、少しは常識力も持つとけよ。今まで大変な生活

してきたのは分かるけど、いくらなんでも教養なさすぎだぜ」

とジークに言われてスウは情けなさにさらにしょぼくれてしまう。その様子を見ていてジークは不意にあることに気がついた。スウは、少なくともジークと会ってからは、一度も怒ったり言い返したりしたことがないのだ。

始めの頃ジークは、おいてきぼりにされるのを恐れていたからだと思っていたが、ジークの直感がなぜだか、理由はそれだけではないと言っていた。

「おい、ジーク、ちょっと言いすぎじゃねえか？」

そこでカレハがフォローするように言った。見るとスウは落ち込むあまり涙目になっていた。ジークは一瞬怯んだが、強がって言った。

「何言ってるんだよ。そうやって泣いたら許されるって思ってるから、女は質が悪いんだ。言つとくがオレはそんなのには騙されな……」

「……ぐすん」

「……しょーがねーな、今回だけだぞ」

ジークはそう言って照れを隠すようにすたすたと先を歩いて行く。

「ナイスだ、スウ」

ジークが声が聞こえない所まで行った時、カレハはスウの耳元でそう囁いた。

「ふえ……？何がですか？」

しかしもともと悪気のなかったスウにとっては、カレハの言葉は当惑が増すだけだった。

三人が街を歩いていると、来たるクレオスナ祭に備えて装飾を施されつつあるレイアークは、道を進むごとに新たな姿を見せた。当然、ノーレラス地方にもともと住んでいる民族だけでなく、他の地方から移住してきた人々や、クレオスナ祭を通じて他民族との交流を深めようとやって来る人々もいるので、街は色とりどりに彩られていた。

あちらを見れば様々な色をゴチャゴチャに混ぜたようなタペストリを掲げていたり、そちらを見れば極彩色の摩訶不思議な絵柄が描かれた旗をなびかせていたり、かと思えば別の場所ではとげとげの茨を家全体に巻き付けるように飾り付けていたり、スウはそのひとつひとつを眺めようとするだけで首が痛くなりそうだった。

クレオスナ祭まではまだ二週間あるという。それでこの状態だ。本番になったらどれほど豪華な物になるのか、スウには到底想像がつかなかった。

「ジークさんは、クレオスナ祭に参加したことあるの？」

スウは何気なくジークに尋ねた。

「いや、オレがこの国に来たのはたった四年前だったからな。この祭は、去年まではスピルナ動乱の影響で休止していたんだ。だからこの国の国民にとっても、この祭はかれこれ十二年ぶりってことになるんじゃないか？」

ジークがそう答えた。

「…それじゃ、その前はどこに住んでいたの？」

スウが不意に気になって尋ねる。しかしなぜか、ジークはその問いに答えようとはしなかった。

「後でアタシが教えてやるよ、スウ」

ジークの反応を不思議に思っただけで再び口を開きかけたスウを制すように、カレハがスウの耳元で囁いた。

「とにかく、ジークの前でその話はしないほうがいい」

スウはなぜだろうと聞きたかったが、それを今、口に出すべきで無いことは流石に分かっていたので、何も言わなかった。

「そう言えば、カレハさんはこの街であたしたちと別れることになってましたよね。いつ、ここを発つんですか？」

スウは知恵を働かせて、話題を変えた。

「そうだなあ、残念だけど、今日中には出るようになるかな」

カレハはそう答えて、それから突然言った。

「もしかして、ジークと二人きりになるのが待ち切れないのか？」

「そ、そんな、違いますよお！」

慌ててそう答えながら、スウは顔を真っ赤に染めていた。

「嘘つくの下手だねえ、あんた」

カレハはからかうように言った。

「だから、そうゆう、事じゃなくて……」

スウは慌てて言い訳するようにつかえつつかえ喋ったが、終いにはどうしていいか分からなくなって困り果てて半泣きしてしまった。

「どーしてここで泣くんだよ。あんた、感情のコントロールも下手なんだなあ」

そう言いながらカレハは、ジークが『スウは訳が分からない』と言っていた理由も、何となく分かる気がした。

これもクレオスナ祭の影響なのか、街の宿屋という宿屋は客で溢れかえっていて、一行はジークとスウの寢床を探すのにかなりの時間を要した。そしてしばらく歩いてやっと空いている部屋を見つけた。

それからジークは、買い物をするためにスウを部屋にのこして出かけて行った。

一人残されたスウは何となく部屋を見回していた。すると、扉の横に据え置かれた鏡台と、その上にあったベッコウ製の櫛が目にとまった。

スウは鏡台の椅子に座って、おそろおそろ櫛を手にとる。今までスウは自分で髪を梳いたことは一度もなかった。しばし櫛を目の前に掲げて眺める。

茶色い半透明のベッコウのその櫛は、これと言って凝った作りのない、シンプルな物だった。柄は軽く括れていて、柄の先についた十三センチほどの長さの板から、数え切れない数の歯がついている。スウはどこか緊張した面持ちで、その櫛を持った左手を後頭部にそえる。そして、思い切って櫛を下に滑らせる。

ぐしっ、という髪の毛の悲鳴のような音を立てて、櫛は数センチも進まない内に動きを止める。それきり櫛はスウの髪の毛に刺さったまま動かなくなってしまった。

今まで自分がどれだけ自分の髪を粗末に扱ってきたのかを、スウは思い知って、深くため息をついた。

「あんた、髪の毛の梳き方も知らないの？ まったく…」

その時突然カレハの声がして、スウは飛び上がった。カレハはいつの間にか扉を挟んでスウの反対側の壁にもたれ掛かっていた。

「カレハさん…」

「貸しな、アタシが梳いてやるよ」

カレハはそう言うのと、スウの後頭部に刺さっていた櫛を抜き取って、鏡台の手前にあったベッドの端に座る。そして、慣れた手つきでサツサツとスウの長い髪を梳きはじめた。

「スウ、あんたせっかくキレイな髪持ってたんだから、ちゃんと大切にしていやんなきゃダメだぜ」

カレハは梳きながら言った。

「それに、あんたみたいな年頃の女の子なら、自分の髪くらいは梳けて当然なんだぜ、ホントは」

そう言われてスウは恥ずかしくなって少し顔を赤らめた。スウは言うまでもなく壁側を向いていたが、鏡に写るので、カレハはスウの表情を見ることができた。

「ごめんなさい、あたし、いつもカレハさんに迷惑ばっかかけて…」

「別に謝らなくていいよ。迷惑だとも思ってたねーし」

カレハはそんなスウを励ますように言った。

「そりゃ確かに、手のかかる妹が増えたみたいで、めんどくさいとも思ってるけどさ。でも、そういうのは迷惑ってのとは別だろ？」

「増えて…？ カレハさんには妹さんがいるんですか？」

スウは何気なく聞き返した。

「まあな。ホント、手のかかるやつだよ。かれこれ六年は会ってな

いけどな」

そう言うカレハの顔が一瞬曇ったように、スウには鏡ごしに見える。姉妹なのに六年も会ってないということは、何かただならぬ事情があるのだろうか。

そう察してスウは、そのことについてそれ以上は聞くのを止めて、カレハが自分の髪を梳いてくれる規則的で、心地よい感覚にその身を任せた。

その頃、ジークはレイアークの商店街を歩いていた。食料など必要な物は買い終えたが、何となくまだ宿に帰る気にはならなかった。改めて考えてみると、スウに出会ってから、こうして一人でゆっくりにするのは初めてだった。

ジークは別にネクラではないが、やはりこうして一人で目的もなく歩き、リラックスするのもなかなかに風情があった。

商店街の先にある大きな噴水が見えはじめた頃、不意に商店街の一角にある装飾品店が目についた。

特別な理由があった訳ではない。特にどうということはない、どこにでもあるような店だった。しかし、何かがジークをその店に引き付けたのだ。

ドアを開くと、チリンチリンとベルが鳴った。店中の配色は落ち着いた茶色で統一されていて、ジークが装飾品店に抱いていたけばけばしいイメージとはまったく違った。

「いらっしやい、ぼうや」

カウンターから声がした。振り返ってみると、声の主は店主とおぼしき老人だった。

「お探し物は何かね。カノジョへのプレゼントかい？ え？」

「べ、別にそんなんじゃないよ」

ジークは慌てて否定する。

「ふふ：若いつてのはいいねえ」

店主はお見通しといった様子で楽しそうに言った。決まりが悪く

なって、ジークはその言葉を無視して、店内を見回す。

すると、壁に並んだペンダントの一つが、不意に目に留まった。

「これ、見たところエンリアル製だな」

ジークがそれを手に取りながら言った。

「ほう、良く分かるね」

老人は感心したように言う。

「エンリアル製の銀は他のどのよりも純粋で澄んでて、独特の金属光沢があるから、一目見ればすぐ分かる。今までいろいろ旅して来たから、これくらいの事はな」

ジークはそう言いながら、手に持ったペンダントを眺めた。三センチほどの大きさの銀に、信じられないような細かい装飾が施されている。そしてその中央に、大粒のアメジストがはめ込まれていて、透き通った光を放っていた。その紫の輝きは、スウのあの大きな瞳によく似合いそうだと、何となく思った。

「どうやらぼうや、ただもんじゃ無いな」

店主はなおも面白そうに言った。

「そんなんじゃないよ。なあ、これいくらだ？」

ジークは手に持ったペンダントを掲げて見せた。

「本当は五千ギルだがね、ぼうやなら安くするよ」

「いや、定価で構わねえよ。五千だな」

そう言ってジークは財布を取り出した。そして金貨を一掴み無造作に取り出した。

「これで足りるか？」

「ぼうや、アンタやっぱりただもんじゃないじゃろ……」

カウンターに置かれた十数枚の金貨の束を見て店主は言った。五千ギルなど、大人であってもそんなじょそいらの一般人がポケットマネーで簡単に出せるものではない。そして店主はふとジークの白い髪に目をとめた。

「ひょっとしてアンタ、『白銀の獅子』じゃあないかね？」

店主はまさかという様子で尋ねた。まさか、こんな子供が……

「：たしかに、昔そう呼ばれてたこともあったな」

ジークは半ばはぐらかすように言った。正直、あの頃の事はあまり思い出したくはなかった。

「なるほどね、こんなぼうやがねえ…」

店主は驚いたように言った。

「ったく、だからどうと言う訳じゃねえだろ。とにかく、これはもらってくぜ」

ジークはそう言ってたった今買ったペンダントを、店主から受け取った箱にしまい、ポケットに押し込んだ。

「おう、カノジョによろしくな、ぼうや！」

ジークが扉を出る際に後ろから店主がからかうように声をかけてきた。ジークは反論する替わりに扉を大きな音を立てて閉めた。

目の前に、商店街の突き当たりにある、街の広場に堂々とそびえる白い石でできた噴水が見えた。湖に浮かぶこの街にはピッタリのモニュメントだ。おそらくは、今の女町長であるシーゼルが作らせた物だろう。

ジークは何となくその噴水を眺め、広場にいくつか据え置かれたベンチの一つに座った。

この街も今じゃこんなに平和になったのか、とジークはしみじみ思った。前にここを訪れた時は、まだスピルナ動乱の真っ只中で、この街に限らずどこもかしこも荒廃しきっていた物だった。

それが今は、アルデバラン・アルトの働きによって平和を取り戻し、これだけ繁栄している。そして今、十二年ぶりに、人々に愛され続けたクレオスナ祭が復活しようとしている。改めて考えてみると、どこか不思議な気分だった。

その時、ふと反対側のベンチに座っている人影が目についた。こんな暖かい明るい陽気なのに、その人は全身を深緑色のマントで包んでいるのだ。その上フードも目深に被っていて横を向いているせいで顔も見えず、高い鼻の頭だけが見えている。それなりの身長はあるようだが、そのシルエットから女性だろうと予測はついた。

のどかな広場の風景にまったくそぐわないその女性が、なぜかどこかで見たことがあるような気がして、ジークはしばらく不思議な思いでその女性を見ていた。

「ジークさーん！」

その時、突然後ろからスウの声がして、ジークは飛び上がった。振り返ると、ベンチの後ろにスウが立っていた。

「カレハさん、もう行っちゃったよ。挨拶しなくてよかったの？」
スウが心配そうに言った。

「いいんだよ。リイトの別れに言葉はいらねえからな」
それに対してジークはどうでも良いというように答える。その間もジークの目線はベンチに座った女性に注がれていた。

「あの人が、どうかしたの？」
スウは不満げに少し頬を膨らませて尋ねた。そしてその女性を眺めて、言った。

「なんだか、ふしぎな人：すごく寂しそう：」
なぜスウにそんなことが分かるのか、ジークにはまったく分からなかった。しかし、パテルで魚屋がメトネスに操られていたのを見抜いたことから、やはりスウには何かしらの能力があるのだろう。もしかすると、精霊族の証でもある尖り耳とも関係があるのかもしれない。

その時、ジークの後ろでスウが何かに気づいた様に突然後ろを振り返った。

「どうしたんだ、スウ？」

ジークが眉をひそめて聞いた。

「この『音』：ジークさん、この街の近くに、悪魔が来てる！」
スウは緊張した面持ちで答えた。

「本当か？」

ジークもまた、緊張して聞き返した。

「うん：それに、今までより強いかも：」

それを聞いてジークは考えを廻らせる。パテルでの前例がある。

よりによつて祭の準備で活気づいているこの街を、パテルの二の舞にする訳にはいかない。だとすれば、こっちから出向いて敵の注意を街に払わせないようにしなければならぬ。

「スウ、ついて来い」

ジークはそう言つてスウの手を掴み、最後にベンチの女性に一瞥を投げかけて、商店街に向かって走り出した。

その時になつてジークの存在に気づいた女性は、なぜかその顔に驚きを浮かべていたが、ジークがそれを見ることはなかった。

そして女性は、唐突にジークの後を追つて走り出した

ジークはスウに悪魔のいる方角を聞いて、その方向に走つて行つた。いくつもの小路を走つて、角を曲がり、気付けば商店街とは別の大通りに出ていた。

その通りは大通りといつてもあまり人氣がなく、どこか寂れた場所だった。そしてジークがスウに、次はどっちだと聞こうとした時、足元の影が変な形になるのを見た。

しかし、変になつたのはジークの影ではなかった。ジークはすぐに、スウを連れてその場所を離れる。

次の瞬間、上空から落下してきた影の主が、大きな音と砂ぼこりを立てて着地した。

「今の攻撃を避けるため、素早いじゃねえか」

影の主は言つた。メトネスやグルナと同じく真つ黒な人間の姿だが、より形がはっきりしていて、見たところ今までの悪魔のような煙状の体ではなく、ちゃんとした実体があるようだった。

「てめえが今回の悪魔か。どうやら、今までとは格が違いそうだな」
ジークはそう言つてその悪魔をにらんだ。そして背中に背負つた包みを一気に取り払い、二振りの得物の大刀を引き抜いた。

「ハッ！そうやって余裕ぶっこいていられるのも、今のうちだぜえ！」

獣じみた声を上げ、悪魔はジークに飛び掛つてきた。

「スウ、オレの後ろから離れるな！」

敵の力が未知数である以上、むやみにスウを逃げさせるのは逆に危険だ。幻の町の時のように拉致されてしまうかもしれない。

悪魔の突き出した腕が眼前に迫って、ジークは咄嗟に刀でそれを受け止める。しかし悪魔の攻撃は、思っていたほどの威力はなかった。それで気を抜きかけたジークを嘲るように、悪魔は笑った。

次の瞬間、ジークの刀ごしに何かの強いエネルギーがぶつかった。そのあまりの威力に、ジークは二本目の刀を地面に刺してブレーキをかけることによって、何とか吹っ飛ばされずに済んだ。

「一体、何を……」

そう言いながら、ジークは刀を悪魔に向かって切り付けた。悪魔はそれを軽々とかわし、跳躍でジークと距離を取った。その身体能力は、メトネスやグルナにはなかった物だった。

「ハッ、お前、オレが何したかわかんねえ、て顔してやがんなあ」

悪魔はさも面白そうに言った。どうやら好戦的な性格のようだ。

「いいぜ、冥土の土産に教えてやらあ。悪魔にはよお、それぞれに対応した『体のパーツ』がある。それはその悪魔の象徴にして、その能力そのものでもある。例えばよお、メトネスの司る体構造は『耳』で、やつは音を使い、耳を通して相手を洗脳し、操る。グルナが司るのは『目』で、幻覚を見せて敵をたぶらかす悪魔、て訳だあ。そしてこのオレ、ベリウスが司るのはあ……」

そこで悪魔・ベリウスは言葉を切り、再び跳躍で縦に回転しながらジークに飛び掛かってきた。そして叫んだ。

「『尻尾』だあ！！」

そして、宙返りで回転の力と遠心力が加わり、さっきとは比べ物にならない破壊力のこもったベリウスの尻尾が、ジークを襲った。

ジークは焦らずそれを横に避けた。ベリウスの尻尾はその破壊力を保ったまま地面に打ち付けられ、轟音とともに地面に大きな亀裂を作った。もしこれをまともに受けていたら、まず命はなかっただろう。

やはり、そうか。とジークは思った。ベリウスを初めに見た時からジークの中に構築されていた仮説が、ベリウスの言動とその攻撃力によって裏打ちされた。

メトネスの司る体構造は『耳』、グルナは『目』、そのどちらもが感覚器官だ。今までの二人が攻撃力に欠いていたのは、そのせいだったのだ。

しかしベリウスは『尻尾』で、感覚器官ではなく直接攻撃できるパーツだ。つまり、ベリウスはメトネス達のような人をたぶらかすような能力はない。その分の力が、攻撃に使われるということなのだ。

だとすれば、今度の戦いは、今までとは次元が違う。ジークはそう覚っていた。

三章「The Darkness Tail」完

第四章 「誰かのための強さ」

―レグラ地方エスル村―

昼間の暖かい陽気の中、突然レインディア亭の扉のベルがカラカラと鳴った。いつも通りグラスを磨いていたシグルスは、その顔を扉に向けた。

入ってきたのは、旅装束の青年だった。その腰には、マント越しに剣のシルエットが見えた。

青年はゆっくりした足取りでカウンターに向かい、どこか優雅にも見える動きでシグルスの目の前の椅子に腰掛けた。

「リイトの活動拠点、レインディア亭の亭主、シグルス・キエスト殿ですね」

青年はフードの下からシグルスを観察するように確認した。

「随分と珍しい客だな。一体、何の用だ？」

シグルスは、以前その青年に会ったことがあった。と言っても、今まで直接話したことはないのだが。

「いえ、大したことでは……ちょっと人探しをしていましたね。リイトの居場所はあなたに聞くのが最も効率的ですから」

「誰を探しているんだ？」

シグルスは興味なさ気に聞いた。

「ジーク殿を」

それに対して青年は短く答えた。それは、シグルスが半ば予想していた通りの答えだった。

「何のために？」

シグルスは続けざまに尋ねる。いくら顔見知りとはいえ、理由も聞かずに仲間の情報をおいそれと渡す訳にはいかない。

「交渉するためです」

と曖昧に答える青年。しかしこの青年とジークの関係を知ってい

るシグルスには、青年の言わんとしていることがすぐに分かった。

「あいつの事だ。また突っぱねられると思うがな」

「試してみなければ分かりませんよ」

青年はそう言って少し笑った。その笑い方もやはりどこか上品だった。

シグルスはどうしても良さそうな声で「そうかよ」と言うと、ため息をついて、青年の質問に答える。

「今頃は恐らくノーレラス地方のレイアーク辺りにいるだろうな。でも、お前が今から行ってレイアークに着く頃には、多分もう出発してる。その先は自分で調べな」

「ありがとうございます」

そう礼を言って、青年はさりげなくカウンターに銀貨をいくつか置いて、すぐに席を立ち、レインディア亭を出て行った。ドアのベルが再び鳴り、その後レインディア亭は静寂に包まれた。

「……ったく、なんかまたいろいろと拗れそうだな」

シグルスは手に持った銀貨をチャリチャリ言わせながら、一人ごちた。そして銀銀貨をポケットに突っ込むと、またグラスを磨く作業に戻るのだった。

――ノーレラス地方中央街レイアーク――

ジークは苦戦していた。やはり、今度の悪魔・ベリウスは、今までの悪魔とは格が違った。

その尻尾による攻撃の一撃一撃に圧倒的な破壊力があり、一発でも喰らえば命の保証はないことは間違いない。

スピードにおいてはジークの方が勝っているのは、不幸中の幸いだった。落ち着いてさえいればベリウスの攻撃を避けることはできる。

しかし、言うまでもなく、攻撃を避けるだけでは戦いには勝てな

い。かと言って、攻撃するために下手に距離を詰めると、ベリウスの攻撃を受ける危険が一気に増す。

その時、真っ黒なベリウスの尾が、横からジークの頭に打ち付けられた。ジークはすぐに体を屈めてそれをかわす。

「ハッ、いつまでチョロチョロ動き回ってるつもりだあ!？」

ベリウスはもどかしそうに言った。

「うるせえな…」

それに対して、ジークは妙に落ち着いた声で応えた。ベリウスの戦闘力は明らかにジークより格上だ。真っ向からぶつかって勝てる相手ではない。

ならば、この好戦的な性格を利用することは出来ないだろうか。

そうジークは考えていたのだった。そのためにはまずベリウスを挑発して頭に血を上らせる事だ。

そして考え通り、ベリウスはジークのその冷静さが気に食わない様子だった。その証拠に、ベリウスの攻撃は一段と激しくなっていた。

ベリウスの尾がジークの頭の横を掠める。ジークはすかさず右の刀で反撃したが、ベリウスの尾に阻まれて、攻撃が届くことはなかった。ベリウスの尾は堅い鱗で覆われ、先端は鉤になっていた。

続けて鞭のようにしなる尻尾が、ジークを襲った。ジークは確実にかわしつづける事はできたが、反撃することは出来ず、だんだんと追い詰められて行った。

スウは、目の前で危険な目にあって戦っているジークを、道端に立って、半ば呆然として見ていることしか出来なかった。ベリウスの尻尾が振るわれ、ビュンビュンと空を切り裂く鋭い音がするたびに、ジークがその攻撃に切り裂かれて、死んでしまうのではないかと言う恐怖が全身を駆け巡っていた。緊張と恐怖と不安で、スウは下唇を噛んで、胸の前で握った両手に汗を握っていた。

その時、ジーク達が走ってきたちょうどその小路から、マントで

身を包んだ女性が走ってきた。

「あなたは、さっき広場にいた…」

スウはその女性を振り返って呟いた。

「あら、あなた、白銀の獅子と一緒にいた娘ね」

その女性はその時になってスウの存在に気付いたようだった。戦っているジーク達に向けていた視線を、スウに向けた。それでスウには、初めてその顔が見えた。

「綺麗…」

ジークのことが心配で、スウにはあまり集中して見ることはできなかったが、それでも一目で美人とわかる女性だった。一瞬、スウはその女性に見惚れていた。

「危ない!!」

突然その女性が叫んで、スウを横に押し倒した。その次の瞬間、さっきまでスウがいた場所に、一筋の黒い閃光が走った。それは、ベリウスの尾だった。いつの間にか、ジークが押されるにつれて戦っていた二人がスウの居る場所に近づいて来ていたのだ。

「…スウ…!」

自分の後ろにスウが居ると知ったジークは、戦いの場をスウから遠ざけようと、力を振り絞って一気に形勢を盛り返した。

「ほら、あなたもこっちに!」

スウもマントの女性に連れられて、その場から離れる。

「なるほどなあ、スウ・ロ・ヤマに危険が迫ったら本気になるって訳かあ!」

尻尾がスウを掠めた瞬間から始まった突然のジークの猛攻に、ベリウスは面白そうに言った。

「お前…どうして、スウの名前を…」

ジークは驚いて言った。そう言えば、幻の町でメトネスもスウの名前を呼んでいた。

「ハッ、残念だが、そいつはまだ企業秘密ってやつだぜえ!」

ジークの左の刀を避けつつ、ベリウスは言った。

「：そうかよ」

続けざまに右の刀を切り付けながら、ジークは言った。ベリウスはそれを尾で受けた。

「ハッ、それにしても、そんな攻撃じゃオレは倒せないぜえ！」

ベリウスは尾でジークの刀を振り払い、しならせた尾をジークの体に叩き付けた。ジークは焦っていたせいで、ベリウスと一定の距離を保つのを忘れていたのだ。

その圧倒的な力に、ジークは数メートル後ろの家屋の壁にたたき付けられた。石の壁に体がめり込む程のその衝撃と苦痛に息が止まり、ジークは一瞬意識が朦朧とする。

周りの世界がぐらりと揺らぐ。朦朧とした意識の中で、ジークはスウが自分の名を叫ぶのを、どこか遠くの物音のように聞いた。

ジークは、改めて自分の無力さを呪った。オレは、もう二度と目の前で誰かが死ぬのを見たくない。昔、そう誓ったと言うのに――

このままでは間違いなく、オレも、スウも、あのマントの女性も死ぬ。そしてベリウスは、自分の破壊衝動のままにこの街を破壊してしまうだろう。

せめて、オレに悪魔に対抗出来るだけの力さえあれば……まるで映像がスローモーションで再生されているかのように感じる中、ジークは何よりもただそれだけを願った。

その時、なぜだか、心の奥で声がした気がした。

「君は、また大切なものを失うのか――と。」

――絶対に諦めてはいけない――

ジークの心の中に響くその声は言っていた。

――お前は、誰だ――

ジークは訳が分からず、その心に響く声に尋ねた。

――今は、名乗ることは出来ない。でも僕は、君の『力』を少しだけ、

目覚めさせることができる――

――オレの、『力』？――

ジークはその言葉に戸惑った。一体何のことを言っているのだろうか。オレに、『力』なんてあるのか？

――だから、一つだけ約束して。君が護りたいと思う大切な人を、絶対に護り通すこと――

その声は、強い口調でそう言った。

――なぜ、お前がそんな事を？――

――僕は、君だから。彼女を失えば、君は絶対に一生後悔する――

ジークにはその言葉の意味が分からなかった。だが、今は何より、スウを護らなければ。その声が語った言葉によって突然蘇ったその強い思いが、ジークの迷いを一気に吹き飛ばした。

――ああ、約束する――

ジークは厳かな声でそう言った。

マントの女性の制止を振り切ってジークに駆け寄ろうとするスウの目の前に、ベリウスが立ちちはだかる。

「ハッ、見つけたぜえ、スウ・ロ・ヤマ！」

『見つけた』という言葉の真意はスウには分からなかった。ただ一つ、分かっていたのは、自分が殺されようとしていると言うことだけだった。

まるでスローモーションのように、ベリウスの尾が振り上げられる。スウは死を覚悟した。

しかし、その尾が振り下ろされる事はなかった。ベリウスは何かに感づいて、突然その場から跳びのいた。

その次の瞬間、ベリウスが居た場所に白銀の閃光が走った。スウが信じられない思いで見ると、そこに、ジークが立っていた。その両手に握る一対の大刀は、白銀の光に包まれて輝いていた。

「ジークさん……よかった……」

「いいから、どいてろ」

感激のあまり涙ぐむスウに向かって、ジークは言った。しかし、スウはそこから動こうとしない。

「しょうがねえな…シーゼル、こいつを安全な所に連れて行ってくれ」

ジークはマントの女性に向かって言った。ジークはその顔を見て、女性の正体に気がついていていた。

「せっかく久しぶりに会えたって言うのに、随分と人使いが荒いのね、白銀の獅子！」

その女性・シーゼルは怒ったように言ったが、指示に逆らうことはせず、スウの手を引くと急いでその場を去る。

「ハッ、行かせるかよお！」

ベリウスはシーゼル達の後を追おうとしたが、それはジークに阻まれた。

「お前はこの先へは通さない」

ジークは厳かな声音で言った。

さっき、あの謎の声と話して、約束した瞬間から、やけに心臓の鼓動が大きくなっていった。そして、さっきまで以上にベリウスの攻撃が遅く見えるようになっていた。

「なんだあ？てめえも何か隠し持ってた見てえだな」

ベリウスはあくまで面白げに言う。さっきまでのジークとの違いに気付いているようだ。隠し持ってる、とはおそらく『力』の事だろう。

「だったら何だ」

「嬉しいぜえ。さっきまで退屈してたからなあ！」

そしてベリウスはジークへの攻撃を再開する。しかし、やはりジークにはその動きが遅く見えた。

ジークはベリウスの尾を片方の刀で弾き、反対の刀で切り付ける。ベリウスは紙一重でそれをかわして、さっきジークを叩き付けた家の屋根の上に逃げる。

「逃げる気か？」

「誰が！」

そう言うのとベリウスは屋根から飛び上がり、勢いをつけてジークに飛び掛かった。ただの攻撃でもあの威力なのだ。自然落下の勢いと体重が加われば、その破壊力は計り知れない。

しかし、ジークはそれにたじろぐことはせず、落ち着いて刀を構える。

そして、ベリウスの尾とジークの刀が、真っ向からぶつかった。

「あなたが、シーゼルさん……？」

スウは信じられない様子でシーゼルを見た。

「そう。私はこの街の町長、シーゼル・セン・ルネアよ」

シーゼルは多少照れ臭そうに言った。

「それじゃ、どうしてあなたがジークさんの事を？それに、白銀の獅子って……」

「とにかく今は、ここを離れましょう。話なら後でできるわ」

シーゼルはそう言ってスウを連れていこうとする。しかし、スウはそれに逆らった。

「でも、ジークさんをひとりで置いて行けません！」

「あの人なら、大丈夫よ。あなたが居る方が今のあの人には邪魔になるわ」

シーゼルの言っていることは正しかった。さっきジークがベリウスの攻撃をまともに受けてしまったのは、スウが戦いに巻き込まれないようにしようと焦ったからだ。スウにはシーゼルの言葉に反論する術は無かった。

「さ、分かったら早く！」

シーゼルが急かすが、スウはそれでも後ろ髪を引かれる思いだった。

「ジークさん……」

スウはジークの居るはずの方向に向かって呟くように呼び掛けたが、それで決心したのかシーゼルについて反対側へと走って行った。

ベリウスの尾とジークの刀は互いに弾きあい、どちらも傷つくことは無かった。

「つたく、頑丈な尻尾だな」

「ハッ、てめえの刀こそ、やけにかてえじゃねえか！」

実を言うと、ジークは淡い光に包まれた自分の刀を見つめながら、ベリウスが言ったのと同じことを考えていた。ジーク自身の経験からしても、あんな攻撃を食らってこの刀が持ちこたえるはずは無かった。

これが『力』なのか？ジークは考えた。

まだ全く実体が掴めないが、どうもあの声によって目覚めさせられたジークの『力』が、ジークの身体能力だけでなく刀の能力まで引き上げた、と考えるのが妥当なようだ。

しかし、人間誰でもそうだろうが、突然知らない人間から高級なプレゼントを貰ったりすれば、喜ぶよりも先に戸惑い、贈り主の目的が分からずに、その人物の事を疑うだろう。

今回の場合のジークも全く同じで、『力』を手に入れたことを素直に喜ぶ気にはなれなかった。何か、裏があるのではないかと疑わずにはいられないのだ。

だが、今はそんな事を気にかけていられる状態ではないことも、分かっていた。とにかく今は、ベリウスを倒すことだ。

ジークはベリウスとの距離を詰めようと、地面を蹴る。すると予想を遥かに越える力が出て、ベリウスが反応する間もなくジークは敵の懷に潜り込む。ジークは左の刀を袈裟掛けに切り付けた。

「ハッ、いきなりやるようになったじゃねえか！」

その攻撃を間一髪でかわしたベリウスは、まだ少し余裕を残していたが、明らかに自分が劣勢に成りつつあることも理解しているようだった。

ベリウスが反撃しようと尾を振るが、ジークはバックステップで軽々とそれを回避する。

表には出さずとも、ベリウスが苛立ちを募らせつつあるのは間違いなかった。そこでジークは、ベリウスの感情を利用するために、あえてベリウスの攻撃範囲ギリギリの距離を保つことで挑発した。果たしてベリウスはその挑発に乗ってきた。ジークは自分に向かって突進して来たベリウスをひらりと避ける。ベリウスは勢い余ってジークの後ろにあった家屋の壁に激突する。ベリウスは体ごと壁にめり込み、少しの間身動きが取れなくなった。それが、ジークの作戦だった。

「これで終わりだ」

ジークはそう静かに言った。そして、自らの行動によって大きな隙を作ってしまったベリウスに、二本の刀両方を振りかざした。

その時、突然戦場に妖しい呪文のような言葉が流れた。低音で唱えられるその言葉を聞いている内に、ジークは不意に強い頭痛を感じた。

「：まったく、あれだけ人をけなして置いて、良いザマだね、ベリウス」

その言葉とともにジークの目の前に、長い腕を持つ真っ黒な少年のような姿をした悪魔が現れた。

「お前は：メトネス：たしか、『耳』の悪魔だったか」

ジークはメトネスをねめつけた。

「ケケケ、どうやらベリウスが随分と喋ってくれちゃったみたいだね。まあ、いまさら隠す必要もないけどさ」

メトネスは真っ赤な丸い目でジークを睨み返した。

「とにかく、今回はアンタの勝ちって事にしといてやるしさ。その代わり、コイツは連れ帰らせて貰うしね。じゃあな！」

そう言ってメトネスはベリウスを抱えて、消えた。ジークは後を追おうとしたが、音を操り敵をたぶらかすというメトネスの発した呪文の効果がまだ続いているのか、思うように体が動かなかった。

ジークは『力』を解放されてから過敏になっている感覚で、辺りの気配を探ってみる。が、この辺りに悪魔の気配はもう無かった。

確かにやつらは逃げた。そう確信し、ジークは緊張を解く。それと同時に、『力』の効果が消えたのか、体から一気にエネルギーが抜ける感覚があった。と同時に、さっきまで『力』によって抑えられていたらしいベリウスからの攻撃で受けたダメージが、一気に蘇ってきた。

恐らくは『力』の反動もあいまったのだろう。その痛みは想像を絶するものだった。なす術もなく、ジークはその場に倒れ、意識を失った。

「シーゼル様！また仕事をほったらかしにして街をほつき歩いていたのですか！？」

レイアークの中心にある屋敷、ルネア家の邸宅で、黒い服を着たシーゼルの秘書が怒鳴っていた。

「まあまあクイル、街のことを良く知るのも町長の仕事じゃない。いわゆる視察ってやつよ」

シーゼルは悪びれもせず言う。

「そんな言い訳して、シーゼル様のはただの散歩じゃありませんか！」

秘書クイルは、なおも語気を緩めず言った。

「それにそんなっ…子供まで連れて来て！」

クイルはシーゼルの後ろに半ば隠れるように立っているスウを指差し、つい口に出しかけた『不吉な』という言葉をかみ殺して言った。

「彼女は私の客です。無礼は許さないわよ」

シーゼルも耐え兼ねて声を荒げた。まったく、この秘書と来たら…。と彼女は内心毒づいた。

「あとう…」

そこでスウが恐る恐る口を挟んだ。

「どうかあたしのために、喧嘩しないでください…」

「あら、ごめんなさい、聞き苦しかったわよね。クイル、彼女を客間に連れて行ってあげて。丁重にね」

シーゼルはスウに向かっては申し訳なさそうに、クイルに向かっては釘を刺すように言った。

「まったく、秘書を何だと思ってるんだか…」

クイルはぶつぶつ言いつつも、指示には逆らわなかった。スウに手招きして、不機嫌そうに部屋の扉を開いた。スウはこわごわその後が続いて行った。

そうして部屋はシーゼル一人だけになった。シーゼルは安楽椅子に深く座り、嘆息した。

少しして、扉を叩く音がした。シーゼルが入室の許可を告げると、扉を開いて、あらかじめ指示を出していたシーゼルの部下数人が入ってきた。

「シーゼル様、白銀の獅子が道に倒れていたのを保護しました。いかが致しますか？」

「客間に運んで頂戴」

シーゼルは、クイルもこんなに忠実だったらと思いつつ答えた。

彼は有能だが、シーゼルではなく今は亡きシーゼルの父に忠実な男だ。

シーゼルの指示を受けて、部下達は部屋を後にした。そして、シーゼルもまた自室へ向かうべく大儀そうに安楽椅子から立ち上がった。

ジークが目を開くと、目の前にシャンデリアのぶら下がった天井の景色が広がった。体に包帯が巻かれているのが、触感で何となく分かる。

「ここは…どこだ？」

ジークは無意識につぶやく。するとその声に気付いたスウの顔が視界に入ってきた。

「ふあ、ジークさん！よかったあ！」

言うが早いがスウは思い余ってジークに抱きつく。

「うわ、ちょ、スウ、くつつくなって……」

ジークは顔を真っ赤にして慌てた声でそう言っ、無理やりスウを引きはがす。恥ずかしいのはもちろんだが、今は下手に触れられると傷が痛むことの方が問題だった。

どうやらスウもその事に気づいたようで、はっとしてすぐにその腕を引っ込める。

「ごめんなさい、あたしのために、こんな……」

スウはジークの様子を見て、申し訳なさそうに謝った。

「別に：オレの力が足りなかったただけだ。こっちこそ、あんな危ない目にあわせちゃって、悪かったな」

ジークはそんなスウを励ますように言った。スウはその言葉に感極まったように目を潤ませた。

「泣くなよ。まったく、相変わらず泣き虫だな。それより、ここは：シーゼルの屋敷か？」

「あら、もう起きたのね、白銀の獅子」

ジークが尋ねると同時に、部屋の扉を開く音がして、シーゼルが入ってきた。ジークが反射的に上体を起こそうとすると、体の右肩から左脇腹にかけて強い痛みが走った。その痛さに思わず呻きもれる。

「一応手当はさせたけれど、まだ動かない方が良いわ。あなた、自分の体がえぐられてるって自覚してる？しばらくは絶対安静よ」

シーゼルが放った言葉に、ジークは戦慄した。ベリウスの一撃でそれだけのダメージを受けておきながら、『力』によって傷口が抑えられるのを良いことにベリウスと戦っていたのだ。『力』の効果が切れた今、傷口は攻撃を受けた時より遥かにひどくなっているに違いない。

「それと、荷物は宿屋から持ってこさせたわ。今日はここに泊まりなさいな」

シーゼルはそう言って、ジークが寝かされているベッドの脇の小机の上に置かれたジークの荷物を指し示した。

「悪いな、迷惑かけて」

「こんな時くらい、自分の心配しなさいよ。それに、あなたには恩がある。これくらい当然よ」

シーゼルはベッドに歩み寄りながら言った。

「その『恩』って一体何なんですか？」

それを聞いたスウがシーゼルに尋ねた。

「あら、あなた、彼と一緒に居るのにそんな事も知らないの？」

シーゼルは呆れたように聞き返した。

「知らないから聞いているんです」

スウはそう言いながら、内心淋しさを感じていた。

「…なるほどね、言うじゃない」

シーゼルはおもしろそうに言った。

「おい、シーゼル、余計な事言うんじゃないぞ」

そこですかさずジークが釘を刺す。

「…なるほどねえ」

一を聞いて十を知ったように、シーゼルはにやつとした。

「あなたって案外シャイなのね、白銀の獅子」

「なっ、どういう意味だよ」

ジークはそう言って我を忘れて起き上がろうとしたが、再び痛みが返って来て、スウによってベッドに押し戻される。

「すぐそうやってムキになって…そういう所はまだまだお子ちゃまね」

シーゼルはなおおもしろそうに言った。

「でも、傷で動けない今のあなたに、私の話を止めることは出来ないわね」

ジークを見下ろして、悪戯っぽく言うシーゼル。それに対してジークは唸るしか出来ない。

「そーゆー事なら、教えてあげるわ。ちょっと遠回りになるけれど、

我慢してね」

スゥに向かって茶化すようにそう言って、そして語り出した。

「今からちょうど四年くらい前、知っての通りこの国は長年続いたスピルナ動乱で荒れ果てていた。昔は風光明媚と歌われたこの街も、自衛のために戦うことを余儀なくされていたわ。」

その頃のスピルナは、ゴート家・アルト家・ライアル家・ヒカナ家・シロトナ家の大きな五つの派閥に分かれていた。

そしてここ、レイアークは豊富な水資源がもとでヒカナ家に長い間狙われていたの。

私たちは必死に戦っていたけれど、当時の五大勢力の一角とたった一つの街とでは、戦力の差は歴然としていた。もはや万策尽きたかと思われたそんな時、彼・ジークはどこからともなく現れた。

当時の彼はどの派閥にも属さず、スピルナの国中を旅して、あの血で血を洗う悲惨な戦争から、関係のない人々を護るために戦っていた。

そして彼に助けられた人々は、その銀髪をなびかせる彼の姿を見て、彼を『白銀の獅子』という通り名で呼ぶようになった。各地の神話に残る、『総ての命の守護神』と呼ばれた、白いライオンの姿をした大地の神にあやかっただけ。

そして、彼はまさに一騎当千の強さを持って、ヒカナ家の軍隊からこの街を護った。彼がいなければ、きっとレイアークはヒカナ家の家来達に蹂躪されて、この街の人々は皆奴隷にされていたわ：だから、この街の人は皆、彼には大恩があるのよ」

シーゼルが語り終えた時、スゥはジークのことをより知ることができた嬉しさと、今までジークのことを何も知らなかった寂しさとを同時に感じていた。

「ジークさんがそんなにすごい人だったなんて：話してくれたら良かったのに」

「話す必要はなかった」

ジークはまるで他人事を話すかのように言った。

「でも、教えてほしかった…」

スウは疎外感を感じながら言った。

「何でだよ」

「ふえ…それは…」

そう聞かれてスウは言葉に詰まった。自分でもどうしてなのか具体的には分からなかったのだ。

「気にしないで。この人はいつもこういうのよ」

そこにシーゼルが口を挟む。

「いつも自分の事を隠したがって、何て言うか…常に自分の事は二の次にして、他人のために無茶ばかりしちゃうのよね」

その時、部屋の扉をノックする音がした。シーゼルが行って扉を開くと、屋敷の女中らしき人が顔を出した。

「お客様、お風呂が沸きました。よろしければお入りください」
女中はお辞儀をして言った。

「あら、ちょうど良かった。スウ、入ってきたら？あなた長旅で垢が溜まつてるでしょう？それに、服も汚れてるし…この子に合う服も用意してくれるかしら？」

シーゼルが言うと、女中はまたぺこりとお辞儀した。

「それと、ジークは怪我があるから今は無理ね」

シーゼルは、ベッドに寝ているジークを一瞥して言った。

「それでは、ご案内致します」

女中はそう言うと、スウを連れて部屋を出て行った。スウはシーゼルにお礼を言ってから、その後続いた。

「それにしても本当、あなたって意地悪なのね」

スウがいなくなった部屋で、シーゼルは言った。

「そうかもな」

ジークは寝返りをうって、シーゼルに背を向けながら言った。

「あなた、自覚してないんでしょ」

シーゼルはため息をついて言った。ジークはすぐには答えず黙っ

ていた。

しかし、シーゼルが答えを諦めかけた時、ジークは口を開いた。

「なあ：何が悪かったんだ？」

その答えにシーゼルは思わず吹いてしまった。

「あれほどたくさんの人間を救った英雄も、こういう事になると年相応って訳ね。案外と可愛いところもあるじゃないの」

シーゼルは笑いをこらえつつ言った。

「つたく、うるせえな」

ジークはぶすつとした声で言う。

「ほら、そんな拗ねないで！」

シーゼルはクスクス笑いを漏らしながら言った。しかし、ジークはその言葉に無視を決め込んだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ね」

込み上げてくれる笑いを何とか抑えつつ、シーゼルは謝った。

「それで、『何が悪かったか』ですって？知りたいならシーゼルお姉さんが教えてあげますよ♪」

しかしジークはまた無視する。

「もう、そんな怒らなくたって、冗談に決まってるじゃない！」

シーゼルはそんなジークの様子を見て可笑しそうに言った。しかし、これ以上ジークをからかっても意味がないと思ったのか、話をもとに戻す。

「そうね：あなた、大事なことが解ってないわね。誰だって、好きな相手の事は少しでも良く知りたいって思うものでしょ？」

「好き：？誰が？」

ジークは内心驚いてシーゼルを振り返って尋ねた。

「え？もしかしてあなた、気がついてないなんて言わないわよね？」

シーゼルは驚いたように言った。

「だから、何に？」

なおも訳が分からないようすで、ジークは尋ね返す。

「スウがあなたの事を好いてるっていうことに、よ」

シーゼルが当たり前のように放ったその言葉に、ジークは心臓が跳ね上がる思いがした。

「そ、そ、そうなのか!？」

「まさかとは思ったけど、気付いてなかったのね…」

シーゼルはやれやれという風に言った。

「ていうか、何でお前にそんな事が分かるんだよ」

「彼女を見ていて、気づかない方がおかしいわよ」

そう言われてジークは、信じられないといった様子でシーゼルを見た。まるで、シーゼルが次の瞬間には冗談だと言い出すのではないかと訝っているかのようだった。

「…とにかく、」

シーゼルは呆れて言った。

「好きな人の事を知ってるって、すごく嬉しい事じゃない? それだけ相手のことを理解してるってことになるし、相手から直接教えてもらえたら、それだけ相手に信頼されてるってことになるから」

「そういうもんか?」

「…相変わらず、本当に鈍いのねえ」

そう言ってシーゼルは、扉の方に向かって歩いて行った。

「とにかく、スウはあなたの事がもっと知りたいのよ。しかも、できればあなたの口からね。それじゃ、私は仕事があるし、あなたも休息が必要そうだから、これで失礼させてもらうわよ」

そう言ってシーゼルは扉を開き、部屋を出て行った。

スウは口の上までお湯につかり、ぶくぶくと息を吐いた。

ルネア家の邸宅の浴場は、スウが予想していたよりも相当豪華な物だった。大理石でできた、プールとしか言えないような大きさの浴槽の側面や、壁や床、銀色に輝く蛇口のひとつひとつにまで細やかな彫刻が施されていて、貧乏生活が体に染み付いているスウにとっては、触ることすら億劫になるほどだった。

備え付けている石鹸もまた高級な物のようで、これもスウは、自分なんか使ってしまうのを勿体なく感じつつ、それで長年溜まった垢を落としたのだった。

スウはその浴槽につかり、その浴槽の中央にある、口からお湯を吐き出しているライオンの姿の彫像を眺めつつ、先程シーゼルから聞いたことに関して考え込んでいた。

ジークはスピルナ動乱で沢山の人々の命を救った英雄だった。あまり実感は湧かないが、恐らく助けられた人々から見れば、ジークは偉大な人間なのだろう。

それを知ってスウはまず驚き、次にどこか誇らしくなり、しかしその次には淋しく感じた。

その理由は大きく二つと言っていていいだろう。その一つ目は、なぜだかジークが唐突に遠い人間になってしまった気がしたからだ。人々から嫌われてばかりの『不吉』なみずばらしい孤児である自分とジークでは釣り合いが取れる訳がない。その気持ちだが、スウの胸を締め付けたのだ。

そしてもう一つは、ジークが自身の事を自分に話してくれなかったことに対する多少の恨めしさだった。

改めて考えてみると、ジークは今まで自分の事をほとんど話そうとしなかった。ジークが旅をする理由を尋ねた時も、ジークの出身地を聞いた時も、ジークは答えようとしなかった。

一度だけ、自分に家族がいたかどうかさえ知らない、と話してくれた事があったが、本人から聞いたのはそれっきりだった。

(どうしてジークさんはあたしに自分の事を話そうとしないのかな
…)

とスウは思った。

(あたしの事、信用してくれていないのかな)

そこに考えに至ったとき、スウは微かな怒りを覚えた。
しかしその瞬間、スウは突然不思議な感覚に包まれた。

(あれ、あたし…怒ったのっていつ以来だっけ…)

それは普通の人間からすればありえないような妙な気分だった。もし例えるなら、出掛けるときに大事な物を家に忘れ、その事に後になって気づいたような感じだった。ただ、スウが特殊なのは、その『忘れ物』が感情だったということだ。

自分はいつかからか、怒りという感情を忘れていたのだ。スウは悪寒を感じて、反射的に自分の肩を抱いた。

その時、自分の中にスウは『何か』を感じた。その何か、スウから怒りという感情を奪っていた何かが、自分の中にいるのだ。

それは、まるで真っ暗な闇その物のようであり、スウは一瞬、自分の中のその闇に飲み込まれるような錯覚を覚えた。

しかし、その『何か』は出てきた時と同じように突然その気配を消し、それと同時にさっきジークに対して感じた怒りも、自分が闇の中に飲み込まれるような感覚も消えうせた。スウは訳も分からず落ち着かなくなって、急いで浴槽から出た。

今、一瞬自分の中に感じた『何か』は、もしかすると自分の正体に関係しているのかも知れない、とスウは直感した。自分の中にいる漆黒の闇、恐らくはそれがスウを普通の人間とは違うものにさせ、それが他の人間にスウへの根源的な敵愾心を抱かせているのだ。言い知れない不安を感じて、スウは半ば走るように浴場を後にした。

ジークは窓越しに、レイアークの街の風景を眺めていた。流石に町長の邸宅だけあって、街で最も高い丘の上に建っているので、湖に囲まれた美しい街の全体を見渡すことができるのだ。

その時、ドアをノックする控えめな音がした。その叩き方が誰の物なのか、ジークにはすぐに分かった。そこでジークが入ってくるように言うと、ドアを開いて案の定スウが顔を出した。しかし、顔を覗かせるだけで、なぜか中には入ってこない。

「どうしたんだ、スウ。入ってこないのか？」

ジークがその様子を訝しんで尋ねると、スウはなぜか恥ずかしそ

うに顔を赤らめる。

「それは、その…」

スウはしどろもどろな声で言葉を濁す。

「だから、どうしたんだよ」

「ふえ…だから、その…」

スウは目を泳がせつつ言った。

「あんね、ジークさん…お風呂から出たら、女中さんが新しい服、用意してくれてて…そのう…」

そこでスウはにわかに決意を固めたようにゆっくりと部屋に入ってきた。

「…これ、似合うかなあ」

ジークはしばし、そのスウの姿に見惚れた。スウはシーゼルが用意させたらしい緑色の綺麗な長い服を着ていた。スウには多少大きいようではあったが、そのおっとりした雰囲気はスウに似合っている。その服にかかる長い髪の毛はまだしっとりとして湿っていて、石鹸の物らしいほのかな香りを漂わせていた。

「ど、どうかな…？」

スウは落ち着かなそうにそわそわして尋ねた。

「別に…」

ジークも居心地が悪くなって心にもないことを言ってしまう。しかし、ふと気付いたように言った。

「そう言えばお前、意外と綺麗な肌してたんだな。今まで汚れてたから気付かなかったけど」

「ふえ…そお？」

スウは袖をまくって自分の腕を眺めて言った。ジークは恥ずかしくて口には出せなかったが、その腕はそれこそまるで絹のような、色白できめの細かいほっそりとした腕だとジークは感じた。

「ああ。なんつーか、こうして見ると、真珠みたいだな」

ジークは内心緊張しつつ、自分でも気障だと後になって恥ずかしくなるような台詞を言った。

「えへへ、そんな事ないよう。ジークさんたら、おせじが得意なんだから」

スウは照れつつ言った。

「べ、別に世辞じゃねえよ。ただ、何となくそう思っただけだ」

ジークは目をそらして言った。

「そう？そう言って貰えると嬉しいなあ」

スウはその言葉通り嬉しそうに顔を綻ばせる。

「やっぱりあたし…あの日ジークさんに出会えて、ホントによかった！」

「なんでそんなこと藪から棒に言うんだよ」

ジークは訝しむように言った。

「だって、ジークさんに出会えてなかったら、今頃もう死んじゃってたかもしれないもの」

「それは…そうかもしれないけど」

ジークが初めてスウを見た時、スウは例の魚屋に泥棒したと誤解されて追われていたのだ。そしてその魚屋は、その直後にメトネスにたぶらかされてパテルに火を放ったのだった。

そう言えば、とそこでジークはふと思った。メトネスはあの時、『オイラはこのニンゲンの中に巣くっていた『闇』を、このニンゲンの願いが叶えられるように、力に還元してやっただけだぜ？元々すべてはコイツが願ったことだったんだぜ』

と言っていた。もし魚屋の『願い』が破壊衝動だったとしたら、その原因を作ったのは恐らくあの昼の出来事だったのだろう。だとすれば、魚屋がメトネスに操られた責任は、間接的に自分にもあるということになる。

「でも、もしかしたらお前はこれから、オレに出会ったせいで死ぬことになるかもしれないんだぞ」

その言葉は、ジークの口から自然に出ていた。

「…きっとジークさんが護ってくれるから大丈夫だよ」

スウは愛くるしい微笑みをジークに向けた。

「まったく、そんなこと言って、死んでから恨むなよ」

ジークも少しつられて、顔を綻ばせて言った。

「そしたらあたし、化けてジークさんの背後霊になって、荷物の中の食べ物ゼーんぶ食べちゃうよ」

「それだけはホントに困るからよしてくれ」

ジークはスウの表情を見て、スウなら本当にやりそうだと思いつつ言った。もしスウの背後霊などに取り付かれたら、本当に食糧を食い尽くされて行き倒れになってしまうこと請け合いだ。

「…だから、絶対に死ぬなよ」

「うん！」

表の意味と、裏の意味、二つの意味をこめてジークが言った言葉に、スウははっきりと頷いた。

護るべき人がいる―その幸福さをジークは噛み締めていた。もう、昔とは違う。オレは、誰かのために生きることができんだ、と。

しかし、もうあの頃のように自分のために生きる世界には戻りたくない。そう強く思えば思うほど、心の奥底にうごめく、大切な人の死への恐怖感は募っていくばかりであった。

四章「The Strength For Someone」

第五章 「夜空の星」

「いったきまーす！」

スウは、そこがまるで天国でもあるかのように幸せそうな声で言った。

「うるせえな。もっと静かにできねえのか」

ジークは頬杖をついて窘める。

「だって、だってえ」

スウは駄々をこねるように言う。もともと、スウが大騒ぎする気持ちは分らないではなかった。スウとジークの目の前のテーブルには、恐らくスウにとっては今まで見たことも無いような豪華絢爛な料理が並んでいるのだ。大食いなスウがよだれを垂らさない方がおかしいとも言える。ジークがルネア家の邸宅に運ばれた日の夕食での事だった。怪我をしているジークをあまり動かす訳には行かないので、ジークが寝ていた客間で食事を取ることになった。

「急いで用意させたからちゃんと準備出来なかったんだけど、喜んでもらえた様でよかったわ」

シーゼルはスウのはしゃぎ様を見て嬉しそうに言った。

「何から何まで済まねえな、シーゼル」

ジークもジークなりに感謝の気持ちを込めて言う。

「子供はそういう事は気にしなくて良いのよ」

しかし思わずからかってしまうシーゼル。

「誰が子供だ！」

「どう見ても子供じゃない。だいたい、あなたが子供じゃないって言うならそれより八歳も年上の私はなんだっていうのよ」

「んなもんだだのババ……！」

と言いかけてジークはおぞましい殺気を感じて慌てて言葉を切った。もし今の台詞を全て言ってしまったら、間違いなくジークの命は無かっただろう。

「…あ、いや、頼れるお姉様…ってどこかなあ」
慌てて言い直すジーク。

「それでよし！」

とシーゼルは満足げに頷いた。

「ねえ、ジークさん、これすごくおいしいよ！」

スウは七面鳥を頬張りながらはしゃいだ。

「ジークさんも食べたら良いのに！」

「ああ、そうだな。でも、食べ物頬張りながら喋るなよな」

ジークは諭すように言った。そして七面鳥の肉を切り取って自分の皿に盛る。表面は程よい焦げ目がついていて、中は肉汁が溢れている。確かに美味そうだ。

「ところで、白銀の獅子、聞きたい事があるんだけど」

その時シーゼルが言った。

「昼間のあの黒い影みたいなのは、一体なんだったの？確か、悪魔と名乗っていたけれど」

そういえば、シーゼルは悪魔の存在を知らなかったな、とジークはいまさらながら気がついた。

「ああ、その名の通りの悪魔だ。今まで北の氷原に住んでいたのが、この国に忍び込んだらしい」

ジークはそこで言葉を切ったが、シーゼルはその説明に満足していない様だった。しかし、ジークがそれ以上何も言わないのを見て、がっかりした表情を見せた。

「前から思っていたけれど、リイトのする事って分からないわね」

シーゼルは言った。

「どの国にも属さない、自由な旅人、と言うけれど、実際はどんな事をしているのかしら？」

「お前に教える義理はない」

ジークは即座に言い放った。

「冷たいわね。私とあなたの仲じゃないの」

「あのなあ…誤解を呼ぶような言い方するなよ」

ジークは後ろに感じるスウの突き刺すような視線に戦きながら言った。

「とにかく、誰にでもホイホイ言えることじゃないんだよ。リイトの秘密はな」

ジークは気疲れした声で言った。

「それより、さっさと飯食おうぜ」

ジークのその言葉に、シーゼルは残念そうな顔をしながらも、諦めたように食事に戻った。

その夜、ジークは奇妙な夢を見た。そこには、二人の若い人影が互いの手を取って見つめ合っていた。片方は長くてしなやかな髪を持つ女性で、もう一人は背の高い男性だった。二人の奥から夕日が差し込んでいたので、その顔を判別することは出来ない。

そこは、とてつもなく広い草原だった。どこまでも続く果てしない草原は、太陽の光に茜色に輝いている。そこには、その二人以外には何もいなかった。ガブル平原だ、とジークは直感した。ジークが生まれ、育った場所。しかし、ジークの知っているガブル平原とは何かが違った。ジークが育ったガブル平原は、こんな穏やかな土地ではなかった。

ジークがそう考察している間も、二人は身動き一つせず見つめ合っていた。平原を一陣の風が吹き抜け、二人の髪をなびかせても、二人は全く動かなかった。

永遠とも思える時間見つめ合っていた二人の影は、やがて静かにそよぐ、赤い光に彩られたまるで絵画のような風景の中、名残惜しそうに顔を背けた。その時、二人の目に涙があるのを、ジークは見取った。

そして二人は、ゆっくりと、反対の方向へと歩みはじめた。それにつれて長く延びた二人の影も、次第に離れて行く。

二人は途中、何度も立ち止まったが、振り返ることはしなかった。もしかしたら、振り返ることができないのではないかと、ジークは

思った。所詮は夢の中、ありえない事ではない。

それは、あまりに哀しい情景だった。二人は互いに深く愛し合っているのに、どんな理由からか今こうして振り返ることすらできず、別れなければならないのだ。一体この夢は何を意味するのかと、ジークは訝った。ただの夢とするには、あまりにも鮮明過ぎた。が、確かにただの夢であることも、なぜか間違いなく分かっていた。

二人の距離は次第に広がって行き、ついにはジークは二人を同時に視界に入れることもできなくなった。そこで二人は一際長いあいだ立ち止まり、しかしやはり振り返ることはせず、やがて別々の道を去って行った。その二人の別れに、ジークは何もしてやることができなかった。それが何よりふがいなかった。

次の朝、ジークは哀しい気持ちのまま目覚めた。一瞬寝ぼけて、なぜ自分はこんなに哀しいのだろうと考えて、次の瞬間、昨夜に見た夢の事を思い出した。まだ多少フワフワした気持ちのまま、夢の意味を考えたが、まったく何も思い浮かばなかった。

「ふあ、おはよ、ジークさん」

隣のベッドでは、ちょうどスウも目覚めたところだったようで、寝ぼけ眼でジークを見つめているのが背中では何となく感じられた。

「ああ、おはよう」

とジークは適当に返す。何気なく窓を見ると、明るい朝の日差しが差し込んでいる。あの夢の事がなければ、爽やかこの上ない朝になっていただろう。

「スウ、お前……」

まだ起き上がるのは面倒なので寝返りを打ってスウを見た瞬間、ジークはあることに気づいてしまい、急いで赤面した顔を背けながら、おどおどと言った。

「めくれてる……ネグリジェが」

「ひゃぶ!？」

背中越しにスウの叫び声が聞こえる。寝ぼけていたせいで、今ま

で気づいていなかったらしい。

「だからオレは別々の部屋が良いって言ったのに…」

ジークはドギマギしたまま言った。

「ジークさん…見た？」

しかしどうやらスウには、ジークの意見などより差し迫った問題があるようだった。

「ほとんど見てない」

そこでジークは事実を答えた。

「んじゃ、ちょっとは見た？」

「…だからほとんど見てないって」

もう振り返っても良さそうなので、ジークは恐る恐るスウを振り返った。するとスウは泣きそうなる顔をしていた。

「で、なんでそこで泣きそうになるんだよ。ふつう怒るだろ」

ジークはそのやり取りにデジャヴを感じつつ言った。

「ふえ、それは…」

その質問に、スウは答えられなかった。一晩経つ内に、昨日浴場で感じた奇妙な感覚の事は、怒りという感情と共に忘れてしまっていた。

この時になってジークも、もしかしたら『怒り』という感情を持たないということも、スウの正体と関係するのではないかと考えはじめた。だとしたら、このことは一体どういう意味を持つのだろう。

「それで、結局どんくらい見たの？」

スウはなおもしつこく尋ねる。

「いや…だから…ほとんど、見てない…って」

ジークにはそれ以上の事は言う勇氣はなかった。

その朝、ジーク達はシーゼルの屋敷で朝食をとった。

「それでジークさん、次はどこに行くの？」

スウはフォークを口に運びつつ尋ねた。スウは既に、シーゼルから貰った真新しい水色のワンピースに着替えていた。

「そうだな：一度テグレスの所に戻った方がいいか」

ジークは一考して答えた。テグレスは、リイトの頭目である老婆の預言者で、スピルナ公国の東にあるゾド山脈に住んでいる。

「それよりあなた、傷は大丈夫なの？」

そこでシーゼルが口を挟む。

「ああ、どうも寝ている間にほとんど治っちまったみたいだな」

「あの傷が一晩で治るなんて、相変わらずバケモノみたいな体してるのね」

シーゼルは驚いた声で言った。正直、ジーク自身もその事には驚いていた。今まではいくらなんでもこれほどの回復力はなかった。もしかすると、昨日ジークに顕れた『力』とやらとも関係があるのかもしれない。

「とにかく、オレ達はあまり一所に留まらない方がいい」

ジークは言った。

「どうして？」

シーゼルが眉をひそめて尋ねる。

「みたところ悪魔は、オレ達を狙ってる。オレ達がここにずっと居れば、またここが狙われて、今度は被害が出るかもしれない」

今、ジークはあえて『オレ達』と言ったが、それはある意味嘘だった。恐らく悪魔が狙っているのはジークではなく、スウだ。昨日の悪魔・ベリウスやメトネスがスウの名前を知っていたことから、それは明らかだった。しかし、もしその事を知れば、スウはそれを負い目を感じてしまうだろう。それは、ジークの望むところではなかった。

「…そうなの」

シーゼルは悩ましげに言った。

「あなたの事だから、引き止めようとしても無駄でしょうね。せめて何か、私に出来ることがあれば良いのだけど」

「大丈夫だ。余計な心配はいらない」

ジークは素っ気なく言った。

「あなたって相変わらずつれないのねえ」

シーゼルは奇妙な笑みを浮かべて言った。そして続けて声をひそめて囁く。

「それにしても、今まであれだけ人がついて来る事を嫌ってたあなたがわざわざ連れ歩くなんて、よっぽどスウの事が好きなのね」

「な、なんだよ、藪から棒に……」

途端に赤面するジーク。相変わらず、こういう所は子供丸出しである。

「二人とも、何の話してるの？」

何も知らないスウが純粋な好奇心から尋ねてくる。

「え、いや、なんでもない」

ジークはシーゼルが妙な事を口走らないように注意を払いつつ言った。

「それより、もう食べ終わったんなら、さっさと出発するぜ。あんまり長く居ても迷惑だろうし」

慌てて取り繕うように指示するジークを、シーゼルはさも面白そうに眺めていた。

出発の準備を済ませ、ジーク達がレイアーク市街に出ると、街は昨日以上に賑わい始めていた。十三日後に開かれるクレオスナ祭の準備は着実に進んでいるようで、一日経つ内に街の装飾も増えている。祭が始まるのを待ち切れなくなっただけか、箆笥の奥から掘り出したであろう各々の一族に伝わる民族衣装で身を包む人々も多く見られる。

「そういえば、あなた達はどうするの？」

その街の様子を見て、ふいにシーゼルが言った。

「クレオスナ祭って一言に言っても、地方や街によって色々な特徴があるから、どうせ旅してるなら、どこでクレオスナ祭に参加するか、考えた方がいいんじゃない？」

「そうだな……」

ジークが答える。

「でも、一度テグレスの所に行ってからじゃなきゃ、次にどこに行くかは分からないからな」

ジークは面倒臭そうに言った。

「まあ、オレもスウもクレオスナ祭に参加したことはないし、別にどこが良いなんてこだわりもないからな。成り行きでなんとかなるだろ」

「随分と適当ね」

シーゼルはそう言いつつも、内心それが妥当だとも思っていた。ジークもスウも、シーゼルとは違いスピルナの生まれではない。今まで参加したこともないスピルナの祭に親近感が湧かないのも当然だ。

「まあ、好きにすればいいけど。どちらにしても、私には関係ない訳だし」

シーゼルとジークがそんな話をしている中、スウは興味深げにあらゆるこちらを見回していた。シーゼルがスウの尖った耳を隠すために用意してくれたクリーム色の鰐広の帽子は、スウにぴったりフィットしていた。

今までずっと体を洗うこともせず、着古してきたボロを着て、尖った耳を周囲の目にさらしていたがために、周囲から人並み以下の扱いを受けてきた孤児であるスウにとって、今こうして体を洗い、汚れ一つない立派なワンピースを着て、上品な帽子で不気味がられる耳を隠せていることは、まるで自分ではない何かに生まれ変わったような気分だった。

天国にいるような嬉しさが強いのはもちろんだが、同時に何かふわふわした、自分が自分で無くなってしまったような漠然とした不安も感じていた。

それでも、こうして人並みの恰好をしていることは、やはりスウに言い知れぬ感動と自信を与えていた。そのためか、スウは今まで

になくはしゃいでいた。

「ふあ、ジークさん、これおいしそうだよ!」

店のショーウィンドウに飾られた色とりどりのお菓子を見つけて、スウは言った。

「だから何だよ。オレに買えってのか?」

ジークがまさかという風に聞いた。

「ふえ、買ってくれないの?」

そこでスウもまさかという風に聞き返す。

「いや、オレ別に『買ってやる』とかいう雰囲気してないだろ」

ジークは答えた。

「つーかなんでお前はそう食べ物にしか興味がないんだよ。他に欲しいものはないのか?」

「あったら買ってくれるの?」

「いや、買わないけど」

ジークは居心地悪いような顔をして言った。

「意地悪言わないで買ってあげなさいよ。どうせお金は余るほどあるんでしょ?」

そこにシーゼルがやって来て茶々を入れた。

「何たってレイアークを助けて貰った時に謝礼金がたんまり出たんだから」

「ふえ? 今までジークさんっててつきり貧乏だと思ってたけど」

スウは驚いて言った。前からジークはよく貧乏人っぽい台詞をよく言っていた。

「念のためだよ。もし金持ちだと思われたら、狙われるだろ」

ジークはどうでも良さそうに言った。

「まああなたの場合、もし金持ちだって知られたら、泥棒とかに狙われる前に、スウにしこたま使い込まれるでしょうね」

「ふえ、使って良いんですか!」

シーゼルの言葉に、スウは途端に目を輝かせた。

「良くなえよ!」

ジークが慌ててつつこむ。

「そんなカリカリしなくても、ちょっとくらい使わせてあげてもいいんじゃないの？ どうせまだいっぱいあるんでしょ？」

シーゼルが呆れたように言った。

「うるせえな…」

ジークはそう呟いてちらりとスウの表情を窺った。そこでスウは思いつき期待の眼差しを向ける。

「…しょうがねえな、今回だけだぞ」

ジークが観念したように言った。

「ふあ、ありがと、ジークさん！」

シーゼルが腹を押さえて必死で笑いを堪える中、スウはジークの気が変わらない内にとその手を引いて菓子屋に入って行った。

「さて、ここでお別れってことになりそうね」

その後、一行がレイアークの橋にたどり着いた時、シーゼルが言った。

「いろいろと世話になったな」

ジークが言った。

「本当に、ありがとうございました」

スウもそう言ってぺこりと頭を下げた。その手には買ったばかりの飴が握られている。

「お礼なんていいわよ。それより二人とも、気をつけてね」

シーゼルが返した。

「私は事情は分からないけど、あなたの事だからまた誰かのために危険な事に首を突っ込んでるんでしょ？」

そう言ってシーゼルはスウを指し示すような意味ありげな視線をジークに投げかけた。

「…まあな」

ジークはバツが悪そうにそっぽを向いた。シーゼルは感づいているのだ。悪魔達の目的がスウであることに。

「それと…何かやりたいことがあるならさっさとやっちゃった方がいいわよ♪」

シーゼルは続けて悪戯っぽく言った。ジークは無意識の内に着ている上着のポケットに意識をやった。そこには昨日ジークがスウにプレゼントしようと思って買った銀のペンダントが入っていたが、ジークは今のところ期を逃して渡し損ねていた。まったく、これだから女は怖いんだ、とジークは思った。

「さて、それじゃそろそろ行くとするか、スウ」

ジークははぐらかすように言った。

「じゃあな、シーゼル」

「もし恋愛の事で相談があったら、いつでもまた来るといいわ」

シーゼルは不意にジークに詰め寄り、ジークにしか聞こえないように声を抑えて言った。ジークはむすつとして、顔を背けた。

「それじゃあ二人とも、またね」

「それでは、失礼します」

再び声のトーンを戻し、軽い口調で言うシーゼルに、スウは再び頭を下げた。

そしてスウとジークは、橋を渡る人混みの中に紛れ込み、ノーレラス地方の中央街・レイアークを後にした。

レイアークを出た二人は、ゾド山脈に向かうために、東へと進路を取った。道は左側を川が流れ、右側には林が続いている。この川は、ノーレラス地方の東にある地方、ハシラ地方から流れ、レイアークを囲む湖を通って遙か西のガブル平原にまで続いている。

スピルナ公国の東にあるゾド山脈に向かうために、ジーク達はハシラ地方・ヒカナセク地方を経由しなければならない。ハシラ地方は比較的小さな地方だが、全体が緩やかではあるが山地になっている。そのため今までよりも移動時間は多くかかることになるだろう。ゾド山脈に着くまでに、再び悪魔に襲われることはあるだろうか、とジークは思った。やつらの目的は恐らくスウだ。しかし、それに

しては不自然な行動が目立つ。もしスウを奪うことだけが目的なら、わざわざ一体や二体ずつ送って来なくても、一度に全員で来れば、ジークなどでは到底太刀打ち出来ないだろう。それに、幻の町ではメトネスは一度スウを拉致していた。スウを捕まえたいだけなのなら、その時にすぐに連れて逃げれば良かったはずだ。

まだ分からないことだらけだが、ゾド山脈にたどり着けば、恐らくテグレスから詳しい話を聞けるはずだ。そもそもジークをパテルに派遣してメトネスと戦わせたのはテグレスなのだ。何も知らないとは言わせない。

そんな事を考えながら歩いていると、不意に体の右側に触れるものを感じた。見ると、スウがジークに寄り添うようにして歩いていた。

「どうしたんだよ、スウ」

ジークは少し戸惑ったように言った。

「これくらいいいじゃん。別に誰も見てないんだもの」

しかしスウは構わずジークの腕をほっそりした両腕で抱きかかえてきた。

「それに、こうしてジークさんと二人っきりで旅するのって、なんだか久しぶりだから……」

「久しぶり……つってもそもそも、オレ達出会ってからまだ一週間経ってないぜ」

腕に感じるスウの温もりに少し動悸を感じつつ、ジークは言った。パテルに向かう街道で初めてスウを見たのは、ちょうど六日前だった。

「それでも、嬉しいもん」

スウは少し拗ねたように言う。

「ったく、相変わらず変な奴だな」

ジークはさりげない風に装って言った。しかし、実際は緊張のあまり動悸が収まらない状態だった。しかし、スウの事だから抱き着くのを止めろといっても聞かないだろう、とジークは自分に言い聞

かせた。仕方がない事なんだからと…。

「あんね、ジークさん、聞きたいことが…」

しばらく歩いた後、スウは、ジークに質問するときの決まり文句を口にした。

「何だよ」

「どうして、ジークさんはヒカナ家からレイアークを護ったの？」

「なんでそれを今聞くんだよ」

「なんだか、とつぜん気になって…」

スウは素直な声音で言った。その声から、本当にただの気まぐれなんだろうとジークは推測した。

「オレがレイアークを護った理由、ねえ…」

ジークは面倒臭そうに言った。

「別に、これと言って深い理由は無いんだけどな。まあ、オレがお前を魚屋から護ったのと同じ理由、って言えば分かるか？」

「それってつまり、『気まぐれ』ってこと？」

確かに前にジークはそんな事を言った覚えがある。

「まあ、そうとも言えるかもな。とにかく、ヒカナ家の脅威にさらされて、死か強制労働を待つばかりだったレイアークのやつらをほっとけなかっただけだ」

「そっか、ジークさんって優しいもんね」

スウはほほ笑んで言った。

「だから、そんなんじゃないやねえって。あの時の状況を見たら、誰だって同じように考えるさ。それだけひどい有様だったんだ」

「でも、そのために実際に立ち上がって、自分の命を賭けて戦うなんて、誰にでもできることじゃないでしょ」

スウは突然諭すような口調になって言った。スウはオレに自分が優しいと認めさせたいんだ、とジークは気づいた。

「そんな事知るかよ」

へそまがりなジークははぐらかすように言った。そして、強がってこう付け足した。

「そもそも、『命を賭けて』だったって、オレはあんな程度の戦いで死ぬ気なんて毛頭無かったぜ」

「ふーん」

スウは明らかに納得してないような反応を見せた。

「まったく、ジークさんたら、自分に素直じゃないんだから」

悪戯っぽくそう言って、スウはつかの間ぎゅっとジークの腕を抱きしめた。そしてジークの腕を離して、嬉しそうにジークの前をスキップして行った。それに合わせてシーゼルから貰った青いワンピースの裾が楽しげにはためいた。

「何意味の分らないことを言ってるんだか……」

ジークは頭の後ろをかきながら、仕方なさそうにスウの後を歩いて着いて行った。

―幻の町のあった荒野―

「この足跡……どうやら、ここで戦闘があったようですね」

数日前の物と推測されるいくつもの足跡が残る地面を観察しながら、旅装束の青年は独り言を言った。この荒野には何もないのに、こうして同じ時期の同じ足跡があちこちに散在しているということから考えても、ここで何かの争いがあったと見るのが道理だ。

足跡が何日も後まで残るほど深く刻み込まれているのも、その証拠だ。それだけ地面を強く蹴る必要があったということだからだ。

青年は後ろに鹿毛の馬を牽いていた。エスル村でジークの情報を聞いてから、青年は馬を走らせここまで追ってきたのだ。焦る必要はないためあまり馬を酷使せずゆったりと来たが、かといってここでジークを見逃す訳にもいかない。悪魔の被害は、確実に増えている。やつらから人々を護るには、どうしてもジークの力が必要だった。

実際、エスル村の前に言ったレグラ地方の中央街パテルでは、悪

魔によるものと思われる大火災が起こっていて、かなりの犠牲者を
出していた。実行犯はチャノ村で魚屋を営んでいた男・ヘテーク・
ハレアだったが、どうやら悪魔によって心を操られていたようだっ
た。そして本人の証言によると、ヘテークから悪魔を引きはがし、
撤退せしめたのは白銀の髪少年だったということだ。恐らくそれ
がジークであったと見て間違いないだろう。

もし、ジークが止めていなかったら、今頃パテルはどうなってい
た事か。

「やはり、彼の力はスピルナに必要という事ですか」

青年は自分に言い聞かせるようにそう言って、引き続きジークの
後を追おうと軽やかに馬に乗った。

「ケケケ、オイラ達のことを嗅ぎ回ってるってのは、あんたかい？」

その時、虚空から不気味な声が響いた。

「だったら、何です？」

青年は怯む事なく聞き返す。

「メンド臭いけど、もしあんたがオイラ達に害を加えそうなら、消
すように頼まれてんのさ」

その言葉とともに、真っ黒な人影に真っ赤な目と口、異様に長い
腕を持った悪魔が姿を現した。

「面倒臭いのなら従わなければ良いのでは？」

青年は冗談混じりに提案した。

「残念ながら、そういう訳にも行かないのさ！」

悪魔・メトネスはそう言って青年に飛び掛かった。青年は馬の手
綱を引いてそれを避けさせた。

しかし、直接攻撃することがメトネスの目的ではなかった。メト
ネスはグニヤリとグロテスクに体をねじらせ、青年の懐に入り込ん
だ。

「その体、悪いけど使わせて貰うしさ！」

メトネスはそう言って、青年の耳元に呪文を囁き始めた。魚屋へ

テークにも使った、相手の心の闇を増幅させて操る得意の呪文だ。

青年はめまいを感じて、自分がされている事が何かに気がついた。すぐさま剣を鞘から抜き、メトネスを振り払って馬の向きを変え、馬の腹を踵で蹴って走らせた。

メトネスには、その馬に着いて行けるだけのスピードはない。その上、今はジークから受けた傷がまだ疼いている。この状況での追跡は不可能だった。

「ちっ、逃げ足の早い奴だしさ！」

メトネスは悪態をついたが、追跡そのものを諦めた訳ではない。元来『耳』を司る悪魔であるメトネスには、いわゆる『地獄耳』の力もあった。それによって、馬を駆る青年の物音から、向かっている方向を確実に予測することが出来る。

「…なるほど、あの白髪のリイトと合流しようって算段だね」

しばらく耳を澄ませた後、そこまで覚ったメトネスは、仲間の悪魔にそれを知らせるべく、霧となって消えた。

ーノーレラス地方ーハシラ地方間の街道ー

その日の夜、ジークとスウはいつも通り街道の脇の林の中にあつた空き地で野宿することになった。街道を挟んで反対側を流れる川の音が涼やかに鳴り響いている。

スウはいつもの習慣通り、たき火のそばに座ってオカリナを吹いている。その腕が日に日に良くなっていくのは、音楽の心得の無いジークにさえはつきりと分かる程だ。

スウが今吹いているのは、カレハから教えてもらった曲の一つで、確か曲名は『湖面の月』だ。あの短い時間でスウが覚えることができた曲は少ししかなく、これはその中でスウが最も気に入っている物だ。

しかし、今のレパートリーではいずれスウは飽きてくるだろう。

次に、オカリナのもとの持ち主に会ったら、スウに他の曲も教えてやるように頼んだ方が良さそうだ。

ジークは夜空を見上げ、スウのオカリナの音色に聴き入りながら、そんな事をぼんやりと考えていた。夜空にはそれこそ数え切れないような星々が散らばり、瞬いていた。真っ暗な空を彩る、その儚く静寂を感じさせる光は、ジークの心を洗い流してくれるようだった。

ジークは昔から夜空の星を見上げるのが好きだった。遠い空の彼方で輝く星に、こうして淡く照らされる時間が好きだった。言葉に表せないその神秘的な感情は、スウと一緒に居る時とどこか似ていることに、ジークはふと気づいた。

スウと居ると、ジークは呆れたりドギマギしたりしてばかりで、一見星を眺めるときの静かな思いとは掛け離れているようにも思えるが、ジークは今その二つの間に、もっと深い部分での共通点を見出だしていた。

「：星は夜空の中でこそ輝き、夜空は星によってのみ彩られる」

その言葉は、自然とジークの口から漏れ出ていた。それは、古くから知られる言葉だった。どうしても今、その言葉が口について出たのか、ジークにはにはわかには分からなかった。

「ジークさん、それって：」

それを聞いて、スウは驚いて口からオカリナを離し、ジークに振り向いた。

「何だ、知ってるのか？」

ジークも驚いて聞いた。

「うん：お父さんが、よく言ってた」

スウは思い出すように言った。

「あたしの名前：スウ・ロ・ヤマは古代の言葉で『夜空の星』っていう意味で、今ジークさんが言った言葉から名付けたんだって」

「古代の言葉：それってもしかして、『聖霊語』の事か？」

ジークは尋ねた。聖霊語とは、太古の昔にいたすべての精霊族の祖先でもある聖霊達が使っていたとされる、魔力を帯びた言語の事

だ。しかし、今の時代ではごく一部の精霊族を除けば、その言語を完全に解する者は居ないとまで言われている。

「よく覚えてないけど、確かそんな事も言ってたと思う」

スウは自身なさ気な声で言った。

「そうなのか」

スウの言葉を聞いて、ジークは考え込んだ。今さっき説明したように、この時代の人間で聖霊語を知っている者はそうそういない。スウの養父―確か名前はシルート・サーズと言ったか―は一体、何者なのだろうか。

「『夜空の星』か：お前にぴったりの名前だな」

ジークは純粹に心に浮かんだことをそのまま言った。

「ほんと？ そう言ってもらえると嬉しいけど：」

「けど、何だ？」

「あたし、まだ自分に自信がないの。あたしはあの星みたいに綺麗じゃないし、あの星の光みたいに、おしとやかでもないもの：」

スウは胸に左手を当てて、少し哀しげに言った。

「そんな事はないって」

ジークは即座に言った。スウは驚いたようにジークを見つめた。

「スウは綺麗だよ」

ジークは星明かりに朧げに照らされたスウの、紫色の瞳を見つめ返した。ジークには一瞬、その瞳に空の星々が映っているように見えたが、それが錯覚なのか、ジークには分からなかった。

「ホントに？」

スウは信じられないという表情でジークを見た。

「本当だ。少しはオレの言葉も信用しろよ」

ジークは答えた。

「：ごめんなさい、そういうつもりじゃ：」

スウは恥じ入るように少し顔を俯けた。

「とにかく、少なくともオレの目から見れば、お前は綺麗だ。お前自身が思ってる以上にな……もっとも、お淑やかじゃあないのは確

かだけどな」

ジークはついでのように付け足した。

「…そこははっきり言うんだ…」

そう言っただけで一瞬わざとらしくむすっとした表情を見せたが、次の瞬間にはクスツと笑った。

「でも、ジークさんのそういう所も、あたしは好きだよ♪」

「なっ、何変な事言ってるだよ」

ジークは顔を赤らめて慌てて言った。その様子をスウがどこか愛おしむような表情で見つめてくるので、ジークは自分の気障ぶりに一層ばつが悪くなるのだった。スウと出会う前のジークなら、口が裂けてもこんな台詞は吐けなかっただろう。

―幻の町跡地の近く―

「それにしても、いつまでこうして手加減してなきゃいけないのさ！？」

メトネスは苛立たしげに愚痴を言った。

「まったく、最近のお前は文句を言ってるばかりだな」

グルナが面倒臭そうに言った。

「これだけつまらないことが続けば、誰だってこうなるしさ！特にオイラはあの銀髪のリイトに傷まで付けられたんだしね」

メトネスは言った。

「ハッ、いくら手加減していたからと言って、それはてめえが弱かっただけじゃねえか？」

ベリウスは馬鹿にするように言った。しかし、メトネスはあえてそれを無視した。

「それで、結局いつまでこんなつまらないこと続けりゃいいのさ？」
メトネスはグルナに尋ねた。

「それはスウ・ロ・ヤマ次第、ということになるだろうな」

グルナは落ち着いた声で言った。

「あの疫病神かい。でも、本当に、あんな奴の為にここまでしてやる必要があるのかい？」

「奴の持つ『力』は、我々の計画には間違いなく必要だ」

グルナは言った。

「いくら頭の悪いお前でも、我々の目的を忘れた訳ではあるまいな？」

「忘れる訳が無いしさ！」

馬鹿にされたメトネスは声を荒げた。

「ハッ、それならそうやってグズグズ言うのはやめるんだなあ」

ベリウスが言う。

「それは確かにそうだけども、やっぱり終わりが見えて来ないことにはやる気も失せてくるしね」

メトネスは言い返した。暗に、『この状態がいつまで続くのか教える』と言っているのだ。

「そうだな…」

メトネスの考えを覚ったグルナは、勿体振るように言った。

「まず、スウ・ロ・ヤマの本来の力を解放させないことには、奴を捕らえた所で意味はない。そこで我々の今の目的は、奴の力を解放させることなのだ。しかし、奴の力は奴自身のある感情によってのみ解放されうるものなのだ」

グルナは説明しはじめた。

「その引き金となる感情は、奴の『怒り』だ。奴が怒れば、その『力』は解放されるのだ。だが、あの力は奴自身にとっても負担が大きい。そのために、普段の奴は怒りの感情を本能的に封じているのだ」

「つまり、問題はどうかやってアイツの中に眠る『怒り』を呼び覚まさせるか、ってことかい？」

メトネスは納得したように言った。

「その通りだ。お前にしては勘が良いな」

グルナは冷やかすように言った。メトネスはイラッとした表情を見せたが、話の先を聞く方に興味をそそられているようで、手を出すことはしなかった。

「メトネスの言う通り、問題はそこだ。つまり、我等の計画を進めるには、奴が分別を棄てて身を任せるほどの強烈な怒りを起こさなければならぬのだ」

「ハッ、その事とオレ達の手加減しなきゃいけないってのは、一体どんな関係があるんだあ？」

ベリウスがもどかしそうに聞いた。

「いいか、ベリウス。人間というものは、自分自身が傷つけられるよりも、自分にとって大切な物を傷つけられた時の方が、ずっと強い怒りに駆られる物なのだ」

「……ってことはつまり、スウにとって自分自身よりも大切な物を攻撃すればいいって事かい？」

「その通りだ、メトネス。そしてその大切な物を、あの銀髪のリイトにさせるのが、我等の計画なのだ」

グルナは言った。

「つまり、オイラ達と戦わせることで疫病神に、あのリイトに対する思い入れを強めさせて、そのリイトを攻撃することでアイツに怒りを植え付ける、って事かい？」

メトネスが聞いた。

「要するに、そういう事だ」

「それで、今はどのくらいなのさ？」

「やってみなければ分からないが、恐らくそろそろ、もう一度試してみてもいいだろうな」

グルナは考え込むように言った。

「ハッ、そう言うことなら、もう一度オレに行かせてもらうぜ。どっちみちてめえら二人じゃ、スウ・ロ・ヤマに力を解放されたら何も出来ないんだろ」

ベリウスが活気づいた声で言った。あの銀髪のリイトと再び戦え

ることが嬉しいのだ。

「それはそうだが、お前も一度負けた相手だぞ。勝算はあるのか？」
グルナが訝しげに言った。

「ハッ、なめんじゃねえ。もしオレが手加減してなきゃ、あの野郎はとっくに死んでるぜ」

「どうだかね、オイラの助けがなきゃ、死んでたのはどっちだい？」
メトネスは反発するように言った。

「だから、手加減してなきゃてめえの助けも要らなかったっつてんだよ！」

ベリウスは声を荒げて言った。

「やめろ、二人とも！」

メトネスが言い返そうとするのを遮るように、グルナは言った。

「お前達はこうしてそう仲が悪いんだ」

「グルナには関係ないね！」

メトネスが言った。

「いいや、関係はある。お前達の不仲のせいで計画にもしもの事があつてはならんからな」

グルナが言い返す。

「ハッ、その事なら大丈夫だ。メトネスがいなくても計画に問題は無いからなあ」

「ベリウス、そいつはどういう意味だい！？」

メトネスが食ってかかった。

「言葉通りの意味に決まってるだろおが。まさか、こんな言葉の意味も分かんねえのか？」

ベリウスはからかい口調で言った。

「まったく、いい加減に喧嘩は止めろ！」

そこでグルナが仲裁に入る。このままではいつまでも話が進展しない。

「とにかく、次の襲撃にはベリウスが行く。そして、もし奴のリイトへの想いが十分に強くなっているようなら、一気にあのリイトを

攻撃しろ。その時は本気を出しても構わん」

「ハッ、その言葉を待ってたぜえ！」

ベリウスは意気揚々と言った。その様子をメトネスはどこか苦々しげに眺めていた。

「おっと、そう言えば一つ言い忘れてたしね」

その時メトネスが突然言った。

「何だ？」

グルナが聞く。それを聞いてベリウスもメトネスを振り返った。

「今日、幻の町があった場所で『継承者』を見かけたのさ。逃げられちまったけどね」

「継承者だと？　と言うことは、やつらもついに重い腰をあげたと言うことか」

グルナは思惟しながら言った。ベリウスは黙ってその会話に聴き入っている。

「まあ、そういうことになるしね」

メトネスは言った。

「それも、あの銀髪のリイトと合流しようとしているみたいだったしさ。やつらとリイトが手を組んだら、厄介な事になるし、計画をさっさと進めるべきだと思うね」

「ならば何故、のんきにベリウスと口喧嘩などしていたのだ？」

グルナは呆れ声で言った。

「だが、そういう事ならば確かに急いだ方が良さそうだな。すぐに出発するぞ」

言うが早い、グルナは一瞬にしてその体を黒い霧へと変化させて、その場から消え去った。

「ケケケ、ベリウス、もし今回ミスしたら、『兄貴』からどんな罰を与えられるか見物だしね」

その後もメトネスとベリウスは少しの間そこに留まっていた。

「ハッ、うるせえ。今度は絶対に失敗しねえ！」

ベリウスもまけじと言い返す。

「ケケケ、そういう事なら、次もし死にかけても、今度は助けてやらないしさ!」

「もともとてめえの手なんか借りるつもりはねえよ!」

その言葉を最後に、その二人の悪魔達も、グルナと同じように霧と化して、その場を一瞬にして離れた。

五章「The Star of The Night Sky」

第六章 「魔之手」

―ノーレラス地方中央街レイアーク―

「：いらっしやい」

それは、ジークがレイアークを離れた次の日の朝だった。扉のベルが鳴る音を聞き付けて、店の奥にいた老人は無愛想に言った。ちらりと目をやると、入ってきたのは茶色い質素な旅行用マントに身を包んだ青年だった。

老人はそのフードの中を覗いた。まさかとは思ったが、知っている顔だった。

「まったく、このところ珍しい客が多いもんじゃな」

老人は言った。

「多い：というと、前には誰が？」

青年は店内に所狭しと並べられている装飾品を物色しながら、さりげない様子で尋ねた。

「白銀の獅子じゃよ。スピルナ動乱の時、この街だけにとどまらず数え切れないほどの無力な人々を護った英雄じゃ。よもやこの目でお目にかかれる日が来るとは思わなんだ」

老人は淡々とした調子で言った。

「何しろワシはスピルナ動乱の時は孫娘にせがまれて疎開しとったからのお」

「なるほど：それにしても」

青年はそこで話題を変えた。

「あなたのような方が、こんな所で装飾品店を営んでいるとは：あなたのお孫さんから伺った時は驚きましたよ、レイゲル・ベン・ルネア殿」

「ふん、政治やら式典やらよりも、こっちの方がワシの性にあってと思うただけの事じゃ。行政などというつまらん事は、シーゼル

に任せてしまうに限る」

老人・レイゲルはあくびをしながら言った。

「人は裏切ることもあるが、宝石は裏切らんからの」

「僭越な事を申し上げますが、ろくでも無い祖父ですね」

青年は少し笑って言った。

「何とでも言え」

レイゲルはぶっきらぼうに返した。

「大体そっちこそ、一体どうしてこんな所にいるんじゃない？」

「訳あって、その白銀の獅子の力を借りなければならない事になりましてね」

青年は答えた。

「それでここまで追って来たって訳かい。悪いが、ワシに聞いても行き先は知らんぞ」

レイゲルは言った。

「でしようね。リイトの行き先を知っている人は、なかなか居ませんから」

青年はレイゲルの言葉を予期していたかのように言った。

「もっとも、僕はもうシーゼル殿から伺っているので、彼がどの方向に向かったかは知っているんですがね。ここへはただ、あなたに挨拶をしに来ただけです」

「ほう、そいつは有り難いねえ。ついでに何か買ってってくれと、もっと有り難いんだが」

レイゲルは冗談混じりに言った。

「この店で下手に物なんて買ったら、途端に破産してしまいますよ」と青年も冗談で返す。この店の物がどれも、平民なら見るだけで失神しかねないような高価な物ばかりである事を、青年は知っていた。

「ふむ、しかし白銀の獅子は買ってってくれたぞ。それもエンリアル製の特別高級なやつだ」

「なるほど。あの人が、ですか」

青年はどこか面白がるような声で言った。

「きつと恋にでも落ちたんでしょね。でなきゃそんなもの欲しがるような人じゃない」

「じゃ、アンタはどうなんだい？」

レイゲルも面白そうに尋ねた。

「僕は、別に…」

青年は目を背け、言葉を濁した。

「…そんな事しても、僕にとっては無意味なだけです」

青年はしばらくして言った。その声には微かな憂いが混じっていた。

「訳ありかい。でも、好きな女は居るみたいじゃの」

「とにかく、行き先が分かった以上、僕は彼の後を追わなければ」
青年はレイゲルの言葉を遮るように言った。

「それでは、またお会いしましょう」

早口にそう言って、さっさと店を出て行ってしまった。

「…まったく、せっかちな若造じゃの」

一人店に残されたレイゲルは独り言を呟いた。

―ノーレラス地方／ハシラ地方間の街道―

「ジークさん、この『音』…」

夜営に使った荷物を片付け終わって、微かな陽光の射す曇りの天気の中、林に挟まれた道を歩いている途中、尖り耳で何かを聞き付けたらしいスウが突然言った。

「悪魔か？」

ジークが尋ねる。同時に、辺りの木々がざわめいた。その風が、ジークの髪も軽くなびかせる。

「うん…前と同じひと」

スウは落ち着かない様子で言った。

「どっちから来るか、分かるか？」

一対の大刀の鞘を払いながら、ジークが緊張した声で続けて尋ねた。

「えっと、多分あっちのほう……」

スウはジークの後ろを指差した。ジークはそれに反応して、すぐに身構える。

「スウ、下がってろ！」

数秒後、何者かの気配を感じたジークが叫んだ。気配は、スウの言った通りの方向から迫っていた。

次の瞬間、右手の林から、真っ黒な人のような形の影が飛び出した。これもスウが言った通り、一昨日戦ったのと同じ『尾』の悪魔、ベリウスだった。

「ハッ、やつと見つけたぜえ！」

ベリウスは歓喜の声を上げた。

「一昨日でめえにやられてから、ずっとウズウズしてたんだあ！」
そう叫んでベリウスは自慢の真っ黒で長い、見るからに強靱そうな尾を振りかざした。

「そうかよ」

ジークは相手の調子に乗せられまいと平静を装って言ったが、内心不安を感じていた。前の時と同じような『力』の解放を感じていないのだ。あの『力』はあの時だけの一時的な物だったのか、それとも何か解放するための条件があったのかは分からないが、どちらにしろ『力』がなければベリウスに勝てない事は、前回の戦いから見ても明白だった。

しかし、たとえ『力』の解放がなくても、だからといってすぐに諦める気も全くない。とにかく、出来るだけの事をするべきだ。

そう思ってジークは両手に握った刀を構え直した。

「ハッ、それじゃあ、行くぜえ！」

ベリウスは一瞬屈み、脚の筋肉を最大限に使ってジャンプした。どうやら、前の時に建物の上からやったような攻撃を仕掛けるつも

りだろう。『力』が解放されていないジークでは、何とかして避けるしかない。

ベリウスは空中で回転し、勢いをつけた尾をジークにたたき付けてきた。ジークは屈んでそれを紙一重で躲した。そして右の刀を振り上げて反撃すると、ベリウスは軽々とそれを避ける。

着地したベリウスはすぐに地面を蹴り、再びジークに攻撃を浴びせてきた。『力』の補助がない今の刀では、ベリウスの攻撃を受け切れる保証はなく、ジークにはただ避けるしかなかった。

前の時と同じく、スピードではジークが勝っている。しかし、これも前と同じく、ジークには攻め手がなかった。

ジークの背中に、木の幹が当たった。後ろに躲し続けている間に、道の端まで追い詰められてしまったのだ。

ベリウスがここぞとばかり横薙ぎに尾を鞭のようにしならせ、打ち付けてきた。ジークは再び屈んで躲そうとしたが、それを読んでいたベリウスの攻撃はさっきのよりも位置が低くなっていた。

ジークはすぐに、刀をベリウスの尾とほぼ平行に構えて、その攻撃を受け流した。尾は刀の上を滑り、ジークの後ろにあった木を粉碎した。

「ハッ、相変わらず避けるのだけはうまいなあ！」

ベリウスは多少いらついた声で言った。ジークはそれに答えず、目の前に立ちはだかるベリウスの脇の下を素早くくぐり抜けて、追い詰められた状態から脱出した。

しかし、後になって考えてみると、ベリウスの武器である尻尾のある背中側に回り込んだのは失策だった。ベリウスはジークが自分の後ろに回り込んで来てもあえて振り向くことはせず、高くもたげたその尻尾を上からたたき付けてきた。無論、背中越しで攻撃して来るときよりも射程は長い。

ジークは急いで横に飛んだが、鞭と剣の利点を併せ持ったベリウスの尾を避け切れず、左足に傷を負ってしまった。傷は深くはないが、脚をやられたのはこの状態では絶望的だった。ジークが唯一ベ

リウスより勝っている能力である素早さを奪われてしまうからだ。

ジークは左手に持っていた刀で、地面にめり込んでいたベリウスの尾を押さえ付け、右手の刀でベリウスに切り付けた。ベリウスは身を屈めたが、真っ黒な長い髪の一部が切り落とされた。

ベリウスは尾を押さえ付けていたジークの刀を払いのけて、ジークの方に体を向けた。

「ハッ、見たところ、一昨日オレを負かしたのと同じ力は、今はねえみてえだなあ！戦ってつまんねえぜ！」

そう言ってベリウスは突然身を翻し、十メートルほど離れた場所に立ちすくむスウに向かって走り出した。スウを危険にさらし、ジークを本気にさせて力を引き出させようとしているのだ。

ジークはすぐさまベリウスを追おうとしたが、左足の傷が疼いた。ベリウスの思惑通り、どうにかして『力』を解放させなければ、スウを護ることはまず出来ない状態だった。

ジークは、謎の声に『力』を目覚めさせられた時の事を思い出した。

―僕は、君の『力』を少しだけ、目覚めさせることができる。だから、一つだけ約束して。君が護りたいと思う大切な人を、絶対に護り通すこと―

あの声はそう言っていた。もし、大切な人を護りたいという思いが、『力』を解放させるのに必要な物なら…。

（頼む…）

ジークは心の中で強く念じた。

（オレに、スウを護れるだけの力を…！）

その時、ジークの持つ刀が微かに輝きはじめた。

それは、まさに一瞬の出来事だった。ジークには、まるで自分自身が光そのものになっているようにさえ感じられた。次の瞬間、ジークはベリウスの目の前に立ちはだかり、構えられた尾を刀で弾いていた。ジークの左腕の刀の内側には、たった今ベリウスの射程に

捉えられていたスウが抱き留められている。

ジークの体内に流れる『力』の奔流は、前の時よりもその量を増していた。意思の強さが原因なのか、前よりも体が『力』に慣れているのか、それとも使う度に能力が上がるようになっていくのか。理由はともかく、その力は前よりも強くなっていた。

「ハッ、そうこなくっちゃなあ！」

ベリウスは怯みもせずと言った。

「これで一昨日の借りも返せるってもんだあ！」

「ジークさん……」

腕の中のスウが心配そうな声を出して、ジークの服をぎゅっと掴んだ。

「大丈夫だ。オレに任せろ」

ジークは『力』が解放している時の常らしい、落ち着いた口調で言った。もしかすると、体内に溢れるエネルギーが、ジークを無意識のうちに厳かな気持ちにさせるのかもしれない。

ジークはスウを離し、後ろに下がっているように合図した。

「お願いだから、無茶はしないでね……」

スウはそれだけ言うと、素直にジークの合図に従った。

「……ハッ、さあて、そろそろ本番と行くかあ」

ベリウスは待ち兼ねたような声を出した。やはり、今のベリウスにとって重要なのは、公平な勝負でジークを負かす事なのだと、ジークは改めて覚った。

「ああ」

ジークは答え、白銀に輝く一対の刀を構えた。

ベリウスは体を素早く回転させ、手始めとばかりに尾をジークにたたき付けてきた。ジークは今度は躲すことはせず、右の刀でその攻撃を受け止めた。

そして間髪容れずに左の刀で反撃する。ベリウスは地面を蹴って宙に上がり、その攻撃を避けた。そして空中で前転し、上からしなラせた尻尾を打ち付けた。

ジークは地面を蹴ってそれを躲した。さっきと同じ、光そのものになるような奇妙な感覚を感じ、次の瞬間には宙にいるベリウスの真上に来ていた。当のジークにはあまり実感はないが、恐らくベリウスにはジークが瞬間移動しているように見えただろうし、もしかしたら本当にそうなのかも知れない。

後になって自分で信じられなくなるほど、この時のジークは落ちて着いて物事を考えていたのだった。

ジークは空中で体の自由が効かないベリウスに向かって刃を振り下ろした。

ベリウスの体は、自慢の尻尾ほどではないがかなり頑丈だったように、刀は深くは切り込めず、振り下ろしたエネルギーのほとんどがベリウスを地面に向かってたたき付ける力に消費された。

地面にぶつかったベリウスは微かにうめき声を上げたが、まだまだ余力は残しているように見えた。すぐに立ち上がり、落ちてくるジークを迎撃しようと尾を体の前で構えた。

落下と共に振り下ろしたジークの刀とベリウスの尾がぶつかり、火花を散らした。『力』が強くなってもなお、その尻尾は驚くほど堅く、しなやかで、ジークの刀で傷つけることはできなかった。

「ハッ、そういや、一つ聞きたい事があったんだよねあ」
ベリウスが突然口を開いた。

「何だ？」

ジークはベリウスから少し離れた所に着地しつつ聞いた。

「てめえは一体、どうしてスウ・ロ・ヤマなんかを護ってやがんだ？てめえに何のメリットがある？」

ベリウスが尋ねた。

「別に深い理由はない」

少ししてジークは答えた。

「ただ、オレはいつ何時でも自分が本当にしたいと望んだ事をするだけだ。そして今、オレの心はあいつを護ることを望んでいる。メリットなんて、考えたことも無いな」

ジークは淡々といった。

「ハッ、何とも変な奴だなあ！ま、こっちはそのお陰で計画が進んでるんだから、感謝しなきゃなあ！」

ベリウスのその言葉に、ジークは微かに眉をひそめた。オレの存在がやつらの計画を進めさせているとは、一体どういう意味だ？

その時、ベリウスの尾が左から迫ってきた。ジークは一瞬反応出来ず、危うくその攻撃をまともに喰らってしまう所だった。

風を切って音を立てる尾を辛うじて屈んで躲した直後、ジークはここぞとばかりに反撃に出た。

その後はしばらく一進一退の攻防が続いた。どちらも相手に大きな傷を与えることができないまま、時間は過ぎて行った。もともと悪魔として強靱な肉体を持つベリウスはもちろん、『力』を解放しているジークも、常人にはありえないような持久力を持っているため、消耗戦にもならなかった。

数え切れないほど打ちあった末、ジークはベリウスの動きに一瞬の隙を見つけた。ジークはその隙を見逃さなかった。左の刀でベリウスの尾を押さえ付け、右の刀をベリウスの喉元に突き付けた。

「所詮お前の尾は一本。二本の刀を相手にするには分が悪かったな」ジークは言った。しかしそれを聞いた時、ベリウスは何故か不敵に笑んだ。

「ハッ、一本の尾じゃ二本の刀には勝てない。確かにそれは道理かなあ！けどよ…」

ベリウスはそう言ってニヤリと笑った。

「オレの尾が一本だけだなんて、どこの誰が言ったんだあ！？」

その瞬間だった。ベリウスの背後から、さながら首をもたげる蛇のような黒くて太い一本の尻尾が立ち上がった。当然、ジークが押さえ付けているのとは別の物だった。

ジークはすぐさま、振り下ろされた二本目のベリウスの尾を右の刀で受け止めた。

しかし、それで終わりでは無かった。二本目の尾の陰から、三本

目の尾が姿を現したのだ。ジークはこのままではその尾の攻撃は受けきれない事を察し、急いでバックステップで距離をとった。ついさっきまでジークがいた場所の地面に、三本目の尾は深々と突き刺さった。

「お前：」

ジークは言いかけたが、言葉を最後まで発することはできなかった。ジークの背後の地面から、四本目の尾が突き出てきたのだ。恐らくは地面の中を潜行させていたのだろう。

ジークはその尾の攻撃も何とか避け、充分に距離を取ってからベリウスに目をやった。

ベリウスの尾はジークを攻撃していた間も増え続けていたらしく、今は九本にまでなっていた。しかも、一本の尾が分裂して九本になったのではなく、九本の尾それぞれが最初の一本と同じ太さと強靱さを持っていた。

尾の増殖は九本で止まったようだった。九本が最大の本数なのか、それともベリウスが力を出し惜しんでいるのか。ジークは前者であってほしいと願った。

「ハッ、前の時は計画の必要上、本気が出せなかったからなあ！やっとな本来の姿に戻れたぜえ！」

ベリウスは高笑いして言った。その後ろから放射状に伸びた九本の尾が、それに反応するようにのたうっている。

そして、ベリウスは尾の一本をジークに向けて突き出した。もともとの長さなら届かない距離だったが、ベリウスの尾はその動きに併せて一気に数倍の長さに伸びて、ジークを射程圏に捉えた。ジークはその尾を刀で払ったが、すぐに次の一本が迫ってきた。ジークがそれを躲すと、間髪容れずに三本目が目の前に現れた。

ジークはその尾を右の刀で払ったが、その時さっき左の刀で払った一本目の尾が、体勢を建て直して攻撃を仕掛けて来ているのには、反応できなかった。

ジークは何とか多少体を反らせて、直撃を避けることはできたが、

尾はジークの腹に当たり、ジークを吹っ飛ばした。

ジークは空中に高く放り投げられ、十メートルも離れた場所に落ちた。どうにか受け身は取れたが、『力』による保護を通してジークが受けたダメージは相当な物だった。もし『力』によって保護されていなければ、今の攻撃だけで死んでいたかもしれない。なかった。

ベリウスが地面を蹴って距離を詰めてきた。ジークはそれを目の端で捉えた。反撃しなければとすぐに立ち上がったが、体中に痛みが走り、頭が衝撃でクラクラした。立ち続ける事さえ出来ず、ジークは敵の眼前で膝を折った。

「どうやらこれで終わりみてえだなあ！」

ベリウスが言った。

「オレが一度ちよつと本気を出しただけで、ここまで簡単に倒せちゃうとはなあ、結局てめえも、所詮はただの人間って訳だ！」

ベリウスは一度負けたジークに仕返しができた嬉しさと、もう戦いが終わってしまったつまらない感情が入り混じった声で言った。そしてジークの目の前に立ったベリウスは、ジークから反撃する体力を奪うために、尾の一本をジークの脇腹に突き刺した。体を襲った激痛に、ジークは思わず悲鳴をあげた。

「ハッ、そんじゃ、手加減していたとは言え一度オレを負かした事に敬意を表して、苦しまないように一瞬で楽にしてやるとするかあ！」

ベリウスはジークから引き抜いた血塗られた尾を高く掲げ、残酷な笑みを浮かべた。真っ黒な顔に浮かぶ真っ白な口は、半月状に歪んでいた。しかし次の瞬間、ジークの視界は真っ黒い物に覆いつくされた。視界がぼやけているせいで、それが何なのかは分からなかった。

「…ああん？」

その時、奥からベリウスが声を上げるのが聞こえた。

「そんなところに突っ立って、てめえに一体何が出来ると思ってんだ？…スウ・ロ・ヤマ」

ジークはその途端、目の前に広がる黒いものがなんであるかに気がついた。

スウがベリウスとジークの間に、両腕を横に広げて立ちはだかっていた。ジークが見ている黒い物は、背中にかかったスウの髪だった。

「スウ……」

ジークは荒い息の合間に言葉を発した。

「下がってろよ……そいつの言う通りだ……お前がいても、何もできねえだろ」

ジークは目の前のスウに手を延ばしてその場所から退けさせようとしたが、体が動かなかった。

「……ジークさんはそこで休んでて」

スウが有無を言わせぬ毅然とした口調で言った。スウがそんな態度を取るのには、出会ってから初めての事だった。

「お前……」

ジークが反発しようと口を開いた。ジークでさえ敵わない相手に、スウは一体何が出来るというのだ。

「いいから、休んでて」

そう言ってスウは氣遣わしげにジークを振り返ったが、その仕種とは裏腹に、その目は今まで見たことが無いほどに爛爛と輝いていた。それは決意と、ベリウスに対する明らかな怒りの色だった。

スウがこれほどに怒りを顕にするのを、ジークは初めて見た。もしジークが前に考えたように、怒りの感情がスウの正体と関係があるのなら……。

その事をスウに伝える力もなく、ジークはついにその場にくずおれた。強い意思の力のおかげか、辛うじて気を失うことはなかった。

「そこを退きなあ、スウ・ロ・ヤマ」

ベリウスが言った。九本の強靱でしなやかな尾を持つ真っ黒な悪魔のあまりの威圧感に、普段のスウであつたら、真向かうことすら

もできなかっただろう。

しかしこの時は、スウの中に芽生えた圧倒的な怒りの感情に打ち消されたのか、恐怖は微塵も感じなかった。

「…どかない」

スウはそれだけ答えた。自分でも驚くほど、その声は怒りに打ち震えていた。ジークの悲鳴を聞いた瞬間から、自分の大切な人を傷付けた相手へ対する激しい怒りが、灼熱の如く体中を駆け巡っていた。

「これ以上、ジークさんには…指一本、触れさせない!!」

スウの脳裏に何故か、今の自分がするべき事が浮かんた。スウは左手を前に掲げた。そして、怒りの感情の全てをその左手に集中させた。

次の瞬間、ベリウスは何の前触れもなく後ろに大きく吹っ飛ばされた。道の脇にある林に突っ込み、太い木を一つ薙ぎ倒して、二本目の木にめり込んでやっと止まった。

「ぐ…てめえ…」

ベリウスは痛みを堪えながら呟いた。そして体を動かそうとしたが、全く身動きができなかった。それは、真っ黒い巨大な手がベリウスを木に押さえ付けていたからだった。

その手はスウの左の手の平から生えていた。スウは自分のしたことに驚いたが、その感情も怒りに打ち消されて表には出てこなかった。

「クソッ、この小娘が…なめんじゃねえ！」

ベリウスは叫び、九本の尾をスウに向けて構えた。

しかし一瞬にして、その尾は後ろの木々に釘づけにされた。スウから生えた巨大な腕から、九本の腕が枝分かれした枝のように生え、ベリウスの尾の全てを押さえ付けていた。ベリウスは尾を動かそうともがいたが、押さえ付ける腕の余りの握力に、尾は微動だにしなかった。

その様子を見ていたスウは、ふいに左手を握った。するとそれに

併せて、その真っ黒な手も握る力を強めた。その余りに強い握力に、ベリウスはたまらず耳をつんざくような悲鳴を上げた。

「くそがあ、コイツが…兄貴の言ってた…スウ・ロ・ヤマの…真の力…かよ…」

ベリウスは息も絶え絶えに言った。そして雄叫びを上げて、スウから生えた手ではなく、その後ろの木々を薙ぎ倒すことでなんとか束縛から逃げ出した。

ベリウスは体内に残ったエネルギーの全てを使い、高々と跳躍した。真っ黒な腕がどんなに無敵の力を持っていようと、その根源となっているスウは華奢だ。そのスウを倒せば勝てると踏んだのだろう。

しかし、空中で回転するベリウスの尾の一本を、スウから生えた腕が捕まえた。スウはそのまま腕を振り下ろし、ベリウスを地面にたたき付けた。激しい地鳴りと共に、ベリウスは地面にめり込んだ。スウが歩いてベリウスの元に着いた時、ベリウスはほとんど気絶して、口から泡を吹いていた。

「や、やめろ…」

ベリウスは弱々しい声で懇願した。

「…あなたはあたしの大切な人を傷付けた」

スウは表向きは淡々とした調子で言ったが、その声には激しい怒りが籠っていた。

「頼む…許してくれ…」

「…許さない…!」

そう言ってスウは左手を構えた。左手から一瞬にして五本の真っ黒な腕が生え、その内の四本がベリウスの両手両足を地面に押さえ付け、残りの一本がベリウスの喉元に突き付けられた。ベリウスはうめき声をあげたが、もはやもがくほどの気力も残っていないようだった。

「これで…終わり―」

その時背後で微かな声がして、スウは今まさにベリウスの首を搔

き切ろうとしていた手の動きを止めた。

「：スウ：やめろ：」

それはジークの声だった。スウのような尖り耳でなければ、間違はなく聞き逃していたであろう、微かな声だった。

その声を聞いた瞬間、スウは突然正気を取り戻した。怒りに輝いていた紫の瞳は一転、自分のしたことに気付いて、その後悔の涙で潤みはじめた。

「ジーク：さん：あたし：」

その時、ふいにスウの体を激しい疲労が駆け巡り、スウはその場にくずおれて、気を失った。スウの左手から生えていた真っ黒な腕も、同時に黒い霧と化して消滅した。

「ハア、ハア：どうやら、最後は：オレの勝ち、みてえだな：」

その時、ボロボロになったベリウスがよろよろと立ち上がって呟いた。その九本の尾全てが、気絶したスウの喉元に突き付けられる。ジークはなす術もなくその様子を見ていた。

「まずはてめえだ：スウ・ロ・ヤマ：よくもオレをこんなに：しやがったな：」

その時、道の向こうから馬の駆ける音が聞こえた。その音はありえないような速度でこちらへと向かって来た。

次の瞬間、馬の足がベリウスの尾を蹴飛ばし、その馬に乗っていた人間の剣がベリウスに向かって振るわれた。ベリウスは不様に飛び下がって、そのまま後ろを向いて、最後の力を振り絞って逃走した。

騎手は一瞬、ベリウスを追い掛けようとしたが、怪我人の保護が優先事項だと考えた様で、颯爽と馬から飛び降り、スウを介抱しはじめた。

そこまで見た後、ジークはついに力尽きて気を失った。

ジークは目覚めと同時に脇腹の強い痛みに襲われた。体には包帯

が巻かれているのが分かる。ジークは一瞬、今の自分の状況を掴みかねてボーっとしていたが、すぐに事のいきさつを思い出した。そして、痛みを堪えて体を起こす。

そこは、林の中の空き地だった。恐らく、ベリウスと戦った場所からそう離れていないだろう。ジークはそこに寝かされていて、近くにはスウが眠っているのがぼんやりと見えた。その脇では、あの旅装束の騎手が体を屈めて、スウの手当てをしていた。彼が乗っていた鹿毛の馬はその近くに落ち着いた様子で佇んでいた。

「おい、お前……」

ジークが呼び掛けると、その騎手はスウの額に当てていた手をさっと引き、ジークの方を振り返った。それによって、フードで見えなくなっていた顔が顔になる。それは高貴な風格を持つ、端正な顔立ちの青年だった。

「あ、起きましたか、ジーク殿」

青年はジークに話し掛けた。その顔も声も、ジークの知っているものだった。

「誰かと思えばお前か……オレはもう、お前らに付き纏われる理由は無いはずだぜ、アトル」

ジークは言った。

「でも、僕に付き纏われていなければ、今頃あなたは死んでいたでしょうね」

アトルと呼ばれた青年は悪戯っぽくいいかえした。

「そんな事より、何の用事があるってオレ達の後を追ってきた？ お前の事だ、『偶然通り掛かった』なんて下手な嘘はつかないだろ」

ジークはそう言いながら、体を引きずるようにしてスウの元へ行った。スウはまるで死んだようにぐっすりと眠っていた。胸がゆっくりと上下していなければ、本当に死んだのではないかと心配にさえなっただろう。

ジークがそっと触れてみると、スウの手は恐ろしく冷たくなっていた。

「ジーク殿」

アトルがジークの視線を捉えて言った。

「彼女は一体どうなっているのですか？先ほどからいろいろな手当てを試しているのですが、全く反応がありません。それに、この耳は……」

アトルはスウの尖り耳を目で示して言葉を切った。

「……オレにも、分からない」

ジークは憂鬱な気分でスウの顔を覗き込んだ。自分が気を失う直前の出来事が、頭から離れなかった。その瞳に怒りをたぎらせ、圧倒的な力でベリウスを追い詰めて行くスウの姿が脳裏をよぎった。

あの力、真っ黒い巨大な腕を自身の体から生えさせ、その数も大きさも自由に操り、敵を圧倒する。それはまさに、ベリウスの戦い方と同じ種類のものだった。

それは、ついにスウに関する謎の一端が明かされた事を表していた。しかしその答えは、ジークが何よりも恐れていた物だった。

スウは、悪魔だったのだ。それも、あのベリウスですら全く太刀打ち出来ない程に強力な。

しかし、スウは今まで自分が悪魔であることを自覚しているそばりも見せなかった。もしスウが初めからジークを騙そうとしていたのではないなら、スウは事実、自分が悪魔であることを知らなかったのだ。

そして今日、スウに悪魔の力を目覚めさせる原因となったのは、ジークを痛め付けたベリウスに対する『怒り』の感情だったようだ。今までジークがスウに欠如しているのではないかと危ぶんでいた感情、それこそがスウの中の悪魔の部分を引き出す鍵だったのだろう。とにかく、スウが目覚めない限り詳しい事は何も分からない。今から心配しても何も意味がないと、ジークはその苦々しい仮説を頭の隅に追いやった。

「それで、オレの質問に対する答えは？」

ジークは少しでも気を逸らそうとアトルに向かって尋ねた。

「スピルナ大公アルデバラン・アルトの息子ともあろうお前が、どうしてこんな所に居る？」

「あなたと交渉をするためです」

アトルは率直に言った。

「悪魔による被害は今現在も着実に増えています。スピルナには、あなたの力が必要なのです」

それを聞いてジークには、アトルの目的の裏までがすぐに分かった。スピルナは実際にここしばらく悪魔の被害に悩まされているし、アルデバランが悪魔への対抗策として、かつて白銀の獅子と呼ばれた英雄であるジークの力を純粹に必要としていることは確かだろうが、その裏でアルデバランは恐らく、ジークを自分の目の届く所に引き留めておきたいのだ。

どの国家にも縛られない旅人であるリイトは、決して表舞台に立つことはなく、人々の与り知らぬ所で世界の平和を保つことを目的としている。それだけ聞けばリイトに反感を抱くものなどいるはずがないように思えるが、人々の支持を何よりも必要とする為政者にとっては、その存在が邪魔になる事もあるのだ。

だから為政者達はどうにかしてリイトを監視しつつ利用できる立場に立ちたいとあらゆる手を尽くそうとするものなのだ。

「リイトはどの国にも縛られない。お前達の下にはつかないぜ」

ジークはスウの様子を心配そうに見つめながら、慎重に言葉を選ぶように言った。

「それはもちろん、わきまえています。ですから、これは国家とは関係ない、対等な関係としての交渉です」

アトルはまるで答えを用意していたかのように即座に答えた。

「あなたは僕達に悪魔について知っている情報を提供し、スピルナ公国の精鋭部隊であるトランプと共闘する。その報酬として、僕達にできる限りの、あなたの望む物を差し上げましょう」

「つたく、オレも舐められた物だな」

ジークは少し苛ついて答えた。

「オレが金で動くとも思ってるのか？」

「報酬は金に限るとは言っていません」

アトルは言い返した。

「いくらリイトのあなたでも、欲しいものが全くない訳ではないでしょう？」

それを聞いてジークは、ふとスウを見遣った。先ほどから眉一つ動かさず、静か過ぎるほど静かに眠っている。一瞬、このまま一生目覚めないのではないのだろうかと嫌な予感がしたが、そんな事を今考えていても仕方がないとその考えを頭から振り払おうとした。が、思ったようにはいかず、もやもやとした不安が漠然と脳裏に残る。

もしかすると、ジークにとってはスピルナ公国からの報酬など無意味かも知れないが、スウに何かしてやれるのではないかと、ジークは不意に思い付いた。それに、悪魔に対抗するためなら、国の精鋭部隊と共闘するのもやぶさかではない。

「それなら…」

ジークは自分の言葉を吟味しながらゆっくり言った。ジークは、この一見優男のような青年が、実はとてつもなく抜目ない事を知っていた。下手な事を言えば自分が不利になるだけだ。

「…悪いが、その事は後で考えさせてくれないか」

しかし結局、戦いの疲れがとれていないジークには、名案は何ひとつ思い付かなかった。

「もちろん」

アトルは当然というように答えた。

「どうやら僕も、こんな時に言い出すなんて、提案する時期を誤ってしまったようですね。申し訳ありません」

アトルはスウの様子を見て、付け加えた。

「そういうことなら、あなたの心が定まるまで、同行させていただけますか？」

「まあ、そうするしか無いだろうな」

ジークはため息混じりに言った。

「けど、どちらにしてもスウが目覚めない内は下手に動けないな」

「…どうやら、その様ですね」

アトルはスウの様子をちらりと見ながら同意した。

―戦いのあった場所から少し離れた空き地―

「ケケケ、ベリウス。まさか本気で戦ってそこまでボロボロにされた訳じゃないだろうね？」

メトネスはベリウスのやられ様を見て冷やかすように言った。

「冷やかすのはよせ、メトネス。ベリウスでこの有様だ。もしお前が行っていたら、今頃は間違いなく死んで居たのだぞ」

グルナがにらみを効かせてメトネスを戒めた。

「しかし、お前が尾を全て使ってそれだけやられたということは、予想した通り、スウ・ロ・ヤマの力が目覚めたということか？」

グルナの問いに、喋る気力も失せたベリウスはゆっくりと頷いた。

「ケケケ…って事は、今回はオイラ達の計画通りに行ったって訳かい」

メトネスは長い腕を組んで言った。

「そういうことだな。ベリウス、ご苦労だった」

グルナはベリウスにねぎらいの言葉をかけた。少なくとも今はまだ、ベリウスの戦力を失う訳にはいかない。ベリウスがスウ・ロ・ヤマと戦って、無事とは到底言えないまでも命を保って帰ってきた事は好都合だった。

「ふふふ、これで全ての準備は整った」

グルナは満足げな含み笑いと共に言った。

「メトネス、フェレスの兄貴を呼び戻してこい。恐らく今頃は、この国のどこかで街を襲っているはずだ。

いいか、ベリウスが回復したらすぐに、スウ・ロ・ヤマの捕獲を

実行するぞ。今度は、全員でだ」

グルナのその言葉に、ベリウスとメトネスは頷いた。ようやく、今までの冗長な作戦の成果が試される時が来たのだ。そしてその先に有る最大の目的。スウを手中に収められれば、その目的まではあと一歩の所まで近づく事ができるのだ。

だから次の戦いは、絶対に負ける訳には行かない。もしここで負ければ、全てが水泡に帰してしまう恐れさえ有るのだ。普段はいがみ合ってばかりのベリウスとメトネスも、その事は十分承知しているはずだ。

グルナは決意を固めるように拳を強くにぎりしめた。

―街道の脇の林の中の空き地―

スウは、ゆっくりと眠りから醒めた。それと同時に、鈍い頭痛に襲われる。スウは目を開けず、感慨に浸った。気を失う前の事は、鮮明に覚えていた。スウは自分の中に現れた異常といえる程に熱く燃える怒りに任せ、あと少しでベリウスの命を絶つ所だった。もしあの時、ジークが止めていなかったら、どうなっていただろうと思う。そしたらきっと、自分が自分でなくなってしまっていただろうと、どういう訳か予想がついた。

ふと、左手の平に温かいものを感じた。目を開けて見なくても分かる。パテルの街でこの手を引いてくれた、あの強くて優しい手だ。目を閉じた真っ暗闇の中で、唯一それだけが確かな物に思えた。

もしかしたら、眠りについている間ずっとこうして握っていてくれたのかもしれない。まさかとは思いつつも、そんな気がして目から感激の涙が溢れそうになった。

しかし、ジークの手の感触を味わってスウの中に生まれた感情は、必ずしも嬉しさだけでは無かった。

あの事のせいで、きつとジークは自分を恐れるようになるだろう、

とスウは思った。今まで出会った多くの人々と同じように。そうしてきつと、自分はまた一人きりになるのだろうか。

実は、スウにとってあの黒い腕の力《魔之手》を使うのは、今回が初めてではなかった。今なら思い出せる。セル国に住んでいた頃、スウは自分に石を投げ付けてきた相手に対して、怒りに任せて一度この《魔之手》を使ったことがあったのだ。その時から、セル国の人々のスウに対する感情は、生理的嫌悪から恐怖へと様変わりした。スウは自分で自分のしたことに戦き、二度とこんな事はしたくないと心に誓った。それ以来、この力は全く発現することはなくなった。そのお陰か、その出来事はスウは心の中ではただの悪夢だったようにさえ思えるようになっていった。

そして、そんな記憶も次第に薄れて行き、やっと完全に忘れられるかと思っていた。そんな矢先に、《魔之手》の力は復活したのだった。

《魔之手》という名前は、スウが初めてこの力を使った時に自然と脳裏に現れた言葉だった。まさにその名前通り《魔之手》は、敵はもちろんスウ自身まで恐怖のどん底に引きずり落とす性質を持っているようだった。

ジークは優しいから、目を覚ませばきつと表向きには自分に今まで通りに接して、いたわってくれるし、自分の味方であり続けてくれるだろう。しかし、あんな物を見て恐怖を感じない人間など居るはずが無い。どれほどジークが表面に出さなかつと、きつとジークは心の奥底で自分を恐れるようになるのだろう。

スウは目を開くのが怖かった。目を開けば、現実の世界に戻らなければならぬ。いくつもの不安と絶望が待ち構える苦痛に満ちた現実の世界へ。

童話に出てくるお姫様のように、このままずっと眠りつづけていられたらどれほどいいだろうと、スウはふいに思った。ジークに事の全てを任せ、この世の問題の全てをジークが解決した後に、ジークにキスと共に起こしてもらえらなら、どれほどいいだろう。

しかし、そんな事はありませんし、そんなのはただの現実逃避だ。だいたい、ジーク一人を危険な目に併せて自分だけ眠っているなど、スゥにできるはずは無かった。

どんな未来が待ち受けて居るにしろ、それに立ち向かって行かなければならない。どんな形であれジークが自分の味方であってくれる限り、自分はそれに応えて行かなければならない。

そんな決意をして、スゥはゆっくりと、重たい瞼を開いた。

「スゥ…！よかった、目が醒めたんだな」

心から嬉しそうな声を上げるジークの顔が、視界に入ってきた。その純粹に自分を氣遣ってくれているような表情を見た瞬間、どういう訳かスゥには、たった今考えていた懸念などは取るに足らない物で、これからは全ての事が上手く行くように思えて来て、必死に堪えていた涙がどっと溢れ出てきた。

「…お、おいスゥ、なんで泣くんだよ！まったく…」

相変わらずのジークの戸惑いぶりに、スゥは微かに微笑んだ。

第六章「The devil's hands」完

第七章 「闇よりも深い暗闇」

「ね、ところでジークさん」

服の袖で泣き腫らした目を拭いながら、スウは不意に言った。

「この人だれ？」

アトルを指差してそう尋ねる。

「ああ、コイツはな、アトル・アルトつつって、この国で一番のお偉いさんの息子だよ」

ジークはどうでも良さそうに紹介した。

「一番のお偉いさん、とは心外ですね」

そこにアトルが口を挟む。

「今のスピルナ公国は平等主義ですから、父上もただ単に民の代表であるだけで、それ以外は他の国民と何等変わりのない存在です。僕にしたって、アルデバラン公の息子であるからといって偉ぶるつもりなどありません」

「…だそうだ」

熱っぽく言うアトルに、相変わらず面倒臭さげな様子のジーク。

「ふーん」

スウはアトルに一瞥を投げかけると、ジークの方を振り返ってこう言った。

「…ジークさん、お腹減った」

「なんか色々酷い！」

スウが放った意外過ぎる言葉に、思わずアトルが突っ込む。

「まったく、あなたたち二人を助けたのは誰だと思ってるんですか。あの時、もし僕が駆け付けていなければ、あなたたちはとくに命がなかったんで——」

「ふあ、ジークさん、お馬さんがいるよ！」

アトルが乗ってきた鹿毛の馬を見つけて、スウはアトルの言葉を遮って嬉しそうな声を上げる。

「この子、アトルさんのお馬さん？」

「：そうです。僕の愛馬で、名前はフォーマルハウトと言います。尤も、僕は簡単にハウトと呼んでいます。素直で足の速い、良い馬ですよ」

アトルは不本意そうに紹介した。それを聞いてか聞かずか、スウはさっきまでの様子から一変、たっと素早くフォーマルハウトに駆け寄る。ハウトは真っ黒な瞳でスウを見つめると、嫌がるそぶりも見せずに自ら首を下げて、スウが差し出した手に撫でられた。

「初めて会ったばかりなのに、ハウトに警戒されないなんて、驚きですね」

その様子を見ていたアトルが言葉通り驚いた様子で言う。

「ああ、何だか知らないけど、極端な動物好きらしい」

ジークもスウの様子を眺めながら言った。

「それで、今更ですけどこのお嬢さんはどちら様で？」

「あたし、スウ・ロ・ヤマ・イシュラーグ」

アトルの言葉に振り返ったスウは、無意識の内に頭に被った帽子の柔らかい鍔を頭の両側に手で押さえつけて耳を隠しながら自己紹介した。

「一目見た時からまさかとは思っていましたが、『精霊族』の子ですか？」

アトルはスウの様子を観察しながら言った。

「：まあ、そうだな」

アトルはスウの看病をした時にスウの耳を間違はなく見ている。いまさら隠すことなど出来ないし、その必要もない。それでも、この事を人に明かすのは気が引けた。

「ところで、ジーク殿、さっきの話ですが」

とアトルはスウから目を離しつつ、話題を変える。

「改めて、どうです？悪魔との戦いにおいて、我々精鋭部隊トランプの協力が得られるのは、あなたにとっても好都合のはず」

「ああ、そう、そうだったな」

ジークはあくびをしながら言った。

「それで報酬をどうするかだったな。なあ、スウ、なんか欲しいものないか？」

ジークは気のない声でスウに尋ねた。

「うん、あるよ。ジークさんの愛！」

スウはジークが恥ずかしくなるような言葉を当然のように言っている。

「あ、あのなあ、人前でそういう誤解を呼ぶような事を言うもんじゃないぞ……」

ジークはアトルの様子を窺いながら言った。スウに言わせたいように言わせていると、要らぬ誤解を招くことは必至だ。何しろスウがこういう事を言う時は冗談なのか本気なのか分からないから怖い。

「んじゃ、人前じゃなかったら好きだけ言っていいい？」

「いや、そういう意味じゃない……っていうかいつの間にか話がずれてる」

ジークは照れを隠すように頭をかいて、とにかく話を元に戻そうとした。ジークはとりあえず、さっきのジークとアトルの会話を知らないスウに、今の状況―悪魔に関する事でアトルがジークに協力を要請していること、しかし報酬に関して話がまとまっていないこと―を説明した。

「……それじゃあ、おいしいものいっぱい食べたい！」

なんとか話を理解したらしいスウは嬉しそうに提案した。

「だそうだ」

「あ、たったそれだけですか？」

もっと高級な物を要求されると踏んでいたアトルは拍子抜けした声で聞き返す。スピルナ大公の息子であるアトルからして見れば、この国の最高級の食事を用意することもさほど難しくはないのだ。

「安い分には別にいいだろ。ただし、具体的にどう協力するかに関してはオレの意思を優先させてもらう事になると思うが、それで大丈夫か？」

ジークは予防線を張る事を忘れなかった。国家に縛られないリイトとしては、対等な取引とは言え一つの国に深く係わり合うことは禁物だ。それに、スウが実は悪魔かそれに類するものであり、同時に敵の目標であるという情報は、本人の為にも軽々しくあけわたす訳には行かない。

「あなたがリイトである以上、それは仕方ありませんね」

アトルは多少不本意そうな表情を見せつつも、その要求を受諾した。

「それでは、報酬に関してですが」とアトルは続ける。

「ご存知の通り、今から十二日後の五月十日から一週間は、スピルナでは十二年ぶりのクレオスナ祭が行われます。ですから、その時にフェルメ・エトワル城で開催される予定のパーティーにご招待する、というのではどうでしょう。もちろん、スピルナでもトップクラスのシェフの料理が沢山用意されますよ」

「ふわあ、お城でのパーティーだなんて、ロマンチックで面白そうだね、ジークさん！」

スウはフォーマルハウトの首に抱き着きながら感嘆の声を上げた。「ああ、そうだな」

ジークはスウの調子に合わせて曖昧な声で言ったが、心の中では一抹の不安を抱えていた。ジークもスウも、今は純粋にパーティーを楽しむような状況ではない。だからこそ時にはこういうリフレッシュも必要なのだろうが、もしパーティーの途中で悪魔に襲われるような事があれば、大きな被害も出るだろうし、そうでなくても他のパーティーの客に迷惑をかけてしまうことは間違いない。

それに、ジークから見て今のスウは普段に比べてどこか明る過ぎるようにも感じた。あんな事があった直後なのだから、普通なら落ち込んだりふさぎ込んでしまっただけだ。もしかすると、アトルがいるために無理に明るく振る舞っているのではないかとジークは不安に思った。

「そういう事なら、とりえず先ずはゴールテス地方に向かう事になるのか？」

心中の不安を押し隠して、ジークはアトルに尋ねた。

「ごーるてすちほう？ジークさん、それってどこにあるの？」

とスウが口を挟む。

「ゴールテス地方は、この国の最東端にある地方です」とアトルが説明する。

「この国が公国になる前から、ずっとこの国の首都として使われている街、アルスがある地方です。当然、父上の屋敷もスピルナ精鋭部隊であるトランプの本部もここにあるので、ジーク殿の言う通り、まずはそこに行くべきでしょうね」

「ふーん、それじゃあさつきいってたお城っていうのもゴールテス地方にあるの？」

スウが尋ねる。

「ああ、そうだ。スウにしては勘がいいな」とジーク。

「ジークさん、一言よけい」

と膨れっ面をするスウ。

「：それでは、ずっとここにいても仕方ないですし、そろそろ出発した方が良さそうですね」

タイミングを見計らってアトルが提案する。

「ああ、そうだな。行くぞ、スウ」

ジークは地面に置いてあった荷物を拾い、立ち上がりながら、スウに向かって言った。しかしその時、ベリウスの尾に貫かれたジークの脇腹を予想外の強い痛みが襲った。ジークは小さく呻いて、地面に膝をつく。

「ふあ、ジークさん、だいじょうぶ！？」

その様子を見たスウがすぐに駆け寄って来て心配そうな声を出す。「：大丈夫だ」

ジークはそう答えたが、それは明らかな強がりだった。

「一応応急処置はしたのですが、悪魔の攻撃は貫通していましたから、痛むのは当然ですよ。どうやら無理せず、できるだけゆっくり歩いた方が良さそうですね」

「そういえば、アトルさん」

三人と一頭がゴールテス地方に向けて出発して数日がたった頃、スウは後ろで馬を牽きながら歩いているアトルに向かって声をかけた。

「なんですか、お嬢さん？」

アトルが尋ねる。

「アトルさんは、ジークさんとはどういう関係なの？」

「ああ、そのことですか」

アトルは納得したように頷いた。

「スピルナ動乱の事は知っていますね？」

アトルの質問に、スウはこくりと頷いた。

「では、その戦争の時にジーク殿が、戦争に関係ない人々を戦禍から護るために戦っていたことは？」

「知ってる」

とスウは短く答える。

「ジーク殿は果敢に戦っていましたが、ただ軍隊の略奪から人々を護るだけでは、本当の意味での解決にはならない。人々の命を救うには、まず何よりこの戦争自体を終結させなければならない。そう考えたジーク殿は、同じ目的を持っていた僕達アルト家と一時的に手を組み、共に戦争を終わらせるために戦ったのです。それが、僕とジーク殿の関係です」

「ふーん」

スウは左の人差し指の先を自分の小さな顎に当て、半ば考え込むように言った。

「それじゃあ、今のこの国があるのは、ジークさんのおかげなんだ

ね！」

「：別にオレがいなくても、結果は大して変わらなかっただろうよ」
前を歩いていったジークが謙遜するように口を挟む。

「結局、今のスピルナ公国を作り上げた張本人は、他の誰でもなく、
アルデバラン・アルトただ一人だよ」

「それって、たしかアトルさんのお父さんだったよね？」

スウが確認する。

「そうです。立派な方ですよ、父上は」

とアトルが少し誇らしげに言う。

「ですが、ジーク殿の力添えがなければ今ほどうまくいってなかった
だろうという事も、間違いありませんよ。人間に住めるような土
地では、ジーク殿程の強さを持った戦士は、まず生まれませんから」
とアトルは付け足すように言った。

「ふえ？それってどういう意味？」

スウが意表を突かれて聞き返す。

「んじゃ、ジークさんの出身地って、どんな所なの？」

「それは…」

アトルはにわかに口ごもった。そしてジークに気遣わしげな視線
を向ける。ジークは小さくため息をついた。

「そのことは、その内話してやるよ」

ジークは言った。スウは微かに不満そうな顔をしたが、あえてそ
れ以上言及することはしなかった。

「悪いな、スウ」

スウのそんな様子を見て、ジークは心から済まなそうに謝った。

「ううん、だいじょうぶ」

スウはそう言ってほほ笑んだが、無理に笑っていることはジーク
にはすぐに分かった。

「あ、そろそろ次の村が見えてきたようですね」

その時アトルが言った。その言葉通り、街道の遥か先には木造ら
しい家々の影が小さく見えていた。

「ああ、たしか、ロルノ村って村だったか？」

ジークが思い出すように言った。

「多分そうですね。僕は、このあたりの地理に関してはあまり詳しくないのですが」

「前から思ってたけど、ジークさんって物知りだね」

スウは隣を歩くジークの顔を覗き込むようにして言った。

「ん？ ああ、そうかもな」

ジークはどうでも良さそうに言う。

「でも、実際は見た目ほど大した事はないぜ。ただ、リイトとしては地理の知識は必要だからな。それに、こうしていろいろな所を旅してれば、嫌でもある程度の知識はつくさ」

「そっか、そうだよな」

スウは納得したように頷いた。

「あたしは、ずっと山の中にある小屋で暮らしてたから：家には本が沢山あったけど、読み書き出来ないから、読んだこともないし」

「お前の養父は教えてくれなかったのか？」

「うん。あたし自身、読み書きできなくても不便な事もなかったから、教えてもらいたいって思ったこともなかったの」

スウは人差し指を顎に当てて言った。

「文字も知ってると役に立つぜ」

とジークが言った。確かに山奥では文字が読めなくても問題はなにかもしれないが、人の住む街ではそうはいかない。

「それじゃ、今度ジークさんに教えて貰っちゃおうかな」

「ああ、今度な」

とそっけなく答えるジーク。

「ジークさんのめんどくさがり〜」

スウはジークを軽く睨みつけて言った。それをはぐらかすように、村の様子を見ようと歩調を速めたアトルに続いてスタスタと先へ行くジーク。スウは頬を膨らませて後を追った。

「：なんだか、妙ですね」

村にたどり着いた時、アトルが不意に言った。

「ああ：」

ジークも妙に静かな声で返す。

ロルノ村は茶色い木造の家々が建ち並ぶ、ごくごく普通の村だった。そこら中に真っ黒な羽根が不自然な程に多く散らばっている事と、人間が一人もない事を除けば。一目見ただけでも、この陰湿な空気の漂う村に、少なくとも今は人がいないことはすぐに分かった。

道の真ん中には、手押し車が一つ、荷物を載せたまま横に倒れていた。その車輪によって刻まれた轍は車が倒れている場所までほとんどつきりと残っていた。その轍の左右には手押し車を押していた男の物と思われる足跡が刻まれている。そこにもやはり黒い羽根が落ちていた。そしてその足跡は、手押し車のある地点でぱったりと途切れていた。その足跡の持ち主が、そこから立ち去ったような様子ではなかった。

そんな奇妙な状況がそこかしこにあった。不自然な場所に置かれたバスケットや開きかけのドア、道端に転がる鞆に、道の途中で途切れた足跡。番犬を家に繋いでいた物と思われる鎖は、何も繋がずに地面に横たわっていた。そうした事柄どれもが、ある一時まではこの村で人々の普通の生活が営まれていた事を示していた。そしてその次の瞬間にそれが全て奪われた事も。そうした現場の周りには必ずといっていいほどあの黒い羽根が落ちていた。

村の中は、まるで水を打ったかのように物音一つしなかった。スウがその不気味な様子に怯えて、ジークの後ろに隠れるのが分かった。

雰囲気としては、前に目の悪魔であるグルナに見せられた幻覚の中にあった幻の町に似ていた。もしかすると、また悪魔の罠かもしれない、とジークは警戒を強める。

「：ジークさん、ここには、悪魔は一人もないよ」

ジークの様子を見たスウが、今にも消え入りそうな震える声で言った。

「だって、悪魔の気配は聞こえないもの」

「前から気になってたんだが、お前は人の気配を耳で聞けるのか？」

そんな話をしている場合ではないと思いつつも、ジークの理性は好奇心に勝てなかった。

「ふえ、それじゃ、ジークさんには聞こえないの？」

スウは逆に驚いたように聞き返した。それを聞いたジークは、もしスウが生れつきそういう能力を持っていたなら、むしろスウにとってはそれが普通ということになるのだと言うことに気がついた。人間から見れば鳥が空を飛ぶのは奇跡のように見えるが、鳥からすれば人間が空を飛べないことが理解出来ないのと同じだ。

「ああ、普通の人間には聞こえない」

「そうなんだ：」

スウは不安げな声で言った。

「ジーク殿」

その時、アトルが声をかけてきた。

「もしかしてこれは、悪魔の仕業でしょうか？」

「分からない。少なくともオレが今まで戦ってきた悪魔に、こんな能力を使うやつはいなかった：」

ジークはアトルを振り返りもせずに、不安を隠せない様子で言った。そしてたまたま目の前に落ちていた黒い羽根に手を伸ばす。

「その羽根には、触らない方がいいのでは？」

それを見たアトルの意見に、ジークは手を止める。

「：そうだな」

「恐らくは、新手の悪魔の仕業でしょうね」

とアトルは意見を述べる。

「詳しいことは解りませんが、被害があったらしい場所の周りにあったことを見ると、もしかするとこの黒い羽根に触れたせいで、村

人が消えてしまったのかもしれませんがね」

「もし、お前の言う通りなら、そいつは今までの悪魔とは比べ物にならないほど強力な悪魔だな」

ジークは畏怖の籠った声で言った。あの強靱な九本の尾を使うベリウスにさえ、ジークではまったく歯が立たないのに、それよりさらに危険な悪魔が居るといのか。

ベリウスの話では、悪魔にはそれぞれ司る体の部分がある。羽根を使って人を殺すということは、恐らく犯人は『翼』を司る悪魔なのだろう。

その時、近くの家でかすかに物音がした。ジークが振り返ると、一人のやつれた男が家の扉を少しだけ開いて、周りの様子を窺っていた。そしてジークとスウとアトルの姿を見ると、少しの間警戒するように観察していたが、ジーク達が普通の人間らしいと分かると、こちらへ来るようにと手招きした。

「なあ、あんたら：旅人かい？」

ジーク達が近づくと、男は震える声で尋ねた。

「ええ、そうです」

アトルが答える。

「じゃあよ、その辺りで、真っ黒な人影を見なかったか？」

「見てないな」

今度はジークが答える。真っ黒な人影が悪魔を意味していることは、容易に予測がついた。

「そりゃよかった。なら、家んなかに入ってくれ」

男はそう言って扉を開き、ジーク達を家の中に招き入れた。

木造のその家は、どうやら食料品店のようだった。狭い部屋の中には、何人かの男女が座っていた。新たに入ってきた三人の顔を見て、一瞬体を強張らせる者もいたが、ただの旅人であることを説明されると、安堵のため息をついた。しかし、その内の一人はその言葉信用しなかった。

「こいつらがあのバケモンの仲間じゃないと、どうして言える？」

その男は言った。その声も、やはり震えていた。

「もしそうなら、今頃私達はもう死んでるはずじゃないの？でも、そうはなっていないわよ」

と隣に座っていた女が少し棘のある言い方で言う。

「ともかく、まずは話を聞かせてくれないか？」

別の若い男が言った。

「外はどうなってる？あの黒い影はまだいるのか？」

「いえ、僕達は、村では誰も見かけませんでした」とアトルは答えた。

「それで結局、この村で何が起きたんだ？」

ジークは単刀直入に聞く。

「分からねえ……」

若い男は目を伏せて言った。

「三日も前か……あの真っ黒い影が現れて、突然その黒い翼を広げて、真っ黒な羽根を撒き散らしたんだ。すると……その羽根に触れた奴はみんな、でっかい黒い球に包まれて、次の瞬間には跡形もなく消えちまったんだ！」

「そんな中、俺達はなんとかこの店の地下室に逃げ込んで、隠れたんだ。この三日間、奴に見つかることが怖くて、外に出ることも出来なかったんだ」

信用しなかった男が引き継いで言った。

「やはり、僕達が予想した通りでしたね」

アトルはジークに耳打ちした。

「なあ、一体アイツは何だったんだ！？」

若い男が恐怖からか少しヒステリックになった様子で言った。

「あれは、悪魔です」

アトルが言った。

「元々はこの大陸の北の果てに住んでいた種族ですが、最近、その一部がスピルナ公国に入り込んで、人々を襲っているんです」

「あんたら、どうしてそんな事知ってるんだ？」

年配の男が聞いた。

「オレ達は、その悪魔達と戦ってるんだ」

とジークが答えた。

「この村を襲った奴の特徴を教えてくださいませんか？」

ジークは続けて尋ねる。

「真っ黒な姿の少年だ。髪は長くて、耳は尖んがってる。背中からは体の色とおんなじような真っ黒な翼が生えている。それに、目つきが鋭い」

年配の男は言った。

「さっきコイツが言った通り、その翼から羽根を撒き散らし、それに触れた生き物は、消えちゃうんだ。後には何も残らない」

「貴重な情報を、ありがとうございます」

アトルがお礼を言った。

「なんの事はない。それよりあんたら、悪魔と戦ってるってんなら、きっと俺達の仲間の敵を取ってくれよ！それが情報料だ」

年配の男は鋭い目つきでジーク達を見つめ、言った。

「もちろん。きっとご友人の敵は取って見せます」

アトルは真摯な声音で言った。

その後、悪魔がもう村にいない事を確認した村の生き残り達は、持てるだけの荷物を持って、新天地を求めて隣町へと旅立って行った。

「：ジーク殿」

村人達を見送った後、アトルがジークに声をかけた。

「何だ」

ジークは短く聞き返す。

「僕はこの事をすぐにでも父上に報告しなければなりません。あなたは深い傷を負っているし、僕と違って馬も持っていない。そこで、僕は先にアルスに向かい、ジーク殿とは、後からアルスで合流する、

という事でどうでしょう」

「そうするのが最善だろうな」

ジークが答える。

「では、僕はすぐに発ちますが……」

アトルは念を押すように続けた。

「逃げないでくださいよ」

「……ああ」

ジークは少し間を置いてから答えた。それを確認したアトルは、すぐさまフォーマルハウトにまたがり、惨劇の跡が残る道を走らせて行った。

「ジークさん……」

その日の夜、ロルノ村から離れた所に作った夜営地で、さっきからずっととき火ばかりを見つめているジークに向かって、スウは遠慮がちに声をかけた。

「どうした、スウ」

ジークはパチパチと音を立てるたき火から、目を離さずに言った。

「だいじょうぶ？ ジークさん、何だかずっと元気ないよ」

スウはジークを見つめて言った。

「そんな事……ねえよ。心配してくれてありがとな」

ジークは少しほほ笑んでそう言ったが、それが強がりであることは目に見えていた。それを見て、スウの中に生まれたある懸念は、より一層確かな物になった。

本気を出したベリウスの圧倒的な力に負けた事、そのベリウスよりもさらに強いかもしれないという悪魔の出現、そして何よりスウが悪魔であったという事実。この数日に起こったいくつもの辛い現実が、ジークを苦しめている事はスウにも分かった。

聞いた話によると、ジークは今まで、己の力を信じて、人々を護るために戦ってきたのだという。そして事実、数え切れない数の人々の命を救ってきた。それが今、現在のジークの力ではどうしよう

もないような状態になりつつあるのだ。羽根に触れさせるだけで人間を消せるかもしれないような敵から、所詮生身の人間であるジークがどうやって人々を護ることが出来るだろうか。

そんな数々のプレッシャーに、今のジークは押し潰されそうになっているのだ。そして、何よりも問題なのは、ジークが無理だと分かっているにもかかわらず、それらの重荷を一人で背負おうとしていることだった。

スウが見たかぎりであれば、ジークはどうやら、責任感が人一倍強い性格のようだった。特に自分の事に関しては、誰にも相談さえする事なく、自分一人で背負おうとしている。その上に、他人の事まで護ろうとしているのだ。

スウは、四年前、ジークがスピルナの地を踏む以前の事は、ほとんど聞いたことがない。知っている事はただ一つ、レイアークでカレハから教えてもらった、ジークの出身はガブル平原であると言う情報だけだ。

スウは、スピルナの西に広がるガブル平原がどんな場所かはまったく知らない。カレハも、その事は知らない方がいいと言って、教えてくれなかった。

ただ、一つ分かっているのは、そのガブル平原での経験が、現在のジークの人格の形成に重大な役割をになっていたという事だ。きっとそれゆえ、ジークはガブル平原の事を話したがないのだ。

だから、スウにはジークの本心がまったく分からなかった。ジークがどうしてこれほど他人を護ろうとするのか、その理由が分からないのだ。

しかし確かなのは、ジークがどれほど強い精神力の持ち主であるにせよ、今のよう不安とプレッシャーを抱え込んでいては、いずれジークの心はくじけてしまうだろうという事だ。

スウにとって、そんな状態のジークが少しでも自分を頼って、相談してくれないことが不満で、寂しくもあったが、それよりもスウの心を強く締め付けているのは、ジークの感じているいくつものプ

レッシュャーの内の、ほとんどの原因となっているのが、他でもないスウ自身だということだった。

悪魔たちはジークではなくスウを狙っている。本当はそんな事は、とっくの昔に気がついていた。今までジークに拒絶される事が怖くて、ついに言い出せなかったが、スウには以前から自分が《魔之手》の力を持っているという自覚があった。自分の瞳の色や尖った耳が、自分が異形の者であることを示していることも、自覚していた。そして、パテルで初めてメトネスに出会った時、メトネスが自分の事を『疫病神』と呼んでいた事も、幻の町でメトネスが自分の名前を呼んだ事も、当然聞き逃してはいなかった。

自分のせいで、ジークは悪魔と戦う羽目になった。自分のせいで、ジークはいくつもの傷を負った。その中でも特に大きかった二つの傷は、今も自分には見えない所でジークに苦痛を与えているだろう。そして今度は、悪魔の一人であるという自分自身の存在が、ジークの悩みの種になっている。

スウはキリキリと胸が締め付けられるように痛むのを感じた。全部自分のせいだ。もし自分がいなければ、少なくともジークは今ほどの痛みにも、苦悩にも襲われなかったはずだ。ジークがこんな自分を受け入れてくれる心優しい人間であるという事を思えば思うほど、それを苦しめる原因となっている自分への憎たらしさが込み上げてきた。

あたしは悪魔だ、とスウは思った。悪魔はどんな形であろうと人の役に立つことなど出来ない。人を助けたり、守ったりする事など出来はしない。悪魔にできるのは、人を傷付け、苦しませる事だけなのだ。それが現実だ。

ならば、ジークの為にもし自分にできることがあるとすれば、それは一つしかない。その答えは、すでにスウには分かっていた。

ただ、それはスウにとって最も辛い選択だった。決断を迫られたスウは、汗の滲む両手を、胸に満ちた不安を押し隠すように胸に当てた。

ジークが寝入ってしばらく経ち、スウはジークに気づかれないように静かに毛布から抜け出した。

次の日の朝、夜明けとともにジークが目覚めると、スウが包まっていたはずの毛布は空だった。

ジークは始め、スウは体を洗うために川にでも行ったのだろうと思った。そこで地面にあった毛布に触れてみると、それは冷たかった。つまり、スウがこの毛布から出てから、それなりの時間が経っていると言うことだ。しかし、その頃はまだ夜は明けていなかったはずだ。まだ日も昇らない内に川になど行くはずはない。そこにきてジークは初めて、この状況が何かおかしいと思いはじめた。

ジークは上体を起こし、辺りを見渡した。木々が一面に生い茂っている林のどこにも、スウの姿はなかった。念のためスウの名を呼んでもみたが、返答は無かった。

漠然とした不安を感じ始めながら、ジークは脇腹の痛みを堪えて起き上がった。なにしろ、あのベリウスの強靱な尾に貫かれたのだ。もしあの時すぐにアトルに手当をしてもらっていなかったら、とくに自分は死んでいただろう。アトルやスウの手前、旅をしていた間は必死に堪えていたが、この傷の痛みはレイアークで受けた物とは比べ物にならないかった。

それでもなんとか立ち上がると、ジークは周囲の地面を調べはじめた。そしてほどなく、スウが立ち去った時の物と思われる、スウのサンダルの子跡を発見した。その子跡は、ジーク達の進行方向に向かって左、つまり川のある北の方角に続いていた。

ジークがその子跡を辿って行くと、当然ながら川辺にでた。川の幅は3メートル程で、ちょうど浅瀬なのか川底は浅く、50センチくらいだった。

スウの子跡は、川の前で途切れていた。反対側の岸をざっと見回したが、子跡らしき物はない。

いくらスウでもこんな浅い川で溺れたりするはずはない。だとすれば、スウは意図的にこの川を渡ったと考えるしかない。川を通れば足跡が途切れて追跡はできなくなる。スウの考えにしては上出来だ。尤も、今は感心している場合ではない。

ふとジークは、エスル村での出来事を思い出した。あの時もスウは、どういう訳か何も言わずにレインディア亭を抜け出して、物置に隠れていた。幻の町での事といい、まったく、どうしてスウはこうもすぐに居なくなるのだろうか。ジークはため息をついた。相変わらず、スウの考える事はどうしても理解できない。

しかしそれはともかく、今は早くスウを見つけ出さなければならぬ。もしもスウが悪魔の手に落ちたらと考えると、ジークは底知れぬ恐怖に襲われた。それはスウの持つ絶大な力が敵の手に渡るからという理由などではもちろんなく、純粹にスウ自身の身を案じるからだった。

しかし、川で足跡が途切れてしまった今、どうやってスウを見つければいいのだろうか。スウのように気配を『聞く』事さえ出来れば、とジークは思った。そうすれば、すぐにでもスウを見つけられるのに。

ジークが途方に暮れていると、不意に近くの木の上でガサガサと音がした。

「あの小娘のこと探してんなら、さっき川のここから三百メートルほど下流で見かけたぜ」

その木から声がした。

ジークが振り返ると、ちょうど茶色い毛に包まれたイタチが、スルスルと木を降りて来ている所だった。その首には、鮮やかな緑色の宝石がぶら下がっている。

「リゲル、こんな所で一体何してる」

ジークはその喋るイタチ・リゲルに尋ねた。ジークとしてはすぐにでもスウの捜索に行きたいところだが、わざわざリゲルが来たかには、何か重大な連絡があるに違いなかった。

「ジーク、テグレスからお前に言づてを預かってる。手短に話すぜ」
そう言いながら、リゲルは地面を走ってジークの元にたどり着き、
素早い動きでその肩の上まで登っていった。そしてリゲルが言った
言葉は、ジークにとって嬉しくない物だった。

「…あの紫の眼の娘には関わるなってよ、テグレスが」

その思いがけない言葉に、ジークは眉をひそめた。

「なんでだよ」

言伝を預かったただけのリゲルには何の罪も無いことは分かっているが、苛立ちのせいでつい突っ掛かるような口調になってしまう。

「いいか、良く聞け…あの娘は悪魔の一員だ。それも、やつらの中でもかなり強い部類に入るらしい」

「知ってる」

リゲルの説明に、ジークは即答した。

「知ってる！？それならなんで、敵の悪魔なんかを連れ歩いてんだ？」

リゲルが驚いた声で聞く。

「確かに悪魔だが、あいつは他の悪魔とは何かが違うんだ。例えば、
ふつう悪魔の体の色は黒だが、あいつはむしろ普通の人間から見ても
白い方だ。それに、煙になって消えるような能力も無いし…なんて
いうか、人間に『近い』んだよ、あいつは。それに、悪魔はどう
やらスゥを狙ってこの国に来たらしい。だったら、スゥを手放すっ
てことは、やつらの目的を達成させちゃうって事だろ？」

「でも、そうする事で悪魔達が用を済ませて、この国から出て行っ
てくれるなら、その方が良いと思わないか？」

とりゲルが素早く反論する。そこで負けじとジークも言い返す。
「悪魔達の目的が、スゥの力を使ってより多くの人間を襲うことか
もしれないだろ。いずれにせよ、悪魔の考えることなんて、人間に
は分からないだろ」

「オレは人間じゃなくてイタチだけだな」

「…そこは別に問題じゃないだろ」

ジークは呆れた声で言った。

「そういう事だからとにかく、スウの件はオレに任せてくれって、テグレスに伝えてくれ」

「で、でもよお…」

リゲルはにわかに着かない様子になった。

「あのテグレスが関わるなって言ってるんだぜ。素直に従っておいの方が良いと思うぜ？」

確かに、リゲルの言っていることは、ジークにも分からなくはなかった。テグレスは、長い間龍の住まう山脈に住み着き、神々の言葉に耳を傾け、世の理を見通してきた預言者だ。そのテグレスが、なんの根拠もなしにこんな事を言う訳はない。

「それは、分かってるけど…」

ジークは尻すぼみに言った。突然、自分が分からなくなった。『分かってるけど』なんだ？とジークは自問した。どうしてオレは、こんなにも必死になってスウの事を護ろうとするのだろうか？もしかしたら、本当にただの敵かもしれないスウを？

いや、そんな事は初めから分かっていたはずだ、とジークは自分でも驚くほどすぐに自答した。最初にスウの眼を見た時から、すでに分かっていたはずだ。ただ、その事に自分自身、気づいていなかっただけなのだ。

「スウは…初めて会った時のスウの眼は、昔のオレに良く似てた。だから、どういう訳だかほっとけなくなっちゃったんだ」

拳を握り、俯いてジークは言った。

「…カレハが、オレを救ってくれたみたいに、オレもスウを救ってやりたい、って思ったんだよ」

「そうか、そう言えばお前も昔はイロイロあったんだっただ…」

リゲルも思い出すように言った。

「だから、テグレスには口出しするなって言っとけよ」

言うが早いジークは、スウを探すために下流に向かってさっさと走って行ってしまった。突然の事に、リゲルは地面に振り落とさ

れてしまう。

「おいおい、それを伝えるオレの立場にも……」

一匹取り残されたリゲルは独りごちたが、どうせ説得しても無駄だと分かると観念して、再び木に登って姿を消した。

スウはパシャパシャと音を立てて、川からはい上がった。先ほど、リゲルが近くの木の上を走っていく音がしたのを、スウは聞き逃してはいなかった。いずれ、自分の居場所はジークに知られてしまうだろう。

その気になれば、居場所をジークに明かされないようにするため、リゲルを捕まえておく事も出来ただろう。しかし、スウはそうはしなかった。恐らく、心のどこかでジークに捜しに来てほしいと思っているのだろう、とスウは考えた。

だいたい、見つけてほしい位ならそもそもどうして逃げ出しなどしたのだろう、とスウは自問した。スウは昔から、時々変に感情的な行動に走ることがよくあった。後から自分でも訳の分からない事をする事があったのだ。

少なくとも昨日の夜、独りで悩んだ時には、悪魔の標的である自分が、こうしてジークから離れることが、ジークの為に自分ができる最も正しい行動だと信じていた。しかし夜が明け、今になってみると、どうして自分がこんな事をしているのか、分からなくなってしまった。

この前に自分の中に突然顕れた怒りの感情といい、スウは自分の中にもう一つの『何か』がいるように思えてならなかった。それは普段はスウの『怒り』と共に奥底に眠っていて、何かのきっかけで目覚め、そしてスウを駆り立てる。

きっとその『何か』がスウの悪魔たる所以なのだと、スウは予想していた。自分が怒りに駆られた時、同時にそれは眠りから覚め、そして『魔之手』の力を発動する。そして『魔之手』はスウの怒りを暴走させ、手当たり次第にあらゆる物を破壊する――。

このままでは、いずれ自分もジークをも傷つけてしまうだろう。スウが何よりも恐れているのはそこだった。悪魔の力は、破壊以外の物を生み出すことはないのだから。

だから、どちらにしろ、スウはジークの傍に居るべきではないのだ。ジークの事を心から慕っているからこそ、彼を傷つけるようなことなど絶対にしたくない。

そんなことは分かっているはずなのに、心のどこかでは今もジークに捜しに来てほしい、見つけてほしいと望むわがままな自分がいるのだった。エスル村でレインディア亭から逃げ出した時と、それは似たような感情だった。

自分は今まで、ずっと周りの人々からひどい扱いを受けてきた。人々から迫害され、虐められ、傷つけられて生きてきた。ただ一人自分の事を認めてくれたシルートも、もうこの世にはいない。なにもかもを失ったスウにとって、残された唯一の光、それがジークの存在だった。どういう訳か、ジークと出会って以来、昔ほど人々に嫌われなくなっているようにさえ思える。

スウにとって、そんなジークから自分を切り離すことなど、到底堪えられる事ではなかった。この十二年間、あれだけひもじい人生を送ってきた自分が、どうしてやっと手に入れたささやかな幸せまでも手放さなければならぬのだらうと思う自分がいた。その自身自身の幸福に対するささやかな欲求は、ジークの為には自分は居なくなつた方がいいのだという理性と葛藤し、スウの心を引き裂こうとしていた。

どうしていいか分からずに内心悶えていると、スウは不意に息苦しくなつて、ぎゅっと胸に両手を当てて、雑草の生い茂った柔らかな地面に膝をついた。

（…そんなに苦しいなら、全部、捨ててしまえばいい…感情も、理性も…）

その時、スウの中の『何か』が言った。

（そうすれば、もう何にも傷つくことはなくなる…）

（あなたは一体、何なの？）

スウは心の中でその『何か』に尋ねた。

（…あなたは、初めから知ってるはず…）

『何か』は淋しげな声で言った。

（ふえ、あたしが、知ってる…？）

スウは戸惑った。

（じゃあやっぱり、あなたは…あたしの、『悪魔の力』…？）

（そうであるとも言えるし、そうでないとも言える）

『何か』はややこしい答え方をした。

（もし、あえて名乗るのなら…あたしは、ヤマ）

（ヤマ…）

スウはその名を繰り返した。スウ・ロ・ヤマという名前の意味は、『夜空の星』。『スウ』が星の意、『ロ』は接続詞で、『ヤマ』が夜空と言う意味だと、養父は言っていた。自分が光を司る『星』であるなら、自分の中にあるこの『何か』は闇を司る『夜空』に値する存在だということなのか。

（そう、あたしはあなたの闇の部分）

ヤマはスウの考えを読んだかのように言った。いや、そもそもヤマはスウの心の中に居る存在なのだから、事実そうしているのだろう。

（あたしたちは、かつては一つだった。でも、今はそうじゃない）

ヤマは続けて言った。

（あなたは人の心の要素である喜怒哀楽の内の『喜』と『哀』だけを持ち、あたしは『怒』と『楽』だけを持って、あたしたちは二つに別れてしまった。そして、あたしは表の人格であるあなたが、あたしの持つ感情である怒りを感じた時に、あたしは初めてあなたの心の奥底の牢獄から解放され、その力を顕すことができる。

だからあなたが怒りにその身を委ねれば、この体はあたしの意のままになる。そうすれば、あなたはこれ以上傷つくことはなくなる。

だからあなたは、ただ『怒り』に身を任せればいい。そうすれば――」
「おい、スウ！」

その時、遠くでジークの声がした。それと同時に、スウの中からヤマの気配が一瞬にして消えた。まるで、初めから何もなかったかのように。まるで、ヤマがジークを恐れて逃げ出したようだった。

「ジーク、さん……」

スウは立ち上がってジークの声に答えようとしたが、急に目眩を感じてその場にへたりこんでしまった。頭の中もこんがらがって、混乱していた。一体自分が今まで何をしてたのかさえ、はっきりと分からないほどだった。

ただ、そんな中で二つだけはっきりしている物があった。それは自分の中にある底知れぬ不安と、自分の耳に響くジークの声だった。

七章「Darker Than Darkness」

第八章 「守護者と破壊者」

「おい、スウ、大丈夫か!？」

ジークは走っていった、その場に倒れ込みそうになったスウの体を受け止めた。

「ジークさん、あたし…」

スウはジークを迷いを宿した眼で見つめた。

「つたく、どうしてお前はいつもいつも、黙っていなくなるんだよ」
ジークはスウの言葉を遮って言った。その声にどこか怒りが籠っている事に、スウは驚いた。だが、言うべきことは言わなければならぬ。そう決心して、スウは深く呼吸して混乱している心を鎮めようとした。

「ごめんなさい、ジークさん…」

スウはそう切り出す自分の声が震えていることに気がついた。

「あたし、これ以上…ジークさんと一緒にはいられないの…」

ジークはその言葉に眉をひそめた。スウが言いたいことは大体想像がついたが、あえてジークは尋ねた。

「…どうしてだ？」

「だって、あたしは悪魔だもん…」

スウは悲しそうな声で言った。

「ジークさんだって、見たでしょ、あたしの力。これ以上一緒にいたら、そのうちきつと、あの力が暴走して、ジークさんの事を傷つけちゃうことになるかもしれない…だから、そうなっちゃう前に…」
「そうなる前に、お前がオレの前からいなくなったとして、それで何が解決する?」

ジークは毅然とした声で言った。

「もしそれが元でお前が悪魔に捕まりでもしたらどうする? オレの予測じゃ、あいつらの目的はお前が持つてるその力だ。もしそれがあいつらの手に渡って、悪魔がさらに強大な力を手に入れたら、お

前はどう責任とるつもりだ？」

「…それは…」

スウは言い返すことも出来ずにもごもと言った。

「それにだ」

ジークは続けざまに言う。

「お前がいなくなったとして、それでオレが安全になると本当に思うのか？」

「ふえ、どういう意味…？」

スウはジークの言葉の意味が分からずに聞き返した。

「オレはリイトだ」

ジークは答えた。

「リイトは表向きじゃ旅人どうしが助け合うための集団って事になってるけど、実はそれはただのカムフラージュなんだよ。リイトの本来の目的は、どの国家にも属せずに、中立な立場で平和を護ることだ。だから、お前が居ようと居まいと、オレは結局悪魔とは戦うことになる。その時に、お前がどっちに居た方がいいかなんて分かりきってるだろ」

「でも…」

スウはまだ納得がいけないというような声を出した。

「もし、あたしの力が暴走したら…？」

それがスウの一番の懸念だった。

「お前の力が表に出てくるのは、お前が強い怒りに駆られた時だ。だったら、そうならないように気をつければいいだろ」

「それはそうだけど…」

「なあ、これ以上何の問題があるって言うんだよ」
ジークは言った。

「気になることがあるなら何でも言ってみろよ。自分一人で思い詰めて、勝手に逃げ出したって、互いにとって意味ないし、辛いだけだろ」

「あたしは…」

スウは眼を伏せて言った。

「ジークさんとか、他の人が何を言ってくれたって、あたしが悪魔だっていう事実は変わらない…今はまだ良くて、これから一体自分がどうなるのか分からない…あたしは、それが怖い」

スウは、心の奥底に渦巻く恐怖と不安を少しでも抑えようとするかのように、自分の肩を抱いた。

「きっと、ジークさんには解らないよね…まるで自分が、少しずつ、自分じゃない別の何かに変わってってしまうような不安…まるで魂の真ん中から、じわじわと真っ黒に染まって行ってしまうような恐怖…もしかしたら明日には、もう自我を無くして、ただの殺戮者になるかもしれないような人の気持ちなんて」

「おい、スウ…」

一体どうしたんだ、と言いかけて、ジークは不意に言葉を切った。腕の中のスウの身体が、まるで雪山の真っ只中に取り残された子供みたいにぶるぶると震えていることに気がついたからだだった。ジークは、そんなスウに何もしてやれない自分に異様に腹が立った。

「あたし、怖い…あたしの真ん中に、何かがいるの…初めは、ほんの少し感じるだけだった…でも、それがだんだんあたしの中で大きくなっていった…それが、少しずつ、あたしの心に、魔の手を延ばしてくるの…」

スウは己の肩を抱く力を、血が滲むほどに強めた。それでも、震えが収まる気配はない。俯いた目は虚ろになり、もはや外の世界を見てはいなかった。スウのあらゆる神経は、己の内なる恐怖に怯えるあまり、外界の事などには構っていないようだった。

その時になってやっとジークには、スウが考えていたことがはっきりわかった。スウは、自分が少しずつ悪魔に近づいて行っていることを知っていて、ジークの身の安全の為にジークから離れようとした。

もし、この事を知っていたら、本人がどう言おうと自分はスウを離したりはしないだろう、とジークは思った。その事はスウにも分

かっついていて、それゆえ何も言わずにいなくなろうとしたのだ。

「：怖いよお：ジークさん：」

スウは体を丸めた姿勢のまま言った。

「怖い：助けて：」

その言葉を聞いた時、ジークにはもうそれを見ているだけで居ることなど出来なかった。

ジークは生まれて初めて、自分から他の人間を抱きしめた。自分の肩を抱くスウの腕の上から、スウを強く抱きしめたのだ。どうしてそんな事をしたのか、ジークには分からなかった。考えるよりも前に、体が勝手に動いていたのだ。

「大丈夫だ、スウ」

ジークは、相変わらずぶるぶると震えるスウの耳元に向かって言った。

「―オレが絶対に、お前を護ってやるから」

その時だった。

突然、ジークの体が煌めき出した。

それは、ベリウスと戦った時に顕れたのと同じ、ジークの『力』だった。恐らく、スウを護る、というジークの強い意志に反応したのだろう。

しかしその煌めきは、戦いの時のものよりもずっとずっと優しく、暖かい光だった。その光は、ジークの体から離れると、まるで雪の結晶のような形になって、スウの上に降り注いだ。

すると、ふいにスウの身体の震えが止まった。腕からは力が抜け、肩を掴んでいた手はリラックスしてだらりと垂れ下がった。瞳には生気が還り、透き通るような輝きを取り戻していった。まるで光の結晶が、スウの中の恐怖と不安のすべてを、一瞬で取り除いてしまったかのようにだった。

やがてジークの煌めきが消え去った時、どこか疲れた表情と、己

の血が滲んだ指先を除けば、さっきまでのスウの豹変ぶりを示す証拠は何一つなかった。

ジークには、一体何が起きているのかまったく分からなかった。というより、何が起こったかなど今のジークにはどうでもよかった。今のジークには、スウの事以外何も考えられなかった。

小柄なスウの身体が、ジークに寄り掛かってきた。突然の事に驚いてジークを見ると、スウは安心しきった表情で目を閉じていた。その目からは、大粒の涙が流れ出ていた。

スウの身体の感触に緊張しながらも、ジークはぎこちなくその身体を受け止めた。スウは頭をジークの胸に持たせかけた。

しかし、しばらくするとジークもだんだん恥ずかしくなって、スウを引き離そうとしてみたが、スウは動かなかった。

見ると、スウは寝息を立てていた。

「：って、人にもたれ掛かったまま寝るやつがあるか、アホ！」
そんなジークの怒号にも、スウはまったく目覚める様子ではなかった。

「ふああ、おはよ、ジークさん」

しばらく経って草の上に寝かされていたスウはやっと目覚めた。いつも通りのおっとりしたその表情に、恐怖に打ち震えていたさっきのスウの面影はない。

「スウ：大丈夫なのか？」

ジークは驚き半分、安心半分で尋ねた。

「うん：なんだか、あの光の結晶をみてたら、あたしの悩み事なんて、どうにでもなりそうに思ったの。不思議な事だけど、まるであの光があたしから不安とかをぜんぶ吸い取ってくれたみたいにな：それに、あたしの中の『ヤマ』も、なんだかすごく落ち着いてくれたみたいだし」

「ヤマってなんだ？」

ジークは訳が分からず聞き返した。

「あたしの『悪魔の力』のこと」

スウは答えた。

「そうか…」

ジークは考え込むように言った。

「ね、ジークさん」

スウはジークの方に身を乗り出して言った。いきなりの事にジークは反射的に後ずさる。

「な、なんだよ」

「さっきのあれもやっぱり、ジークさんの『力』の一部なのかなあ？」

「分からない」

ジークは答えた。実際、ジーク自身も戸惑っていた。今までの『力』は戦うための物だとばかり思っていた。ところが、今度は戦闘などとはまったく関係のない場面で、その力を発揮した。どうやら、あの『力』は戦うための力ではないようだ。

「そんな事より、お前は本当に大丈夫なのか？」

ジークは心配そうに尋ねる。さっきのスウの有様を見ていたジークにしてみれば、今こうしてスウが何事もなかったかのように話すのは不自然なようにさえ見えた。

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

スウははっきりと答える。しかし、それでもジークが納得いかなかっただったので、続けて言った。

「あんね、ジークさん：あたし、一つ気づいたことがあるの」

「気づいたこと？」

スウの調子がいつもよりやたらはきはきしているので多少気圧されつつジークは聞いた。もしかしたらあの光の効果が効き過ぎたのかもしれない、とジークは思った。

「前にあたしが、『魔之手』を使ったとき、ジークさんが呼び止めてくれたから、あたしは自分を抑えられた。でしょ？」

「お前がそう言うんなら、そうなんだろうな」

ジークは答えた。実際に『魔之手』を使ったことがある訳ではないジークにとっては、何とも言い難いことだ。

「それでね、今日あたしがジークさんの所から逃げ出した時、あたしの中でヤマの存在が一気に大きくなったように感じたの。たぶんあのままだったら、あたしの心はヤマに乗っ取られてた。でも、そこにジークさんが来てくれたから、そうならないで済んだの」

「!…なるほど、もしそれが本当なら…」

そこまできてジークはスウの言わんとするところが分かった。

「オレの存在と、オレの持ってる『力』が、ヤマを抑えてるってことか？」

「あたしは、そう思う」

スウは言った。

「それに、あたしも最近になって気がついたんだけど、なんだか、ジークさんと出会ってから、昔ほど周りの人に嫌われなくなってるの。だから、たぶんそれも関係があると思うの」

今まで謎に満ちていた様々なことが、少しずつだが一つに繋がりつつあった。もっとも、まだ分からないことは多すぎるから、あまり決め付ける訳にも行かないが、それでもただ一つ、浮かび上がってくる事実があった。

「なんつーか、こうしてみるとオレとお前の出会いって、偶然とは思えないな」

ジークは何気なくそう口にした。生まれてこのかた運命など信じたことはなかったが、今回ばかりはそれくらいしか説明する方法がなかった。

「それで、」

ジークはふと、聞き忘れていたことがあったのを思い出した。

「結局お前は、これからも一緒に来てくれるのか？」

スウはその質問に一瞬ぱかんとしていたが、すぐにその意味が分かったように微笑んだ。

「ジークさんが、来てほしいって言ってくれるんだったら」

「え、オレは、別に…」

予想外な反撃に、ジークはしどろもどろになる。

「だ、だから、お前の好きにすりゃいいだろ、ったく」

「ちゃんとやってくれないきゃだめ！」

スウは意地悪く詰め寄る。

「なんでだよ!？」

ジークはたじたじして言った。

「理由なんかどーでもいいーじゃん！」

スウは言った。

「ジークさんもオトコだったら、はっきり言ってよ」

「……」

ジークはばつが悪そうに頭を掻いた。

「…わ、わかったよ、ったく」

ジークは半ば時間稼ぎに言った。とはいえ、スウは変なところが頑固なので、言い出したら止まらない。どちらにしろ、最後には言うしかないのだ、とジークは覚った。

「スウ、その…た、頼むから、これからも、オレと一緒に来てくれ」「うん!」

スウの妙に満足した顔に、ジークは余計に恥ずかしくなって赤面した。

まったく、スウという存在は、相変わらず訳が分からない。

―数日後 ゾド山脈・緑龍峠―

現在、世界で最も標高が高い山脈であるゾド山脈。その一角にある緑に覆われた峠。その中にあるとある空き地のような所に、一人の白髪の老婆が座っていた。その両脇には松明が燃やされ、老婆の姿を赤く照らし出していた。辺りの森は静けさに包まれ、動物の足

音一つ聞こえない。

そんな静寂の世界の中心で、老婆はまるで自身がその静寂の一部と化しているかのように、物音一つ立てずに黙想していた。

この老婆こそ、ジークも属する『リイト』の指導者であり預言者でもある女性、テグレスだった。

その時、彼女を取り巻く完璧な静寂を唯一乱す音が入ってきた。テグレスからみて左の木々が揺れたかと思うと、その木から一匹のイタチが飛び降りてきた。テグレスはゆっくりと振り返ってじぶんの傍で立ち止まったそのイタチを見た。

「なあ、テグレス」

仕事を終えて帰ってきたリゲルが、そのテグレスに向かって言った。

「ジークは例の要求を拒否したぜ」

「そうかの」

テグレスは抑揚のない声で短く返した。

「なんだ、意外と驚いてないみたいだな」

リゲルはテグレスの様子を訝しんで言った。自分が出した命令が拒否されたというのに、まるでそうなることが始めから分かっていたかのような反応だった。

「もしかして、こうなる事が始めから分かってたのか？」

そこでリゲルは尋ねた。どうにも、この預言者の考えることはまったく理解できない。尤も、それがさらに彼女の預言者らしさを強調しているのだが。

「いや、分かっていた訳ではない」

テグレスは答えた。

「ただ、そうなることを望んではいた、と言ったところかの」

「預言者なら、どんな事でも見通せるんじゃないのか？」

リゲルが聞く。

「どうやらお主は、『預言』の能力を履き違えとる様じゃな」
テグレスは言った。

「お主が今言った『何でも見通せる能力』とは予言の事じゃろう。しかし、わしの持つ『預言』の能力は、それとはまったく違ったものじゃ」

「じゃ、一体どんな能力なんだ？」

リゲルは首をかしげる。

「預言者、とは『神の言葉を預かる者』という意味じゃ。預言者は神に仕え、その神の言葉、いわゆる天啓を預かり、伝えるのが仕事なのじゃよ」

「ってことは、その神様が教えてくれること以外は何も分からないってことか？」

「簡単に言えば、そういうことじゃ」

テグレスは言った。

「だから、なんだか知らないがあんたがジークに関して頭ん中で予想したことも、オレを使って確かめない内は、はっきりとは分からなかったと？」

リゲルは少し考え込んでから聞いた。

「その通りじゃよ」

「で、結局そのことで何が分かったんだ？」

リゲルは話している内にだんだんともどかしくなってきた。いつもこっちが一番知りたい情報を隠してくる、この気難しい婆さんを相手にするのは、いつも肩が凝る。

「わしが長いこと待ち望んだことが、ついに果たされる時が来たということじゃよ」

そんなリゲルの心情を知ってか知らずか、なおもテグレスは核心を避けるように答えた。

「…そうかいそうかい」

リゲルはついに諦めたような声で言った。

「忠実で信頼のできる伝令役に教えてやることは何一つないって訳かい！」

「そうじゃ」

テグレスはごく当たり前のように言った。

「：ひでえな」

余りに冷たいテグレスの態度に、リゲルは怨みがましい声で言った。

「そんな事より、リゲル、クレオスナ祭が始まるまでにアルスに向かうように、ミンネに伝えてくれんかの」

「そんな事よりって：つか、オレはテグレスの奴隷じゃないってーの！」

「どこの反抗期の子供じゃよ」

テグレスは思わずつつこむ。

「うるせえな、こんな扱いされたら反抗したくもなるぜ」

「ほほう、お主、わしに向かってそんな態度を取るということは、アレがどうなっても良いという事じゃな？」

「うっ、そ、それは：まさか：お前：」

テグレスの意味深な台詞を聞いた途端、リゲルはあからさまにたじろいだ。

「分かったら、さっさと行くのじゃ」

「ちっ、わ、分かったよ。行きゃあ良いんだろ、行きゃあ」

忌忌しげに捨て台詞を吐くと、リゲルはやけに焦った様子でその場を去って行った。

「さてはて：」

リゲルが去った後、テグレスは感慨深げな表情を顔に浮かべて、周りを覆う木々の間からちらちらと覗く青々とした空を見上げた。

「：ラトスよ、見ておるか。お前とフィリナが何よりも望んだことが、ようやくと、果たされようとしておるぞ」

テグレスは天に向かってそう告げると、しばらく天を見つめつけた後、ふいに考え事をするように顔を俯けた。

―ゴールテス地方・スピルナ公国首都アルス―

「ふわああ…」

期せずして西の端から東の端まで横断して来た広大なるスピルナ公国。その全ての国土の総本山として存在する首都アルスを見て、スウは感嘆の声を上げた。

人生の大半をセル国にあった人里離れた山小屋で過ごしてきたスウにとっては、ジークと出会った日にパテルを丘の上から一望した時、この世にこれほど大きな街が存在したのかと、信じれない思いだったのだが、たった今、目の前に広がるアルスの規模に比べれば、パテルは本当に田舎街だったのだと思い知らされた。

パテルでは、それを囲む城壁は端から端まで視界に入っていて、その丸い形がまるでケーキみたいだなどと冗談も言ったものだったが、このアルスは、まだ遠く離れた場所から眺めているだけだというのに、ごちゃごちゃとした玩具のように連なる町並みがどこまでも続き、とてもその全てを視界に収めることなど出来なかった。

アルスは周りを山々に囲まれた盆地で、街の上に目をやると、青々とした美しい山腹が遥か遠くに見えた。ジークによると、東端の山の麓に、目的地であるフェルメ・エトワル城があるはずだという。しかし、こんなに大きな街を通り抜けて行くとなると、それだけで相当な時間がかかってしまいそうだとスウは思った。

「スウ、そんな所に突っ立ってないで、さっさと行くぞ」
前の方からジークが急かす声が聞こえる。

「えー、ちよつとぐらいいーじゃん」

スウは不満そうに抗議した。

「そりゃ、ジークさんは前に来たことがあるかもしれないけど、あたし今まで、こんなおっきな街なんて見たことないんだもん」

「そうは言っても、もうクレオスナ祭は近いんだぜ。街の景色なんて、また今度見に来れば良いだろ」

「ふえ、また連れて来てくれるの？」

スウは驚いたように言った。

「ああ、気が向いたらな」

「：信用できないなあ」

ジークの言葉を濁すような言い方に、スウは疑わしげに言った。
「ったく、分かったよ。今度またちゃんと連れて来てやるから、今は早く行くぞ」

「しょうがないなあ：」

スウはなおも不服そうにそう言うのと、諦めたようにジークの後に
ついて行った。

中に入ってみると、アルスという街が、ただだっ広だけの街
ではないことが、スウにはすぐに分かった。クレオスナ祭の影響で
特別賑わっていることを差し引いても、この街の賑やかさは他に類
を見ない物だった。

街が広いのと同時に人口も多く、需要が大きいためか、そこら辺
の店の規模一つとっても、スウが今まで見てきたどんな街にもない
ような大きさだった。もちろん、少し見渡すだけで面白いものばかり
見つかるそんな場所で、あのスウが目的地までまっすぐ歩けるは
ずもなかった。

「ね、ジークさん見て！ケーキ屋さんがあるよ！あれ買って！」

スウは道の脇にあるケーキ屋のショーケースにある、展示用の直
径八十センチはあるかといういかにも高級そうな巨大なケーキを指
差して言った。

「：あんな大きなケーキ買ってどうするんだよ」

「そんなの、一人で食べるのに決まってんじゃない」

何を馬鹿な質問をしているのか、と言わんばかりの調子で即座に
答えるスウ。

「つーかお前、さっき昼飯食ったばかりだろ」

「そんなの、関係ないもん」

スウは頬を膨らませながら抗議するように言う。

「とにかく、オレは買わないからな」

ジークは構わずそう言って、さっさと先へ進もうとした。が、ス

ウは諦める様子はなかった。

「買ってくれないと…買ってくれないと…」

スウはそう言いながら段々と声を震わせていった。

「買ってくれないと、何だよ」

ジークは挑戦的に聞き返す。

「……ぐすん」

まるでこのタイミングを狙っていたかのように、スウは今にも涙を零さんばかりに目をうるうるさせて鼻を吸った。

「…ったく、今回が最後だからな」

こんな大通りの真ん中で泣かれてはまずい。ジークはどこか良いように操られているのを感じつつ、根負けして言った。

「わーい！」

そしてジークのその言葉を聞いた途端に、さっきまでのスウの泣き出しそうな憐れっぽい様子は、まるで初めから無かったかのようになりをひそめ、その顔には入れ代わりに満足げな笑顔が現れるのだった。

ジークが気を変える隙を作らせまいと足早にスキップして店に向かうそんなスウの様子を見て、ジークは心の底から大きくため息をつくのだった。

そんな調子で何度も途中で足留めを食いながら、ジークはアルスの東端にあるフェルメ・エトワル城に向けて歩を進めて行った。祭の準備で混み合う街の中を通り抜けるのは予想以上に大変な事で、予定よりもかなり進度に遅れが出ていた。スウは辻馬車に乗れば良いといったが、こんな状況ではむしろ馬車の方が身動きができなくなってしまうのは明らかだった。

結局、その日の夜になっても城には辿り着けず、今夜は宿に泊まることになった。ここしばらくずっと歩き続けで疲れの溜まっていたスウは、久しぶりにベッドで寝れると素直に喜んでいた。

そんなスウとは真逆に、ジークの方はというと、ふいに思いついたある疑問が心の端の方に引っ掛かっていた。

あの新手の悪魔に襲われた町を見て以来、悪魔は何故か一度も自分達を狙って来ていない。それは、これまでの襲撃の頻度から考えると、どう考えても不自然な隙間だった。もしかすると、誰にも見えない場所で悪魔が何か新しい策を進めているのかもしれない。安宿のベッドに寝転んだ時、そんな疑問が頭を過ぎったのだった。

こちらから悪魔たちの居場所が分からない以上、こんなことを思い悩んでも仕方がないとは思いつつも、それが気になってその晩、ジークは余りぐっすり眠ることが出来なかった。

あくる朝は、クレオスナ祭開催の前日に当たる日の始まりだった。スピルナの中でも言うまでもなく最も巨大な街であるアルスは、それだけ住んでいる民族の種類も多い。したがって、アルスのクレオスナ祭は他に類を見ない色とりどりの祭になる。

実を言うとこれまで祭などというものを経験したことのないジークにとっては、人々がどうしてこうも祭に興奮するのか不思議で仕方がなかった。クレオスナ祭は本来、いわゆる建国記念の祭だと聞くが、恐らく一般の人々にはそっちの意味よりも「祭」という言葉そのものの方が重大視されているらしい。

だいたい一週間も祭を続けて、その間の経済などは大丈夫なのだろうか。そんなどうでもいいことを考えつつ、ジークは人混みの中を黙々と東に進路をとった。さしものスウもこの人混みの中では気になるものを見つける度にちよこまか動き回ることもできないので、道草を食う事もなく後ろをぴったりとついて来ている。

「ね、ジークさん、まだお城には着かないの？」

スウは少し疲れた声で尋ねてきた。人混みのせいで歩くだけでも余分な体力を消費する状態なのだから、仕方のないことだ。

「もう少しだ、我慢しろ」

ジークは向かい側から歩いてきた、ローブに身を包んだ一団を避けながら言った。少し遅れてスウもそれに続いてくる。

「ぶー」

スウは頬を膨らませて不満を表現したが、はっきりと反論することはしなかった。

「ぶーつつたってしょうがないだろ。それとも、クレオスナ祭の間エトワル城で振る舞われる、スピルナトップクラスの高級料理は知らないのか？」

ジークは『高級料理』という言葉をやざとらしく強調して言った。そして、その効果は覲面だった。

「ージークさん、何もたまたしてんの。早く行こうよお！」

数秒後、さっきまでの二人の位置関係は完全に逆転していた。ジークが少しでも気を抜くと、すかさずスウの催促が飛んで来るので、ジークはどれだけ疲れても全く歩調を緩めることもできずに歩き続けなければならなかった。こんな事になるなら、『高級料理』などという禁句は口にすべきではなかったと、言ってしまった後でジークは後悔の念に苛まれるのだった。

そんなこんなでその日の昼過ぎには、二人は無事にフェルメ・エトワル城に到着したのだった。

現在、世界で最も広大な領土を持つスピルナ公国。その総本山である首都アルスの、さらにその総本山であるこのフェルメ・エトワル城は、まさにその名に相応しい城だった。実は、ジークが初めてここを訪れた四年前、まだこの城は存在しなかった。その二年後にスピルナ動乱が終結し、その時からアルト家のために急ピッチで建築されて、つい最近やっと完成したという、まだ出来立てはややの城なのである。

急いで作ったという割にはその建造・装飾にはまったく手抜きはなかった。今までほとんど城というものを見たことがないジークでさえ、これほど見事な城は他にないだろうと直感してしまうほどだった。

この城は周りを山々に囲まれた天然の要塞であり、この城に近付くには唯一山のない西側から入るか、険しい山を越えて来るしかない。その上、山を越えて来た軍隊は山の急な斜面を下るまでの間、

城からの射撃の恰好の的になる羽目になる訳だ。

それで敵が攻め込んでこれるのは西からだけということになるのだが、こちらは城の正面にあたり、堅固な城壁と鋼鉄製の城門、そしてその城壁に無数に開いた矢狭間が敵をお出迎えする事になる。

パーティーに呼ばれて来たというのに、何を物騒な事を想像しているのだろうか、とジークは心の中で自嘲した。戦争だの悪魔だのと、今まで何かと危険な目にばかり遭って来たせいかな、どうしてもこういう感覚が身に染みついてしまっているようだった。

そう思うと、城の機能や戦略性などにはまったく興味を持たず、ただ城で出てくるというおいしい料理を少しでも早く食べたいが為に、今にも走り出さんばかりにうずうずしているスウの素直さが羨ましく思われた。気持ちの切り替えがはっきりしているというか、マイペースというか、どちらにしてもそういう気楽さが、自分には足りないような気がした。

「早く行こうよ、ジークさん！」

そう急かすスウの声を聞いて、ジークはやっと我に返り、スウに引っ張られるがままに歩いて行った。

フェルメ・エトワル城の門は、普段は大きく開かれていて、番兵の許可さえ下りれば、誰でも簡単に中に入れるようになっていた。どうやらこの体制は、スピルナ公アルデバランの平等主義と関係がある様なのだが、それにしても随分と無用心に思えた。

実際、ジークが番兵に用向きを伝えると、番兵はちゃんとした確認を取ることさえせずに二人を通してくれた。逆に疑わしく思える程に、その手続きはあつというまに終わってしまったのだった。

ジークが番兵にアトルの居場所を尋ねると、北側の塔だと教えてくれた。北の塔への道順を教わると、ジークとスウはどこか拍子抜けした気分で北の塔へ続く廊下に向かった。

どうして、こんなに無用心でいられるのか不思議で仕方がなかった。平等主義をアピールするにしても、リスクが高すぎるように思

えてならない。これでは、例えば暗殺者なんかも簡単に城に忍び込めそうだ。

そんな風な事を考えながらぼーっとして歩いていると、初めて見る城の内装を興味深げに目移りしながら眺めていたスウの鼻が、ふいにピクンと動いた。

「ねえねえジークさん、なんだかおいしそうな匂いがする！」

スウは俄然興奮した声で言う、さっそく匂いの元を辿ろうと辺りを嗅ぎ回りはじめた。

「おい、スウ、勝手に変な所に行くなよ」

ジークはそう注意したが、スウにはそれを聞いているそぶりは全くなく、相変わらず己の鼻の指し示す道筋をたどり続けている。その素早い動きと来たら、下手な暗殺者よりも速いのではないかと言うほどだった。どうやらいくら止めても聞きそうにないので、仕方なくジークはその後を追った。

これまで嗅いだこともないようなおいしい匂いに気を取られるあまり、目を閉じたまま、まるで一本釣りされる魚のように歩いていたスウは、ある角を右に曲がった時、その行く手から一人の人間が歩いて来ていることに、まったく気づかなかった。

そしてその結果、当然ながらスウは角を曲がる瞬間に、その人間におもいつきりぶつかってしまった。

「きゃっ」

「ひゃぶっ」

二人は短い悲鳴をあげて、ぶつかった衝撃で地面に尻餅をついた。その拍子にスウのポーチからオカリナが飛び出て、乾いた音をたてて石畳を転がった。

「：ふわわ、ごめんなさい！だいじょうぶですか？」

スウは、何が起こったのかわかると、すぐさま謝罪した。

「ええ、大丈夫よ。あなたこそお怪我はない？」

ぶつかった相手の女性は優しい声でそう言って、地面に落ちたス

ウのオカリナを拾った。女性はそれをスウに返そうとしたが、なぜかふいにその手が止まった。

「おい、何やってんだよ、スウ」

そこにジークが遅れてやってきた。そして状況を一瞬で判断すると、相手の女性に謝ろうと口を開きかけたが、その女性の顔を見て「あ」と声を上げた。

「なんだ、お前か、ミンネ」

どうやら女性はジークの知り合いだった様だ。ミンネと呼ばれた女性の方も、ジークを見てすぐにそれと分かったようだった。

「あら、お久しぶりですわね、ジークさん」

ミンネは丁寧な口調で挨拶した。

「…この人、ジークさんのお知り合い？」

スウはジークを睨み、やたら刺のある声音で尋ねた。

「お前、何か早速誤解してないか？」

ジークはその鋭い視線に恐々としながら窘めるように言った。

「あら、この子、あなたの連れなの？」

ミンネもまるでそれに合わせるかのように、ジークに意味ありげな視線を送りつつ、どこか冷たい声で言った。

「お前も変な言い方するな。話がこじれるだろ」

『この人とどういう関係なの』と言わんばかりのスウの焼け付くような視線を感じながら、ジークはそう言っただけ息をついた。

「とにかく、こんな所で立ち話もなんだから、とりあえずどっかで座ろうぜ」

ジークは話を逸らすようにそう提案した。

「それなら、私の部屋がすぐそこですよ」

悪のりしたミンネは、あからさまにこやかな表情でそう言うのだった。

「ふえ、それじゃあなたもリイトなんですか？」

案内されたミンネの部屋の椅子に座って、スウはどこか拍子抜け

した声で聞き返した。

「そういうこと。普段は吟遊詩人として旅をしているのだけど、今回はあなたたちと同じように、クレオスナ祭のパーティーに呼ばれてきたんです。もちろん、あなたのジークさんとの間には特別な関係はありませんから、安心してくださいね」

ミンネは上品に笑いながら、スウの反応がかわいいものだから、ついからかってしまったのだと釈明した。

「ちよつとまでミンネ、『あなたのジークさん』ってどういう意味だ」

ジークはミンネがさらつと言ったセリフに慌てて聞き返した。

「それは…つまり、そういう事でしよう？」

ミンネはいたずらっぽくそう言っていると、問い掛けるようにスウに目を向けた。

「えへへ…つまり、そゆこと」

スウは顔をほんのり赤らめて、照れたように言った。

「お前も肯定するなよ」

ジークは再びため息をつきながら言った。

「あ、そういえば、」

その時ミンネが思い出したように言った。

「ねえスウちゃん、ちよつといいかしら。このオカリナの事なんだから…」

ミンネはそう言って、さっき自分が拾って返したスウのオカリナを指し示した。

「ふえ、このオカリナがどうかしたんですか？」

スウは首を傾げて尋ねた。

「それ、カレハっていう女の人から貰ったのでしょうか？」

「そうですけど…どうして知ってるんですか？」

スウは不思議そうに聞き返した。

「もちろん、そのオカリナの事は誰よりも良く知っていますよ。だって、それはもともとは私の物だったんですもの」

ミンネはそのオカリナをどこか感慨深げな表情で眺めた。その時スウは、カレハがこのオカリナに宿る魔法の力について説明するとき、『前の持ち主』と言う言葉を使っていたのを思い出した。すると、このミンネがその『前の持ち主』だったという訳だ。

「ふえ、それじゃあ、このオカリナの魔力の事も、よく知ってるんですか？」

スウは興奮した声で聞いた。もしそうなら、幻の町でスウが使った魔法の謎が解けるかもしれない。

「…もしかして、このオカリナの力を使ったの？」

ミンネは驚いたように言った。

「ああ、前に悪魔と戦った時にな」

ジークが説明した。

「あの時コイツがオカリナを吹いたら、悪魔が作り出した幻覚が消えたんだ」

そう聞いたミンネは、さっきまでの天真爛漫な笑顔から一転、至極真面目な表情で考えに耽るように黙り込んでしまった。そして、オカリナとスウを交互に見比べて、最後にスウの顔をじーっと見つめた後、ふいに口を開いた。

「ねえ、スウちゃん、宜しければ、そのオカリナを少し吹いてみてくれませんか？」

そう言うやいなや、ミンネはどこか慌てたように自分の荷物の中を掻き回して、そこから一つの豎琴を引っ張り出した。

「たぶん、『そよぐ風』はカレハさんに習ったでしょう？」

そう問われてスウは首肯した。カレハから教わった数少ない曲の一つで、スウも一番気に入っている物だった。しかし、ミンネがスウの一番好きな曲を言い当てたのが、偶然なのかどうかはわからなかった。

「それじゃあ、私が伴奏しますから、それに合わせて吹いてくださいね」

ミンネは手早く豎琴を構えながら言った。突然のデュエットの申

し出にスウはびっくりしたが、ミンネが豎琴の弦を優しく弾いてゆつくりと前奏を弾き始めると、どういう訳か心が落ち着いて、俄然やる気が出てきた。

四小節分続いた豎琴の前奏の後に、スウは唇をオカリナにあてて息を吹き込んだ。

柔らかな風に森がざわめき、地面を照らす木漏れ日がゆらゆらとダンスをする。優しく流れる葉擦れのメロディーに合わせ、あちらに揺れて、こちらに揺れて、楽しげに舞い踊る。そんな情景を思い浮かべさせる、明るい曲。なぜだか、この曲はスウにどこか懐かしい感情を呼び起こさせた。遠い、心の奥底に沈んだ、もはやそれがなんだったのかすらも思い出せないような昔の記憶の、ほのかな暖かさ。

そんなものをイメージしながら、スウはオカリナを吹いた。ミンネの奏でる豎琴の伴奏がそれを上手にサポートしてくれるので、最初の緊張が過ぎ去った後は、面白いくらいにスウの思い通りに曲を形作っていくことができたのだった。

演奏が終わると、ミンネはまた少し考え込んでから、微笑んて言った。

「：どうやら、そのオカリナは、千三百年ぶりに真の持ち主にあえた様ですね」

「ふえ、どういう事ですか？」

突然言われた言葉にスウは訳がわからず聞き返す。

「私には、人が楽器を弾くのを聞けば、その楽器と弾き手との相性がわかるんです」

ミンネは言った。

「そしてあなたも知っての通り、そのオカリナには特別な魔法の力が宿っています。あなたがそのオカリナの真の持ち主であるということには、きっと何か運命的な意味があるはずです」

「運命：？」

スウは引き付けられるようにその言葉を繰り返した。

「実は、私はそのオカリナに秘められた力の謎を解き明かしたくて、そのオカリナの真の持ち主をずっと探していたんです」

ミンネは熱っぽく言った。

「今、お前が『千三百年ぶりに』って言ったのも、そのことと関係があるのか？」

とジークは尋ねた。

「ええ、そうです。正確に言うのであれば、千三百三十五年ぶりということになります」

ミンネは言った。

「ちよっと待てよ。今年がユースナ暦の千三百三十七年だから、ちょうど今の暦が始まってすぐの頃って事か？」

「そういうことになりますね」

ミンネは答えた。

「…あの、ミンネさん、その話、聞かせてくれませんか」
スウが少し緊張した声で言った。

「ええ、もちろん、あなたは知るべきでしょうね」

ミンネはスウを見つめて言った。

「それでは、お話ししましょう。そのオカリナに纏わる物語を…」

第八章「The Guardian and The Destruction」完

第九章 「クレオスナ祭」

昔々、当時このゼンロ大陸の北に存在した大陸にあったと言われるゴルゴダという帝国に、『シオンの姫』と呼ばれる世にも美しい姫君がおりました。姫は世にも珍しいアメジスト色の瞳と、類い稀なる美しさを持ち、またこの上なく心優しい清い心も持っておりました。

姫は音楽の才能を生まれ持ち、彼女がオカリナを吹けば小鳥たちが集まり、その音色に聞き惚れました。またその笛の音は人々の傷ついた心を癒すことができました。それで彼女は、その才能を人々のために惜しみなく使いました。

ところでちょうどその頃、私達の住むこの世界は五十年の間続いたかつてない巨大な戦争のただ中にありました。これが現在も伝説として語られる『大戦乱』です。

運よく姫が育つ頃は、ゴルゴダ帝国は休戦状態にありましたが、やがて再び戦争に参加することを余儀なくされました。そしてかりそめの平穏のうちに育った姫も、『大戦乱』の悲惨な現状を否応なく実感することとなりました。国と国が戦争し、人と人が殺し合う、その余りに酷い現実を目の当たりにして、平和を愛する心優しい姫は悲嘆に暮れてしまいました。

自国の民だけではない、他国の民のことまでも気にかけていた彼女は、戦争に対する恐怖のあまり、次第に心を閉ざすようになって行きました。何より、戦争を止めるために何もできない自分の無力さに対する己の身をも焼くような怒りが、彼女にとって最大の負担でした。

そんな頃、姫は奇妙な夢を見ました。その夢の中には煌めく光の球のようなものが現れて、不思議な美しいメロディーを響かせていました。その曲には神聖な魔力があって、それを聞いた姫の心は次第に癒されていきました。

そして光の球は姫に、この曲を奏でて、地上で苦しむ人々を救うようにと言いました。その奇妙な夢から醒めた時、姫の手には見たこともない模様が描かれたオカリナが握られていました。

その朝、姫はそのオカリナをくちびるにあて、夢の中で聞いたメロディーを奏でてみました。するとその瞬間、それまでどんよりと曇っていた空が、あつという間に晴れ渡りました。そしてその音を聞いたすべての生き物の傷や病気が癒され、満たされたような幸福感を覚えたのです。

それが、五十年間続いた史上最大の戦争が終結する、前代未聞の奇跡の始まりとなるのでした。

そのオカリナによって奏でられる音色によって、姫は人々を癒し、その心を惹きつけて行きました。すると、長く続いた戦争に疲れ果て、平和を望んでいた人々は彼女の元に集まり、いつしか大軍勢となっていきました。人々は、世界各地で続いている戦争を諫めるために、どの国家にも属さぬ平和維持軍、リイト騎士団を結成しました。

リイト騎士団は、世界に平和を取り戻すという大義の元に、強い団結力と士気を武器に各地の戦争を次々に平定していきました。そうやって平和を取り戻した国の人々はリイト騎士団に感化され、騎士団に加わって行ったので、リイト騎士団はその度にさらに強い力を手に入れて、それによって別の国を平定していきました。

そして遂に、たった一人の姫の行動によって、数え切れない犠牲者を出し、大地を荒らし切った戦争、大戦乱は幕を閉じたのでした。

「ーんじゃ、もしかしてそのお姫様が使ったオカリナが、これなんですか？」

スウは話のスケールのあまりの大きさに、到底信じられないという様子で聞いた。

「そういうことです。と言っても、なにせ千三百年前の事ですし、

あくまで伝説ですから、この話のどこまでが本当だったのかは、今となってはもう分からないんですけどね」

語り終えて一息ついたミネは、独特の語り口調を和らげて、元通りの声に戻して答えた。

「ふええ…」

スウはため息を漏らし、手元のオカリナを見つめた。

「それじゃあ、幻の町でスウが悪魔の幻影を消せたのも、その力を使ったっていう事なのか？」

ジークが合点がいったように言った。

「恐らく、そういうことなのでしょう。あなたの瞳の色の事を考えても、きっとあなたは『シオンの姫』と何か深い関わりがあるのでしょーうね。そして、そのためにオカリナはあなたを主とみなした、と考えるのが妥当でしょう」

ミネはスウを見つめて言った。

「ふえ、でも、あたしは…」

スウは少し当惑したように曖昧な声を出したが、ふと口をつぐんでしまった。事情を知らないミネには分からないだろうが、ジークにはスウが言いかけた内容が分かっていた。

まだ確かな証拠がある訳ではないが、スウは悪魔だ。今まで、瞳が紫色なのも悪魔であるが故だと思っていた。そんなスウが、本当に英雄的な存在である『シオンの姫』と関わりがあるのだろうか。

「実を言うと」

ミネは言った。

「『シオンの姫』に関しても、そのオカリナに関しても、まだ分かっていない事が多いんです。だから私は、そのオカリナの真の持ち主を探し出すことで、その秘密について調べようとしていたんです。それで、カレハさんに渡して、誰かそれらしい人に出会ったら渡すようにお願いしていたんです」

「それが偶然スウの手に渡って、スウがそのオカリナの力を使った、って言うことか。偶然にしては出来過ぎだな」

ジークは考え込むように言う。

「ええ、きつと、始めからこうなるように運命が働いていたんでしょね」

ミンネは言った。

「あの…」

しばらくの間が空いた後、スウが遠慮がちな声を上げた。

「ミンネさんは、その、『シオンの姫』がオカリナで吹いた曲がどんなだったか、知ってるんですか？」

それを聞いて、ミンネはなるほどという風に頷いた。

「もちろん知っていますよ。実を言うと、彼女の吹いた曲は、人々の間に広く広まり、語り伝えられてきたので、知るのには苦労はしません。ただ、『シオンの姫』が吹いた時のような魔法の力を発揮できた人間は、今まで一人もいませんでしたが。もし良ければ、クレオスナ祭の間に教えてあげましょうか？」

「ふあ、良いんですか？」

スウは嬉しそうな声で聞き返した。

「もちろん」

ミンネはスウの素直な様子に、つい顔を綻ばせて言った。

するとちょうどその時、ミンネの部屋の扉をノックする音があった。そこでミンネが立ち上がり歩いて行って扉を開くと、客人を部屋の中に招き入れた。

「…おや、ジーク殿、こんな所にいたんですか」

ジークとスウの姿を認めて、どこか呆れたような声を出した客人は、アトルだった。

「城に来たという報告を受けたのに、いつまで経っても僕の部屋に来ないから、心配していたんですよ」

「悪いな。ついミンネと話し込んでたから、忘れてた」

ジークは悪びれもせずと言う。

「ふあ、そうだった！」

その時スウが突然、思い出したように大声を上げた。

「ど、どうしたんだよ」

その大声を至近距離で聞いたジークは、キーンとする耳を庇いながら聞いた。

「あっちからおいしそうな匂いがしたんだった！」

言うが早い、スウは匂いの元を探り、それを腹一杯食べ尽くすという使命感に燃えて、早速部屋を飛び出そうとした。それをジークが服の襟首を掴んで何とか捕まえる。

「何アホな事やってんだよ」

「ぶー」

ジークに諭されて、スウは不満げに頬を膨らませた。

「まあまあ、焦らなくても料理なら後で好きなだけ食べられますよ」
アトルもそう言って宥める。

「バカ、コイツに好きなだけ食べさせてたら、アルト家が破産するぞ」

ジークは冷静な声で忠告する。

「はは、面白い冗談ですね」

アトルはそう言って軽く受け流したが、ジークがそれにまったく反応しないのを見て、ふいに底知れぬ不安に襲われた。

「も、もちろん、冗談…ですよね…？」

念のためと思って確認するが、それに答える声はなかった。

その後、ジークとスウにはクレオスナ祭が終わるまでと、北の塔の二階にある一室が宛がわれた。その必要以上に広い豪華な部屋には、茶色いカーペットが敷かれていて、二つの大きなベッドや見晴らしのよいバルコニーなどがあり、礼服を持ち合わせないジーク達へのアトルの配慮か、パーティーに出るときに着る為のドレスもあった。

夕食は時間になったら召し使いに運ばせるから、それまでは自由に過ごしていい。そう言われて、長旅の疲れがとれないジークは夕食の時間まで寝て過ごそうと思ったのだが、城のパーティーに

呼ばれるという貴重な体験に興奮してか、スウの方はやたらと元氣一杯だった。そういう訳で当然、スウはジークに寝かせるような事はしなかったのである。

それで、その一日が終わる頃には、ジークは疲れを取るどころか、逆に新たな疲れを溜め込んでいた。そんな憂鬱な状況のジークにさえも、給仕によって部屋に運ばれてきた料理の豪華絢爛さには目を見張るものがあつた。しかも、その料理でさえ、明日のパーティーで出される物に比べれば何でもないというのだ。

それを聞いてジークは、アルト家の掲げる『平等主義』とやらが、一体どこまで実現されているのだろうと疑わずにはいられなかった。ほんの数週間前までいたレグラ地方の現状から考えると、ゴールテス地方のこの繁栄ぶりは余りにも不公平に思えた。

まあ、それはともかくとして、普段は別段料理という物に何一つ特別な興味を示さず、そこで売っている干し肉と新鮮で上等なカルビの違いも分からないという程に、食事のより好みもしない性格であるジークにもさすがにはっきり分かるほど、エトワル城の食事はおいしかった。ジューシーなステーキの一口を食べる毎にまるで魔法のように疲れが取れて行くような気さえもした。

さて、ジークにさえこれほど感銘を与え、感心させる料理である。当然、スウが大人しく割り当てられた分だけを食べて気が済むはずがない。それも、弱冠十二歳の少女に大人の一人前の食事が食べられるはずがないだろうというシェフの無駄な気遣いのせいで、スウの料理はジークに割り当てられた物よりかなり少なかったのである。

自分の分をさっさと腹に納めてしまったスウはしばらくの間、腹をゴロゴロ言わせながらジークの分を物欲しそうに見つめ、またジークに向かって懇願の眼差しを送っていたが、料理に夢中になっているジークは、その視線には気づかなかった。見つめても駄目、となれば、当然、行動に出る。

「…のわっ、おい！スウ、それはオレの分だぞ！」

言った時にはもう遅い。もはやそこにさっきまであったステーキの面影はなく、ただスウが至福の表情で口をモグモグさせているだけである。それ以外に、スウの今の目にも留まらぬ一瞬の行動を証明できるものは何一つなかった。

スウの小さな喉がコクンと肉を飲み込んだ。そして、まだ満足できないスウは早速次の獲物に照準を定める。が、当然今度はジークもスウの行動を予期していた。となれば、スウより先に残りを全部食べてしまえばいい。

スウとジークが同時にフォークを伸ばす。そして：今度もスウの方がほんの一瞬早かった。最後のステーキはジークのフォークが届く直前に横から掻っ攫われて、そのままスウの口の中に飛び込んで行った。

「ジークさん、このステーキおいしいね！」

そして悪びれもせずにジークに向かって微笑みかけるスウ。こんなひどい事をしておいてどうしてここまで純粋な笑顔が出せるのか、ジークには不思議でならない。

「オレは誰かさんのせいで殆ど食べられなかったけどな」

ジークは怨みがましい声で応えた。実際、ステーキに手を付け始めたばかりだったジークは、全体の四分の一ほどこしか食べられなかったのだった。

「えへへ、ごちそうさまでした」

満足げな声でそういうスウに、ジークはこれで累計何度目だろうと思いつつ深いため息を吐くしかなかった。

その日の夜、ジークがベッドで眠っていると、部屋の中で誰かが裸足で歩く、ごく小さな足音が聞こえた。普通なら、疲れてぐっすり眠っている人間の目を醒まさせるには到底足りないような音だが、感覚が鋭敏なジークは、その音に気がついて目を醒ました。

ちらっと足音のした方を見ると、カーテンも締め切って真っ暗になっていた部屋に、微かな星明かりが差し込んでいた。それを

目で追って行くと、バルコニーへの扉が開いているのが見えた。そしてそこに、もうすっかり見慣れてしまった華奢な人影が立っていた。

その様子を見た時、ジークは何か奇妙な感覚に襲われて、急に目が冴えてしまった。そして何かに釣られて行くかのように、ベッドを出て、そっとバルコニーに向かって歩いて行った。

そっとジークが歩み寄ると、ネグリジェ姿のままで、手摺りに手を置いて空を眺めていたスウは、ふっと無言で振り返った。光の加減で表情は分からなかったが、その動作から、スウの感情が何となく分かるような気がした。

「ジークさん…」

スウはごく小さな声で言った。もし、これほど辺りが静寂に包まれていなければ、聞き取ることはできなかっただろう。

ジークは何も言わずに、再び空を見上げるスウの隣に來た。そして横にいるスウに目をやると、星明かりで微かに青白く照らされたスウの横顔が見えた。

何も言わずじっと星々を見つめるスウは、複雑な表情をしていた。何かを訴えるような、懇願するような、問い掛けるような、そんな色々な感情の籠った、どこか物悲しげな表情だった。

そんなスウの計り知れない表情に、ジークはどう声を掛けていいか、あるいは声を掛けるべきではないのか、まったく分からずに、ただ当惑している事を気づかれなくなくて、スウに倣って淡々と夜空を見上げる事にした。紺碧の空には満天の星々が散らばっていたが、ジークにとってはそれはたいした問題には思えなかった。

そうして、どれくらい時間が経っただろうか、時間を示すものが何一つない真夜中のバルコニーでは、時間は一瞬にも思えたし永遠にも思えた。まるで、この場所だけが周りの世界の時間軸から切り離されて、独特の時間が流れているようだった。

「…あんね、ジークさん」

ふいに、今にも消え入りそうな声が、意味深な沈黙を破った。そ

のスウの声音に、どこかいつもと違うものを感じて、ジークは下手な受け応えをしてしまうのを恐れて、黙って聞いていた。

「ジークさんは…あたしの事なんか…嫌い、だよね」

スウは声を搾り出すように言った。

「なんで、そう思うんだ？」

ジークは夜空を無心に見つめたまま聞いた。

「だって、あたしなんか可愛くもないし、わがままだし、ジークさんに迷惑かけてばかりだし、それに…」

「そんな事、問題じゃないだろ」

ジークはどうしていまさらそんな事を言い出すのだろうと思いつつ言った。

「でも…」

スウは手摺りに乗せた左手を動かすようなそぶりを見せたが、結局くじけたように元の位置に戻した。

「なにかあったのか」

ジークが聞いた。

「夢を、見たの」

スウはそう言って石作りの手摺りをぎゅっと掴んだ。

「ジークさんが、あたしを置いてどこかに居なくなっちゃう夢…」

スウは微かに震えた声で言った。それを聞いてジークはやっとスウがこんな真夜中に起き出してきた理由が分かった。

「あたし、怖い…大変だけど楽しい今の生活が、ジークさんが、いつかどこかに消えちゃうんじゃないか、って」

「そんなの、ただの夢だろ。気にすることないって」

ジークは言った。

「それにしても、この前の事といい、お前はいつも怖がってばかりだな。そんなんでよく今まで生きて来れたもんだ」

「誰かさんと違って、苦労してるもん」

ジークの言葉にスウも少し安心したのか、つい釣られて軽口を叩いた。が、そんな自分を恥じるかのようにすぐに顔を俯けてしまっ

た。

「：お前は自分を過小評価し過ぎなんだよ」

そんなスウの様子を見て、ジークは言った。

「お前の過去に何があったのかは知らないけど、少なくとも今のお前は、お前が思ってるほど嫌われものじゃないと思うぜ」

「：ほんとに？」

スウは何かを見透かそうとするかのようにじっとジークを見つめた。星明かりが、潤みがちな二つの瞳にキラリと反射した。

「だって、そうだろう」

ジークは後押しするように言った。

「そりゃ、確かにちよつと、もとい、だいぶムチャクチャなところもあるけど、そういう所も含めて、全部がお前の魅力だろ？」

スウはまるで放心したかのようにジークを見つめ続けていた。それから、しばらくの間、落ち着いた静寂が漂った。ジークは相変わらずスウとまっすぐ目を合わせるのが気恥ずかしくて、ずっと星空を見つめていたが、気持ちは空とはまったく別の方向に向かっていた。

その時、突然スウが口を開いた。

「ふあ、ジークさん、あれ流れ星だよ！」

「え、どこだ？」

スウの言葉に反応して、ジークの注意が一瞬、空にそれた。

すると、その瞬間を見計らったように、何か温かくて柔らかいものが、ジークの右頬に優しく触れた。

始め、ジークには何が起こったのか分からなかった。少し経って、やっと今起こった現象を理解しはじめて、顔が熱くなるのを感じながらスウに目をやった。

「：スウ、お前、今：」

ジークは自分の右頬に手をやりながら、信じられない思いでのろのろと口を開いた。ジークの心臓は今や破裂しそうなほど激しく脈打っている。

「もう、ジークさんったら、単純なんだから」

スウはそんなジークの反応を楽しみ、また少し恥じらうように、愛おしげなほほ笑みを浮かべて言った。

「えへへ、おやすみなさい、ジークさん！」

スウは照れ臭そうな声でそういうと、放心状態のジークを一人残して、スキップするように自分のベッドに戻って行こうとした。

「…スウ、ちょっと待ってくれ」

その時、ジークは自分が何を考えているかも分からずに、ただ、自分の中の何かが『今しかない』と言っているのを聞きながら、スウを呼び止めた。

「なあに？ジークさん」

スウは首を傾げて振り返った。ジークはスウの問いには答えず、自分のベッドの脇に掛かった外套のポケットを探った。

「…これ、やるよ」

ジークは自分の声が照れと緊張で上擦っているのを感じながら、手に持ったものをスウに手渡した。暗さのお陰で真っ赤になった顔を見られないのが、せめてもの救いだった。

スウはジークからの思わぬプレゼントをよく見ようと、ベッド際のランプに火を入れた。すると、スウの周囲数メートルがぼうつと赤く照らし出された。

「ふわあ、綺麗…ジークさん、これ、どうしたの？」

スウは感嘆の声をあげた。その手の中にあるペンダントは、ランプの光を存分に受け止めて、美しくキラキラ煌めいていた。

「レイアークで買ったんだ。ずっと渡そうと思ってたんだけど、なかなかタイミングが掴めなくて…」

ジークは気恥ずかしく思いながら説明した。

「それじゃ、あたしなんかの為に、わざわざ買ってくれたの？」

スウは、信じられないような思いをその眼に宿してジークを見た。

「ま、まあ、な」

ジークは頭の後ろを掻きながら言った。

「ふわあ、嬉しい！ありがと、ジークさん！」

スウは心から嬉しそうに礼を述べたが、ふいにちよつとだけ顔を曇らせた。

「どうしたんだ？ 気に入らなかったか？」

「そんな事ないよ。ただ……あんまり綺麗だから、あたしなんかじゃ、釣り合わないんじゃないかなあって思ってた……」

スウは苦笑を作った。

「…ね、ジークさん」

少ししてスウはちよつと控えめな声を出した。

「なんだ？」

ジークが先を促す。

「もしいつか、あたしがこのペンダントに似合うような、立派な女の人になったら……あの……その時は、あたしのこと……」

スウはそこで言葉を切った。そして、その続きを言うべきかしばらく迷っているようだった。ランプの赤い光に照らされていたせいで、スウの顔が、尖り耳の先端まで真っ赤になっていることにジークは気づかなかった。

「何が言いたいんだ？」

一方、すこぶる鈍感なジークにはスウの考えている事が全く分らず、半ば先を急かすように聞いた。その言葉がスウに複雑な思いをもたらしたということも知らずに。

「……うん、ごめん……何でもないの」

スウはついに断念して言った。

「おやすみなさい、ジークさん」

そして、ジークに真意を尋ねさせる隙を与えずそう言って、ベッドに戻って行った。

「相変わらず、変なやつだな」

ジークはそうつぶやきながら自分も自分のベッドにもどり、ランプの蓋を開いて中の火をふっと吹き消すと、あつと言うまに眠りについた。

次の朝、ジークはバルコニーから差し込む朝日で眼が覚めた。何となく気持ちのよい朝だった。まるで、記念すべきクレオスナ祭の第一日目を、天が祝福しているかのようだった。あるいは、クレオスナ祭を心から祝う人々の心が、その雰囲気や空気の中を流れていて、それがこの朝を気持ち良く感じさせるのかもしれない。

「おはよ、ジークさん！」

ジークが目を覚ましたことに気がついて、バルコニーへ続く扉の枠に手を添えて外の景色を眺めていた、どこか楽しい表情のスウが言った。桜色のネグリジェがそよ風にヒラヒラと揺れている。

「…ああ、おはよう」

ジークは欠伸を噛み殺しつつスウに応える。

「それにしても、いい朝だな」

ジークはそう言いながらベッドを出て、スウの近くへやってきた。「ほら、ジークさん、寝癖ついてるよ」

スウは傍に来たジークの顔を見上げると、そう言って少し背伸びをしながらジークの頭を撫で付けた。

「寝癖ならお前の方がひどいだろう。もしかして、寝相悪いのか？」

そんなスウを一瞥して、ジークは言った。

「ふえ、そんなことないよう。そりゃたまに、起きたら枕がベッドから何メートルか離れたところに落ちてる事とかもあるけど…」
「…なにをどうしたらそんな事が起きるんだよ」

ジークは側頭部に跳ね出した自分の寝癖を撫で付けながら言った。「そんな事言われたって、寝てる間のことなんか分かんないよう」
まだ寝ぼけているような間延びした声で、もっともな事を言うスウ。

その時、部屋のドアをノックする音がした。

「はあい」

スウはそう言ってドアに駆け寄った。そしてドアを少し開いて訪

問者を確認すると、パアッと顔を輝かせた。

「ふあ、おはようございます、アトルさん！」

スウがドアを開くと、アトルが部屋に入ってきた。

「おはようございます、ジーク殿、スウさん」

アトルは二人に挨拶した。

「オレ達になにか用か？」

とジークが尋ねる。

「ええ、今日の予定について話しておこうと思ひまして」

アトルは言った。

「本日のエトワル城でのパーティーは夕方の六時から始まることになっていきます。ですので、それまでの間は、好きにしていってください。街でも色々な催しがあるので、街を見学してみるといいと思いますよ。」

今日はお二人は城は自由に出入りできるようにしてありますから、六時までには城に戻って、ドレスに着替えていてください」

それでは、と言うとアトルは部屋を出て行った。

「…だって、ジークさん！」

スウは大はしゃぎで言った。

「ね、街に行ってみようよ！」

「ああ、そうだな。別に城の中にも、することなんか何もないしな」

ジークは欠伸混じりに言った。今まで何度同じ事を思ったか分からないが、どうしてスウは、朝っぱらからこんなテンションでいられるのだろう。いくら本人が楽しくても、振り回される側は堪ったもんじゃない。

だが、逆にそんなスウの存在のお陰で、今のジークは、これまでの人生の中で一番、生きていると実感することができているのも事実だった。どうか、こんなスウと一緒に時間がいつまでも続きますように。ジークは心の中で、生まれて初めて神というものに祈った。

ジークとスウが着替え終わって、街に行くために廊下を歩いていると、途中で通り掛かった中庭に、誰かがいるのを見つけた。

その人影は、中庭の中央に据え置かれた噴水の縁に座っていた。まだ早朝の為、中庭には余り日光が入り込まず、大部分は影になっているのだが、その人影は影の中に座っていた。そのせいで、ジーク達のいる場所からは顔は余り見えなかった。

ジーク達が近づくと、その足音に気付いたのか、その人影はゆっくりと立ち上がって、こちらを振り返った。

「お前は、ジークか？」

そう言って歩み寄ってきた人物は、黒装束を着込んだ、漆黒の髪の少女だった。背の高さは、ジークよりちょっと下ぐらいで、女性にしてはまあまあな高さだった。

「なんだ、カーラか。久しぶりだな」

ジークはわざとらしくつまらなさげに言った。

「なんだとはなんだ。それでもこの国一番の精鋭部隊の隊長のつもりなんだがな」

カーラはため息をつきつつ言い返した。

「ねえ、ジークさん、この女、誰？」

スウはすぐさまジークを睨んで、冷たい声で尋ねた。

「スウ、お前、オレが女性に会う度にそれ言わないと気が済まないのか？ ちよつとはオレのことも信頼しろよ」

ジークは呆れた声で言う。

「コイツはカーラ・ゴート。精鋭部隊トランプの隊長で、アトルの上司だよ。これで充分か？」

とジークが説明する。

「おいジーク、今私を『コイツ』呼ばわりしなかったか？」

そこにすかさずカーラが割り込んだ。

「気のせいだろう。それよりカーラ、コレはスウ・ロ・ヤマ・イシユラーク。オレの旅の道連れだ」

ジークは軽くあしらって話を進めた。

「ジークさん、今あたしのこと『コレ』って言わなかった？」

「：気のせいだろう」

ジークは言った。

「それよりスウ、早く街に行こうぜ。じゃあな、カーラ」

ジークはそう言うのと、スウの手を引っ張ってさっさと行ってしまった。

「：まったく、いったい何のつもりなのだ？」

取り残されたカーラは、訝しげに一人ごちた。

「照れてるんですよ、きつと」

突然、背後からアトルの声がして、カーラは飛び上がりかけた。が、隊長の威厳を保とうと、ギリギリで平静を装った。

「アトル、お前、いつからそこにいた？」

カーラが尋ねた。

「さつきからずっといましたよ。それにしても、隊長は僕と二人きりになると、性格が一変するはずなんですがね。つまり：」

そう言ってアトルは一瞬言葉を切って、周りを見回した。

「ここから見えるどこかに、スパイがいるということになりますね」
カーラは、幼なじみであるアトルの前でだけ、いつも隠している本音が表に出てきてしまうという習癖がある。もしカーラがそれ以外の人間の気配を感じ取っていると、本人がそれに気づいているかどうかに関わらず、自然と本音が隠れてしまうのだ。

しかし、アトルが神経を張り詰めさせても、スパイがどこに隠れているかは分からなかった。

「はあ：今夜のパーティーくらいは、平穩に終わらせて欲しいんですがねえ」

「というかアトル、私を探知器がわりに使うな！」

アトルが余りにも当たり前前のように自分の特性を利用するので、カーラは少し苛立って言った。しかしアトルはマイペースに、

「いいじゃないですか、便利なんだから」
と窘めるのだった。

「チイツ、あの『継承者』、なんでオイラの存在に感づいたのさ！？」

中庭に面した二階のある部屋で、真っ黒な腕の長い悪魔・メトネスは一人呟いた。どうやら場所まではバレなかったようだが、存在が気付かれただけでも大きな損失だ。

「せっかく苦勞して城に入り込んだのに、無駄にする訳には行かないしね。といっても疫病神は出掛けちゃったみたいだし、仕掛けるのは今夜にするしさ」

メトネスはそう言ってケケケ、と笑った。

「コレが終われば、オイラ達の最終目的まで、後一歩だしね。この計画のために、耐え抜いてきた日々が、ついに報われるのさ！」

その時、メトネスのいる部屋のドアを開く音がした。メトネスが振り返ると、そこにはメトネスを見て啞然として、声も出せないでいる召し使いがいた。メトネスは心底面白そうにその召し使いの表情を眺めた。

「ケケケ、飛んで火にいる夏の虫！その体、使わせてもらうしね！」
数秒後、そこにメトネスの姿はなく、ただ、どこか様子のおかしい、糸で釣られた人形のようになった召し使いがいるだけだった。

―フェルメ・エトワル城 城下街・アルス―

「ふわあ、ジークさん、見て見て！」

大はしゃぎのスウはあっちこちに面白いものを見つけては、指差して喜んでいた。しかしその声も、周囲の人々の騒ぎ声のせいによく聞こえない。

クレオスナ祭第一日目の今日、アルスの活気はジークの予想を遥かに超えていた。あちこちでパレードやら大道芸やら出店やらが混在していて、それが様々な色彩で、それぞれの民族のありようを主

張するので、ジークには目がチカチカしてたまらなかった。

「ね、ジークさん、あそこにワッフル屋さんがあるよ!」

スウはジークの腕を掴んで言う。

「あるから、なんだよ」

ジークは答えを分かっているがら尋ねた。

「一緒に食べようよ!」

しかしスウの答えは、ジークの予想していたものとはまったく同じではなかった。

「スウ、お前が『一緒に食べよう』なんて珍しいな。いつもは自分だけ食べられれば満足するのに」

ジークがそういうと、スウは照れ臭そうにほほ笑んだ。

「えへへ、だって、たまにはジークさんのことも大事にしてあげなきゃ、いじけちゃうでしょ?」

「いじけねーよ」

ジークは言い返した。

「もう、強がっちゃって、可愛いんだから」

スウは何故か嬉しそうな様子で言った。

「強がってないし可愛くもない!」

ジークはつつけんどんに言い返した。

「そうやって人をからかっていると、ワッフルも買ってやらないぞ」

「じゃ、もうからかわないからワッフルちょうだい!」

それを待っていたと言わんばかりに、スウはジークの言葉尻を捉えて言い寄った。

「:なあ、いつも思うんだが、お前の言葉って、どこからどこまでが本気なんだ?」

ジークは嘆息して言った。今のスウの言葉のうちでも、どこまでが本音で、どこからがワッフルを買ってもらうための策略なのか、まったく分からない。

「もう、ジークさんったら、分かっているくせに!」

スウはそう言うのと、じゃれつくようにジークに擦り寄った。

「分かんねえよ。っていうか、くつつくな」

ジークはぶっきらぼうに言い、スウの手を振り払った。

「ぶー」

スウは不満げに頬を膨らませたが、ジークがワッフル屋に足に向けている事に気づいて、表情を一変させた。

「ふあ、ありがと、ジークさん！」

スウは嬉しそうにそう言うと、人混みの中をジークについて行った。そして、はっきり言うのが恥ずかしいので、本人にも周りの群集にも聞こえないように小声で付け足した。

「：ワッフルなんかより、ずっとずっと大好きだよ♪」

―フェルメ・エトワル城―

「それでは、これより、ユースナ歴1337年度・クレオスナ祭祝賀パーティーを始めたいと存じます」

主催者であるアルデバラン・アルトの声が響く。場所はエトワル城の大広間。昼間の街の賑わいとは打って変わって、上品で優雅に飾り付けられ、中央にダンスをするための広い空間を設けたパーティー会場は、まさに上臈の舞踏会というイメージそのものだった。ジークやスウやミネ以外の客は、恐らく皆、他の国などからやってきた賓客なのだろう。その見た目も、身のこなしも、それだけでその身分をはっきり表しているようだった。

「ふあ、ジークさん、この服歩きづらいよ」

周りの豪華な様子におどしつつ、スウが言った。スウが着ているのはアトルから渡されたすみれ色のドレスで、スカート丈は地面に擦れるほどある。それに加えて随所に施されている繊細で美しい装飾のせいで、ドレスというものを生まれて初めて着たスウは、歩くのも一苦労だった。

「やっぱり、こんなに豪華な服、あたしには似合わないんだよ」

ドレスのすみれ色や、右のこめかみに着けられた同じ色の髪飾りが、スウ自身の紫色の瞳ともマッチして、とてもよく似合っているのだが、スウはどうしても自信が持てないようだった。

「そんな事ないですよ、スウちゃん」

黄緑色のしなやかなドレスに身を包んだミンネは、ほほ笑んで言った。

「とてもよく似合っていますよ」

「…そうかなあ」

スウはまだ信じられないようすで言った。

「じゃあ、ジークさんは？この服、似合ってると思う？」

「え？ああ…ま、まあまあ、かな」

ジークは、スウに見惚れて顔が火照っているのがバレないように急いで顔を逸らしながら、心にもないことを言った。

「どうしたの、ジークさん？」

ジークがわざとらしくそっぽを向いているので、スウは心配した声で聞いた。

「え、あ、いや…なあ、スウ、ちょっとテラスに行ってみないか？」

ジークはそっぽを向いたまま言った。パーティー会場は、この大広間だけでなく、外に張り出したテラスもある。もう日は暮れたから、テラスに行けば明かりはオレンジ色のランプだけになる。そこでなら、スウにもジークの顔が赤くなっていることにも気づかないだろう。

「ふえ、いいけど…ジークさん、どうしてあたしの方を見てくれないの？」

「べ、別に…それより、早く行こうぜ」

スウは首を傾げながら、どこか様子のおかしいジークについて行くのだった。

おいしそうな食べ物を見かける度に手を出そうとするスウを、ジークは半ば強引にテラスまで引っ張って行った。むろん、その間一度もスウには顔を向けずに。

その途中、ジークとスウは何人かのウェイターとすれ違った。そして、その中の一人―なぜか他のウェイターよりもぎこちない動きをする一人―とすれ違った時、スウは何か奇妙な音を聞いた。周りの人間達の魂が発する響きが、緩やかなハーモニーを奏でている中で、一人だけ歯車が狂ったような音、無理矢理に動かされて軋んでいるような音、そして、ジークと初めて出会った日に聞いたのと同じ音―

「ジークさん、ジークさん！」

スウに呼び止められてジークは足を止めた。

「どうしたんだ、スウ？」

ジークはスウをちらっと見て言った。

「あんね、あそこにいるウェイターさん……」

スウは周りを憚って一旦言葉を切ると、ジークに近寄って耳打ちした。

「……ったく、なんでよりにもよって、こんな日に……」

ジークはパーティーの客に対して申し訳ない気持ちを募らせながら、ため息をついた。

「こんなところにいたんですか、隊長」

テラスの外の林の中にあつた空き地で、カーラを見つけたアトルが言った。

「パーティー会場にいないと思ったら、こんなところにいたんですね。ユピティエネが心配していたので、わざわざ探しに来たんですよ」

「私はパーティーは苦手だ。それより、『隊長』ではなくカーラと呼んでっていつも言ってるじゃん」

だんだんカーラの言葉遣いがくだけてくる。本音モードがだんだん表に出てきていた。

「そう言われても、隊長は隊長ですから」

対するアトルは礼節をまったく揺るがせずに言った。

「アトルったら、相変わらずお堅いのね」

カーラは子供みたいに頬をぷーっと膨らませた。

「それだけが取りえですから」

アトルは冷静に返した。

「それだけがアトルの短所じゃん」

とカーラは言い返す。

「だいたいアトルはいつも――」

その時、突然林の中から一人の少女が飛び出してきた。

「――あっ、カーラさまったら、こんなところにいらしたんですか！」

それはさっきアトルが、カーラを探していると言っていた人間で、カーラの侍女であるユピティエネだった。

「なんだ、ユピティエネだったか。人を驚かせるでない」

他の人間が乱入してきたことで、カーラの第二の人格は一瞬にして心の奥底に逃げ込み、トランプ隊長としての人格が現れた。

「カーラさま、そんな言い方ないじゃないですか。折角心配して探しに来たっていうのに！」

ユピティエネは侍女とは思えないような言い方で言った。

「それで、パーティーにはご出席なさらないおつもりですか？」

ユピティエネは言った。パーティーが始まる前から、カーラは不満タラタラだったのだ。

「まあな。私はパーティーは苦手だ」

カーラは腕を組んで言った。その顔は、自分の意見を頑として崩さないという意志を表明している。

「それなら、ちょうど良かった！」

するとユピティエネは、なぜか嬉しそうなようすで言った。

「そういうことなら、アトルさま、こんな所にいないで、会場で私と踊りましょうよ！」

ユピティエネは、すかさずアトルの腕に抱き着いて言った。そして、あからさまな優越感の籠った、意味ありげな一瞥をカーラに投

げかける。

「え、それは構いませんが…」

アトルはユピティエネの不意打ちに多少戸惑いつつも、氣遣わしげにカーラの方を見る。しかし、それを見たユピティエネはここぞとばかりに言い募る。

「ほら、アトルさま、こんなつれないカーラさまなんてほっという、私たちだけで楽しみましょうよ♪」

「で、でも…」

ぐいぐい押してくるユピティエネに戸惑いつつ、アトルは心を決めてため息をついた。

「しょうがないですよ。どうやら隊長は乗り気じゃないみたいですしー」

「アトル!!」

突然、怒号にも近いカーラの声が林に響いた。

「は、はい?」

その余りの迫力に、アトルはその場に直立した。

「私と踊れ! 今すぐに!」

ふつふつと沸き上がってきた嫉妬の念につき動かされたカーラは、命令口調で言った。

「はい!」

アトルは、これ以外の受け答えをしたら、ただじゃ済まされないだろうなと思いつつ答えるのだった。

「おい、お前!」

ジークはスウが指し示したウェイターの肩を掴んで呼び止めた。すると、そのウェイターはゆっくりと振り返った。

その真っ赤な丸い目と、同じく真っ赤な三日月状の口をしたウェイターは、スウを見てケケケ、と不気味に笑った。

九章 「Kreosna festival」 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2999x/>

フェトレアス物語～白銀の獅子～

2011年12月2日19時57分発行